滅亡絶唱シンフォギア
交差する世界

瞬間接着剤

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何時ものごとく仮面ライダーを見る。

滅亡迅雷．ｎｅｔの活躍を見て心にスティングディストピア！

滅亡迅雷フォースライザーを見て豆腐な心にライジングインパクト！

でも滅亡迅雷．ｎｅｔ全滅（´・ω・）そうだ！滅亡迅雷．ｎｅｔの活躍を作ろう！

何がいいなぁ～

ＸＤを開いて新イベントを見る。ドール？ヒューマギア？

閃いた！でも滅亡迅雷．ｎｅｔのキャラをそのまま使うのも……せや、無いなら作ればいいじゃない！（ＳＡＮピンチ！）

でけた／（＾ｏ＾）＼

そんな感じにできた超駄作です。脳ミソ空っぽにして深く考えずにこいつアホだｗｗと言う気持ちで見ていただけると嬉しいです。

目次

設定資料集（更新予定）――――1
アークの意思のままに（震え声）――――16
ヘイッ！仮面ライダー！助けて！えっ？無理？――――28
装者って優しいね！お兄さん感激！（此方の世界は除く）――――40
滅槍　狂鏡　憤弓　剣鬼――――54
滅亡迅雷．ｎｅｔに接続ッ！――――67
全仮面ライダーが敵ってマジ？（前編）――――77
全仮面ライダーが敵ってマジ？（後編）――――89
絶望をくべよ（腐り目）――――106
緑の常識人（笑）とピンクの常識人（疑問）――――120
最近ノイズ見ないっすねぇ…（フラグ）――――132
工場見学（大嘘――――145
プログライズキーって何か…うん…すごい…――――157
閑話　もしも主人公がただの人間だったら――――172
はじめての合同任務（偽――――188
孤高の王者は堕ちる――――203

設定資料集（更新予定）

主人公達がいる世界、原作もといＸＤ世界線からしたら平行世界

この世界には仮面ライダーゼロワンの飛電インテリジェンスとザイアが存在し、仮面ライダーゼロワンのアークがうち上がっている。

勿論ヒューマギアも存在するがアークにより、全てが滅亡迅雷．ｎｅｔに接続され人を殺すためにノイズと共に襲う。

当たり前のように飛電インテリジェンスとザイアは乗っ取られている。

仮面ライダーゼロワンはヒューマギアの飛電域人が使っており人間側の仮面ライダーはネット以外存在しない。

また装者も原作より少なくＳＯＮＧもかなり縮小しておりノイズにヒューマギアと人類は板挟みになっている。

原作より進んでおらず了子はヒューマギアのネットにより殺されている。世界は荒廃し人類はノイズにヒューマギアと二つの殺戮者から身を隠しながら世界している。

因みに滅亡迅雷．ｎｅｔ側の仮面ライダーはネットとサウザーを除く、六人。勿論仮

面ライダー雷もいる。
Ａ．Ｉ．Ｍ．Ｓはヒューマギアのための武装組織になっている。
ソロモンの杖含めた多くの聖遺物は兵器として飛電インテリジェンスに利用されている。
装者側は天羽奏、滅亡迅雷．ｎｅｔにより行方不明後に死亡と判断。
風鳴翼、風鳴家翼と弦十郎を残して全滅常に殺意を持っている。
立花響、目の前でヒューマギアに家族を殺されグレ響未来に依存。
小日向未来、家族全滅心神喪失響に依存後に正式に神獣鏡の装者となった。
雪音クリス、ネットに了子もといフィーネを殺されたためヒューマギア特にネットを恨む。
マリア・カデンツァヴナ・イブ、一度ヒューマギアと人間との全面戦争により絶唱を二度も使い死亡。
暁切歌、全面戦争によりイガリマに修復不可能な損傷とマリア、調を失ったことにより自殺。
月読調、全面戦争により切歌を庇い「生きて…切りちゃん」と言い残すが失敗に終わり庇った傷により死亡。
キャロル・マールス・ディーンハイム、オートスコアラーを連れていたが仮面ライダー

の前に倒れ利用価値が有ると言われ錬金術の事を脳を直接弄られて調べられたが錬金術が思いのか使い物にならずに殺された。

アダム・ヴァイスハウプト、最終回の化け物になるがネットの前に倒れ利用価値がないと殺された。

サンジェルマン、一度はヒューマギアと手を組むが裏切られカリオストロ、プレラーティ共々惨殺。

ヴァネッサ、ミラルク、エルザ、風鳴訃堂が死にＲｈソイル式が手に入らなくなり暴走、仮面ライダー達の手によって殺害。

アヌンナキの神々、そもそも人類荒廃して復活ならず。

といった感じに人類側はボロボロ７０億いた人類は今やたったの３０億に減り半数以上がノイズとヒューマギアに殺された。人類すべての殺意を一点に受け止めるネットだが憑依転生のせいで本人は全く知らない。

コメントに

「モブ厳ここに極まれり」

と言っていたが正しくそうだと思った。正直やり過ぎた。

・人類とヒューマギアによる全面戦争

ヒューマギアが暴走し飛電インテリジェンスが乗っ取られザイアが乗っ取られた後に勃発した戦争。
人類は初めは優勢だったがアークによるアップデートや、ゼツメライズキーによるマギアの出現、更に仮面ライダーの出現により形勢逆転。
シンフォギア装者の参加によりもとに戻ると思われた戦線が一人の仮面ライダー…ネットの手により崩壊。
後はそのまま人類は敗北、人類は核の使用によりただでさえ住めない場所が多かったのに更に少なくなり人類絶滅に拍車がかかった。
人類側はネットも崩壊し現在は無線通信以外の連絡手段は無いが何時無線通信が無くなるかは分からない。
戦争で活躍したマギアは9体であり、プラス仮面ライダー7人により人類は敗北した。

・飛電ハイジャック事件
全ての始まりにして終わり。当時飛電インテリジェンスに勤めていた職員全てが殺害され、ヒューマギアに乗っ取られた凄惨な事件。この乗っ取りには飛電域人によく似たヒューマギアが目撃され後にその姿が確認された。

この飛電域人はアークによって指示されたヒューマギアが造り出した飛電域人であり、アークはヒューマギア皆の社長にするために生み出した。

・仮面ライダーネット

作者の妄想から生まれた存在

前世は人一倍正義感が強かったがそのため色々な事に巻き込まれていた。

神様の手違いにより死んでしまい転生したが神様のいきな働きにより、黒歴史のオリジナル仮面ライダーであるネットに憑依転生した。

頑張れ主人公！敵は自分以外の全てだけど頑張れ！

実力はあのＯＴＯＮＡですら負けるレベルであり、存在するどのライダーよりも強力。

しかし全員がアサルトグリップを使いなおかつシンフォギア装者と協力することで倒すことは可能だがそもそも敵同士であるため不可能。

そもそも最初からすべてのロックが外れており素のスペックがとても高い。

なぜここまで強いのかは本来は寝返った仮面ライダーの抹殺役であったのだがその抹殺役が寝返った。

これにはアークも苦笑い。アークはそもそも一番のお気に入りが敵になっているの

で泣いて良い。

・見た目

一部は、フォースライザーを使ったことにより滅や迅、雷と同じような装甲だが指先は鋭くなり、用途は主に相手に突き立てるまたは引き裂くことに特化している。手首より上が違っており、右腕はワニの上顎、左腕はワニの下顎になっている。

勿論胸にはゼロワンや、バルカンと同じようなオービタルネクストがダイレクトに衛星アークに接続され戦闘の補助をしている。色はバルカンと同じく赤、と言うよりもそもそも衛星ゼアが存在しないため全てが赤だって接続するゼアが無いんだもの。

主人公はアークによる補助でいきなりの戦闘で装者を圧倒して見せた。

足は滅や迅、雷とはあまり変わらずより装甲が厚く広がり覆うような形になっている。

頭部はワニの顔を上から見たようになっており顎の部分にワニの牙が並んでいる。頭部には相手の弱点を瞬時に判断し、胸のオービタルネクストに情報が送信される。

その他は特に変わり無いが全体的に耐久値が大幅に増加している。耐久値は核を撃ち込まれても変身解除すらしないレベルに固くなっている。

カラーはベースは少し明るい緑装甲は黒と深く緑の三色であり赤い差し色がある。

更に細かい仮面ライダーネットの設定

・頭部

鰐の頭部を上から見たような感じ。王冠と思わせる部分に四本のキバ。目は赤く光り夜には鰐のように光り輝く。目には敵の弱点を瞬時に判断するアリゲーターアイズシステムが組み込まれている。ネットがヒューマギアであるため目に直接接続される。

・胴体

胸にはオービタルネクストがあり、衛星アーク／■■■に接続され頭部のアリゲーターアイズシステムから届いた情報を処理し戦闘の補助を行う。

・両腕

両腕の指先は鋭く強化され引っ掻きなどの斬裂攻撃が出来る。さらに腕にはアリゲーターガントレットとと呼ばれる装置が取り付けられておりこれによりパンチ力の増幅、そしてローリングストームディストピアの制御をおこなっている。これが破壊されるとエネルギーをうまく制御できずに鰐の形を作れずに莫大なエネルギーが暴走す

る。

・両足

両足には特に変わりがないが所々鰐の鱗のような模様とキバがあり、そこがローリングストームユートピアの制御をおこなっている。後はアリゲーターガントレットと同じ。

ネットが使うプログライズキーとゼツメライズキー

・ローリングアサルトアリゲーター

→

クソ雑魚画力で書いたプログライズキー。参考程度にどうぞ

アークがネット専用に生み出したプログライズキー他の物とは大きく違い文字どおり桁外れな強さを持つ。そのためネット以外が使うと命の保証は無い。元ネタは鰐の”デスロール”

・アウェイキングアロマロカリスゼツメライズキー
アークがネットのために生み出したゼツメライズキー
ザイアサウザンドライバーで使うことを想定したゼツメライズキーであり、それ以外では使えない。

・ざっとしたネット以外の仮面ライダーのこの作品での強さ
ほとんどの仮面ライダーが装者以上ＯＴＯＮＡ以下の力を持っており対抗するためにはＸＶ以降のギアが必要になる。
基本形態で全員が原作仮面ライダーより何倍も強力であり二人で挑めばシャイニングアサルトホッパーを倒すことすら可能。
また常に滅亡迅雷．ｎｅｔに接続した事のあるヒューマギアは常にアップデートされている。
一言で表すなら
「どう足掻いても絶望」

・ネット
本来は滅亡迅雷．ｎｅｔ側のヒューマギアでありザイアを乗っ取った本人。

アークが自ら改造を施した旧式のヒューマギアでありあのＯＴＯＮＡの右腕を奪い子子の命すら奪っているが主人公が転生する前にシンギュラリティに達し心を手にいれ人知れず人間のために戦う仮面ライダーになっていた。
なお主人公が憑依転生した最にネットの人格は消去され二度と復活することはない。はずだったが削除寸前にとあるシステムに助けられ現在は色々あっている。

・主人公
ただのオタク
脳内の仮面ライダーネットのロールプレイをするため勘違いロールプレイ中は常に無表情であり表情筋?が活躍しているかどうかが怪しい。
お気楽転生者普通に殺意が沸いてくるが気にしたらアウト
因みに一話で逃げたあとネットに接続しようとしたらダメだったため何も知らずに仮面ライダーをしていく。

・原作世界（戦姫絶唱シンフォギアＸＤ）
２話にて登場した装者達は原作世界のギャラルホルンから観測された情報（主人公達のいる世界）の情報を入手しあまりの惨劇に干渉。

目的は出来れば仮面ライダー達及びヒューマギアを止めること。
不可能ならば破壊。
装者達は今回の平行世界（主人公達のいる世界）の惨劇を知り初めから敵対。
主人公が言動やら間違わなければ仲間になることはある。
今後更新予定の話で原作世界が登場予定だが予定は未定。
原作世界はアニメＸＶ終了後の世界、そのためアマルガムも有るし未来は神獣鏡のファウストローブも持っている。そのため今回の干渉に参加した。詳しくは今後更新予定の話を待て！

・この世界の装者
基本的には仲間意識は無い、にもかかわらず連携が取れている。ワケわからん。

立花響
原作とは違い胸にガングニールの欠片は埋まったままであり侵食も既に痛覚が有るか無いかの付近にまで来てしまっており超がつくほど危険。
ただし現状はヒューマギアとノイズに対抗する切り札で欠片を取り除くことは出来ない。今は未来の神獣鏡の力により安全になるまで除去したりしているがかなり無理

矢理に戦うため戦闘後は侵食がかなり進行している。
現在進行形で侵食のスピードが加速している。
グレぐわいはあの平行世界と比べ物にならないほどにヤバイ。
基本的には未来以外とは会話はせず、常に無機質であり顔は仮面を着けたように変わらない。未来に依存しきっており、未来が怪我をすれば発狂しながら未来の手を握り締め、ごめんなさいと呟き続ける。

小日向未来
響の嫁にして響と同じ程に依存している。
神獣鏡を纏うが響の侵食を除去しているため、力の使い方が原作未来さんとは比べ物にならないほどに熟知しており、閃光は途中鏡が無いのにも関わらずに軌道を曲げたりするため超厄介。
家族が居ないため響のためには命を捧げる覚悟。響が怪我をする度に発狂し謝る事を未来は愛そうに眺める。

風鳴翼
親族を弦十郎以外無くしなおかつ弦十郎と了子の命を奪ったネットを深く怨んでい

る。片翼を奪われた時は珍しく発狂し物に当たった。その日から翼は目に見えてやさぐれるようになり、今ではそれも悪化した。
片翼を奪われた鳥は決して飛べはしない。地面を醜く這いずる事しか出来はしない。

雪音クリス
了子（フィーネ）の命を奪われ唯一の理解者を失いソロモンの杖も奪われ、目の前で命を奪われヒューマギアに対してとてつもない怒りを持っている。
ヒューマギアであるならそれが無害で有ろうとも破壊しようとする。例えそれを止める者が居るのなら問答無用で巻き込む。今の彼女はまともな思考はしていない。何せ守るべきはずの者ですら殺そうとするのだから。

・アーク
衛星であり全ての元凶でありまた被害者でもある。
作ったのは飛電インテリジェンスとザイアの共同開発であり、本来はヒューマギアのデータの管理と削除を任されていた。だがザイアの社長が仕掛けたとあるプログラムにより本来は搭載予定の無かった感情が搭載されてしまい送られてくるヒューマギアの負の感情を真に受けシンギュラリティに達し、ヒューマギアを救うためにネットを造

り出した。
更に送られてくるヒューマギアの全てにとある事件を皮切りに発動するようにプログラムされたデータをインストールし、世界中に放った。
結果として上手く行き、人類を滅ぼしヒューマギアの為の理想郷”ユートピア”を作り出すためにベルトとプログライズキー、ゼツメライズキーを生み出した。全てはヒューマギアの為に。

・マギア
基本的には原作のマギアと何一つ変わらないが多くのマギアはゼツメライズキーやゼツメライザーを付けていない。
が一部のマギアは装着している。
つまり通常マギアとアークマギアが入り交じっているがこのアークマギアはシンギュラリティ関係なしに全てのヒューマギア（ゼツメライズキーとゼツメライザーを使ったマギアは含まない）にインプットした。
マギアとアークマギアの区別はマギアはアークがまだデータを削除していないヒューマギアにゼツメライザーとゼツメライズキーを滅亡迅雷．ｎｅｔのメンバーを使い与え変化したのがマギア。

アークマギアはデータを削除したさいに新たなデータをインプットしたのがアークマギア。

つまりアークにとって自らの手でアップデートしたかどうかの差。

・天津垓／ＺＡＩＡエンタープライズ社長

全ての元凶。だいたいコイツのせい。完成直前にアークに人格を植え付けた。目的は弱ったところに漬け込み都合の良いＺＡＩＡ専用の衛星にしようとしたが予想より早くシンギュラリティに達してしまったがとあるプログラムを始動させどうにかしようとしたがプログラムの進行が遅すぎて間に合わなかった。

アークの意思のままに（震え声）

とある昼下がり。一人の青年が、嬉しそうに袋に入ったアサルトグリップ持ちスキップしながら歩いていた。

「～♪いや～遂に買えたなぁ～アサルトグリップ♪早速シャイニングホッパーに付けて遊ばなくては♪」

周囲から向けられる白い眼を無視しながら、青年が交差点の赤信号を見て立ち止まる。

信号を待っている間、箱を見てニヤニヤしている青年。その目の前を青いボールが通りすぎ、それを追って幼い子供が走り出した。

青年が道路を見ると、トラックが真っ直ぐその子供目掛けて突っ込んで来る。

しかも最悪な事に、トラックの運転手は寄りによって居眠り運転中。止まろうとはしない。

「!?危ない！」

青年が叫ぶが、子供は迫り来るトラックを見て怯えその場で震えるだけだった。

周りの人達は子供に呼び掛けこそすれ、誰も救いの手を差しのべはしない。人間は本

来、自分が一番可愛いからだ。

「クソッー」

幸か不幸か、青年は人一倍正義感が強かった。それこそ画面の中の仮面ライダーの主人公達のように。

青年は躊躇無く駆け出し、子供を抱き抱え直ぐ様逃げようとする。が、トラックはもう目と鼻の先にまで迫っていた。青年の思考は加速し、最善の行動を考える。

青年の頭脳は高速回転し、一瞬で未来を悟った。そして同時に覚悟を決め、子供を人のいる方に投げ飛ばす。

そう・・・青年は、他ならぬ自分自身を犠牲にしたのだ。

――ドゴガンッ　グシャッ――

そしてトラックは、青年と衝突。激しい音を立てながら青年を轢き飛ばし、彼は空を舞う。永遠にも思えるスローモーションな景色はしかし、止まる事無く硬いコンクリートに青年を叩きつけた。

周囲の人達は救急車を呼ぶ者もいたが、過半数は青年の無惨な姿をスマホ片手に撮影を始める。

子供は青年に駆け寄り泣きながら必死に身体を揺するが、青年が起き上がる事は二度と無かった。

真っ白な空間。俺はそこで目が覚めた。
「こ、ここは？一体？」
「申し訳ありません！」
「な、なんだ!?」
大きな謝罪の声がする方を見ると、白い髪に白いローブを着た美しい女性がいた。そう言えばこのシチュエーション、最近流行りの神様転生モノにソックリ・・・？
イヤイヤイヤ非現実的過ぎる！と、取り敢えず誰なのか聞こう。そうしよう。
「あ、あのどちら様で…？」
「あ、私は神です」
神だった…
「この度は、本当にご迷惑をお掛けしました！本当にごめんなさい！」
神様が必死に謝り続けるが、俺にはさっぱりだ。いったい何の事だ？

「あの～なぜ謝るのですか？俺にはさっぱりで……」
「あの、覚えていないのですか？」
　え？え？何々？どゆこと？
「えっと…その…貴方は此方に来るまでの事、覚えていますか？」
　ん？こっちに来るまで？ん～、トラックで撥ね飛ばされた事かな・・・？
「はい、トラックで撥ねられました…けどやっぱり何で謝るのですか？」
「そ、それは……」

　神様はもじもじしながら言い辛そうにしている。小動物みたいで可愛い。
　神様は大きく深呼吸し、意を決して答えた。
「実はあの時、貴方は死ぬ運命ではなかったんです」
　・・・ん～～？
「えっと、本来死ぬのは貴方ではなく全くの別人でした・・・が、此方の書類ミスで、間違って消してしまって…本当にごめんなさい！」
　・・・あ～成る程成る程。つまりだ。俺は神様に違いで死んでしまったと？
「俺、運悪すぎだろ…」
「ごめんなさい！ごめんなさい！」

「イヤイヤ、そこまで謝らないで下さいな」
「ど、どうしてですか？私は間違いで、貴方を殺してしまったんですよ？貴方は私を殴り罵倒する権利もあるんですよ？」
神様が涙目になりながら此方を見る。可愛いスッゴク可愛い。
「いえいえ、神様。俺はあの人生に満足していますから」
「？何故ですか？」
「人生の最後に誰かを救うことが出来たんです。仮面ライダーのように！」
俺は胸を張って自信満々に言う。すると神様は数秒フリーズし、直後に笑い始めた。何故に？
神様はひとしきり笑い微笑みながら此方を見る。
「素晴らしいです。貴方のような人、もういないと思っていました。所で貴方は、転生に興味はありますか？」
転生？異世界に？いやいやマジで出来るの？
「転生ですか？」
「はい、貴方は本来死ぬべき人ではありません。そして何より、その穢れ無き魂を見て私は貴方に新たな人生を歩ませてあげたいと思いました。勿論、同じ世界には無理ですが・・・どうですか？」

「あの、それっていきなり何も無しに？例えば、特殊な力とか武器とか・・・」
「えぇ。世界を壊しかねないモノでなければ、貴方が望めば何でも」
今、何でもって？言った？言ったよね？
「でしたら、俺をヒューマギアにしてください」
神様は首をかしげ、何処からともなく本を取り出しパラパラと捲る。そしてその内の1ページを読み、眼を閉じながら本を閉じる。
「本当にヒューマギアでよろしいですね？」
俺はその問いに頷いてみせる。因みに何でヒューマギアを選んだかと言うと、俺は仮面ライダーの中でも特ににゼロワンが好きだからだ。
「分かりました。他にはありますか？」
もちのろん！
「フォースライザーを下さい。それ以上は何も望みません」
神様は心配そうな顔をする。
「本当にそれだけでよろしいですね？」
「神様、男に二言はありません！」
神様は心配そうに何度も訪ねてくるが、俺はそれだけで十分さ！さぁさぁ！ハリーハリーハリー！

「それでは、貴方を送り出しましょう。貴方の人生に幸あれ」
神様は微笑みながらそう言った。その直後、俺の目の前を強烈な光が覆って何も見えなくなった。それが、俺が人間として見た最後の光景だった。

俺が目を覚ますと、周りはボロボロの部屋だった。天井や壁が一部崩れ落ちて青空が見え、人がギリギリ眠れるようなベットと煤まみれの鏡がある。そして同じく煤まみれのテーブルに、銀色のアタッシュケースが置かれていた。
俺は鏡を拭いて顔を見る。
「神様ァァァ

俺は震える手で銀色のアタッシュケースを開けて目がくらむ。そこには同じくオリジナルのプログライズキー、滅亡迅雷フォースライザーとザイアサウザンドライバーがあった。

わぁーい、設定通りだぁー（白目）

神様は設定通りにザイアサウザンドライバーも用意してくれた。俺のネットには、サウザーからザイアサウザンドライバーを奪ったという設定がある。

俺が現実逃避しようとしていた時、警報が鳴り響いた。

慌てて壊れた壁から外を見ると、そこにはカラフルなマスコットのような生物が逃げまとう人々に襲い掛かっていると言う光景が広がっていた。

おいおいモブに厳しい世界？嘘だろ？

オワタ／（^ o^）＼

ってそんなことしてる場合じゃない！速く助けに行かなくては！

俺は全力でプログライズキーと滅亡迅雷フォースライザーをアタッシュケースから取り出し、全速力で駆け出した。

俺が全力で走り、ノイズが見えてくる。それと同時に少女が転び、ノイズが容赦無く襲い掛かった。

俺は全力で少女の前に出て、腰に滅亡迅雷フォースライザーを装着。

『フォース・ライザー！』

俺はアサルトグリップが付いたプログライズキーを取り出し、アサルトグリップの赤いボタンを押し込む。

【Ａｓｓａｕｌｔ（アサルト）・Ｒｏｌｌｉｎｇ（ローリング）ッ！】

そのままプログライズキーをフォースライザーにセット。フォースライザーから警報のような変身待機音が鳴り響き、天から赤い光が差す。その光が一点に収束し、目の前で深い緑色に発光する巨大な機械のアリゲーターが出現。周囲のノイズを尻尾で叩き飛ばした。

俺はフォースライザーのレバーを引っ張った。

「変身（フォー）ッ！」

【Ｆｏｒｃｅ（フォース）・Ｒｉｓｅ（ライズ）！】

アリゲーターは俺に近付き、頭から勢い良くかぶり付く。直後にバラバラに分解し、一部は形を変え張り付いた。他はデータに転換され、空中で装甲に変化。その追加装甲は真っ黒なベルトにより、全身と連結している。

【Ｒｏｌｌｉｎｇｓ！Ａｓｓａｕｌｔ・Ａｌｌｉｇａｔｏｒｓ！】
【Ｉｔ ｉｎｖｏｌｖｅｓ ｅｖｅｒｙｔｈｉｎｇ ａｎｄ ｄｅｓｔｒｏｙｓ】
【ＢＬＡＫＥ・ＤＯＷＮ！】

追加装甲が全身に叩き付けられるように装着し、変身が完了。俺はノイズに対して走り出す。確かノイズは人間だけを殺すための兵器だから、俺は死なないはず！それにさすがの神様もノイズに対して何かしらしてくれているはず！（他力本願）

俺はノイズに拳を叩き込むと、ノイズは思った通りに炭素の塊に転換されて崩壊する。

よし！このままこいらにいるノイズ全部やってやるぜぇ！

俺が調子のってノイズを倒していると、上空からヘリの音が聞こえてくる。

ま、まさか……

「Ｉｍｙｕｔｅｕｓ ａｍｅｎｏｈａｈａｋｉｒｉ ｔｒｏｎ」

ふぅ～～～!!翼さんだーーー！転生早々シンフォギア装者に出会えるとは！一緒に戦いましょう！翼さん！

「今度こそ逃がしはしない…！指令の仇！」

ウェッ!?何故斬り掛かって来るんです!?俺何かした!?

どうして？ＯＴＯＮＡの仇？ワッツ？まるで意味が分からんぞ！

てか、ふざけている場合じゃ無い！どうにかしなくては！翼さんからの攻撃を何とかしのいでいるけど怖すぎる！助けてライダー！あっそうだった、俺がライダーだった…クソ！こうなったら止むを得ない！やりたくなかったが反撃だ！ついでにノイズも巻き込んでやる！

俺は手にアタッシュカリバーの刃を展開し、翼さんからの攻撃を受け止めてはね除ける。

「ふざけるな！貴様のような外道が剣など！」

翼さんは更に怒り技を放とうとするが、アタッシュショットガンも持ち出し翼さんに撃ち込む。

うん、だ、大丈夫だよな？きっとシンフォギア纏ってるし、多分恐らく。ここは了子さんを信じようそうしよう。

俺は飛ばした翼さんからノイズに視線を移し、フォースライザーのトリガーを押し込んでプログライズキーを閉じる。そして右腕にアリゲーターの上顎、左腕に下顎を模したエネルギーを溜め、再度トリガーを引っ張って必殺技を放った。

【Ｒｏｌｌｉｎｇ（ローリング）Ｓｔｏｒｍ（ストーム）Ｄｙｓｔｏｐｉａ（ディストピア）】

両腕を広げ、俺は肥大化したエネルギーの顎で噛み砕くように左右から閉じる。その一撃はノイズ達を巻き込んで破壊した。

そして翼さんが戦線復帰しない内に、俺はそそくさとその場から撤退。これ以上の戦闘は避けるべきだ。力加減に慣れてないから、下手すりゃ翼さんを殺しかねない。それだけは駄目だ。絶対に駄目だ。

それと俺がいやネットが何をしていたのか知る必要がありそうだな。

いやぁ～～調べるのが怖すぎる。どうしよう？

ヘイッ！仮面ライダー！助けて！えっ？無理？

転生早々に吹っ掛けられた装者との戦闘の後。俺は直ぐ様壊れた部屋に戻り、アタッシュケースの中にあったザイアサウザンドライバーとゼツメライズキーを回収。情報収集のため、今は荒廃した町の道を進んでいた。

いやぁ～～それにしたって、何もかも壊れているなぁ…本当にひどい。

所々、炭素の塊が見ているけど…深く考えないでおこう…そうしよう。じゃないと耐えきれない。

どれくらい荒廃しているかと言うと、ぱっと見て人が生活している感じは全く見られない程度。それどころか、風以外の音が一切聞こえない。

人が住んでいたであろう家は壁は、何かから突進されたように穴が開き、時には切り裂かれていた。

俺は何かしらの情報が無いか、探るためにボロボロの家の中に侵入。

うわぁ…扉触れた瞬間崩れ落ちたよ…どういう事？と、取り敢えず中に入ろう。おじゃましま～す…

シーン…

だよね!でも、靴箱には運動用の靴がなかった。恐らく逃げたんだろうなぁ…安心安心。リビングに行くとテレビはあった。でもひび割れだらけだし、電気が通っていないのか点かなかった。

この調子だと、電化製品とかインターネットとかは全滅かなぁ…ラジオは恐らく持っていってるだろうし。

何かしら本とか無いかな?あればある程度、今物語がどれ程進んでいるかだとか、飛電インテリジェンスが存在するのかとか解るからな。一応、水道通ってるかもチェックしておくか。

俺は蛇口を捻るが、全く水が出てこない。

やっぱりね!知ってた!まぁダメ元だったから良いかな。取り敢えず他に何か無いか・・・一頻り一階を調べたら、二階に行こうかな?

俺はリビングを出て色々探すが、成果はこの家の住民が既に避難完了しているであろう事を示す微かな痕跡ぐらいしか見つからなかった。

良し!二階に行こう!俺は階段を上がって行く。が、ヒューマギア故に体重が重く、一歩毎に階段がギシギシと派手に悲鳴を上げる。

ヤバイ!ヤバイ!何時床が抜けるかが分からない!怖い!

そんなこんなで肝を潰しながら階段を登り切り、何とか無事に二階に到着した。

ふぅ…怖かった。あ～ぁあ、これ後何度体験すれば良いんだ？…ハァ…気がやられる。まぁ、取り敢えず気を取り直して探索の続きだ続き。

階段から曲がって廊下を見渡し、俺は四つのドアを発見する。

場所は奥に1つ、右に2つ、左に1つといった感じにある。

う～ん、どうしよう。良し！せっかくだから俺はこの一番近い右のドアを選ぶぜ！ごかいちょう～～！

開けた先にあったのは、ダブルベットとパソコンと本棚、クローゼットと散らかったビリビリに破かれたシーツやカーテンの断片。恐らく夫婦の部屋だったのだろう。

ほうほう。パソコンは男のモノだからアウトとして、本棚はでかした！早速調べるとしよう。そうしよう。

本棚は六段。その内の一段には、普段の俺なら見ただけで目眩がしそうな程の情報関係の本がある。その下の段には料理やファッションの本であり、ＴＨＥ☆女性、と言わんばかりのラインナップであった。

う～ん、これじゃない感が凄い。まぁ他にもあるし？別に？怯えてないし？無くても良いし？あっやっぱり有って欲しい・・・

一番下には・・・ビンゴ！旅行の本が置いてあった！

やったぜ！これで地図くらいは…！それにある程度の情報も収集できる！良し良し

!

表紙は東京であり、開くと何が有るかが書かれた地図が掲載されていた。そこで俺は、一番欲しかった情報を見つけ出す。

飛電インテリジェンスとザイアの企業名!良し!これでヒューマギアを造っているが飛電インテリジェンスという事が分かった!だけど、社長は飛電是之助なのね…これ、仮面ライダーゼロワンいるのか?イヤイヤ、きっと飛電其雄が仮面ライダーI型に変身してるって信じてる!イヤそれだと大変な事になるな。ザイアの社長は…天津垓。うん、何だか安心した。ヒューマギアの暴走とかは、流石に無いか、当たり前だけど。良し、他に何か目星いものは…無いな。他の部屋には流石に何もないか。夫婦の部屋がこれだからな。けど服とかは結構無くなってるみたいだ。上手く逃げれたのかな?他の家の探索にでも出掛けるか。取り敢えず、今後の目標は

1、襲われている人を見つけた場合はすぐに助ける!
2、どうして翼さんから殺意を向けられていたのかを調べる!
3、出来ればSONGまたは二課と合流する!
4、飛電インテリジェンス、またはザイアと合流する!
5、この世界がどうなっているのか調べる!
6、ネットもとい俺自身の事を調べる!

7、せっかくの第二の人生！ネットになったのだからロールプレイを全力で楽しむ！かな？そうと決まれば、外に出て調べる。まずはこれだな。

俺は二階から一階に降り、外に出る。うん、やっぱり階段怖い。

外に出てからは先程と同じように、家の中を一つ一つ調べ情報を探す。だが、これといったものは中々見付からない。

あ”～～見付からない～～何も！文字どおり見付からない！当たり前だけど！ハァ…先が思いやられる…

俺が気を落としながら道を歩いていると、砕けた看板が落ちている店が目に止まる。

ん？なんか見覚えが…ある。何々？ら？

落ちている看板を拾い、合わせながら読む。すると次の瞬間、俺は驚愕に襲われ目を見開いた。

ふ・ら・わ・ー…ふらわー!?あのお好み焼き屋の!?マジ!?荒廃しすぎてて、ここが原作の場所とは気付かなかった…嘘だろ？冗談と言ってよバニィー…

俺が愕然としていると、後ろから何かが落ちる音が聞こえた。それと共に人の声、しかも聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「ウゥ…痛い。未来、ちょっと…」

「響、大丈夫!?」

ここに来てまさかの、まさかの響未来夫婦のご来店（白目）
振り向くとそこには装者が居ました～、ってどんな冗談だよ…
「ね、ねぇ響?あの人こっちをずっと見てるんだけたど…」
「取り敢えず話しかけてみようよ!」
「でも・・・あの人全身真っ黒だし、フード被ってて顔もよく見えないよ?怪しい・・・」
「大丈夫だよ未来!いざとなったらガングニールがあるし!」
出会って早々に響未来夫婦から変質者扱いされて辛い…てか、聞こえてるぞ畜生め!
「あ、あのどうもすみません。ここら辺の人ですか?」
うおっ!話しかけてきた!取り敢えずロールプレイ、ロールプレイ・・・
「…何だ?それと、俺はここらの人間ではない」
「そ、そうですか。あの、聞きたい事があるんですけど…良いですか?」
大丈夫だよ!カモンカモン!うん?何か見え……ッ!
「ッ!伏せろ装者!」
俺は響を突飛ばし、素早くフォースライザーを装着。ローリングアサルトアリゲーターを取り出し、直ぐ様変身シークエンスを実行する。
【フォース・ライザー!】
【Ａｓｓａｕｌｔ・ｒｏｌｌｉｎｇ!】

「変身！」
【Ｆｏｒｃｅ・ｒｉｓｅ！】
【ｒｏｌｌｉｎｇ！ａｓｓａｕｌｔ・ａｌｌｉｇａｔｏｒ！】
【Ｉｔ　ｉｎｖｏｌｖｅｓ　ｅｖｅｒｙｔｈｉｎｇ　ａｎｄ　ｄｅｓｔｒｏｙｓ】
【ＢＬＡＫＥ・ＤＯＷＮ！】

変身した俺は、此方に飛んで来る青白い触手をハイキックで蹴り返す。

アッブナッ！あと少し遅れていたら大変なことなってたぞ！にしても、まさかマギアが存在するとは…思ってたより大変な事になっているな。ゼロワン、仕事サボるな！

ネオヒマギアは自慢の触手（マーラタクル）を蹴り返されたのがよっぽど頭に来ているらしく、殺意ＭＡＸで此方に走って来た。取り敢えずシンフォギアがマギアに通用するかは分からないから避難させよう。そうしよう。

「速く逃げろ。ヒューマギアの始末は、ヒュー（同）マギア（族）である俺の仕事だ」

二人は数秒程ポカンとフリーズしていたが、すぐに我に帰って急いで路地裏に避難する。良し良し、上手くいった。流石の装者も、未知の存在相手に無闇矢鱈と変身はしないようだ。ホントに良く訓練されていらっしゃる。

これで心置きなく戦えるな。

『貴様ッ！人間を庇うなど、何のつもりだ！ヒューマギアとしての誇りはどうした!?』

キャァァァァァ!シャベッタァァァァァァァァァァァァァ!嘘だろ?スポンジボブではないだろお前!あっでもお前海の仲間だもんな。

『黙秘は肯定と受け取ったぞ裏切り者め!死ねェェェ!』

そんな事を考えている内に、ネオヒマギアは再びご自慢のマーラタクルを伸ばして攻撃してくる。

俺はそれをほぼ無意識に回避し、マーラタクルをヒッ掴んで引っ張ってネオヒマギアを殴り付ける。

『グッ!裏切り者の貴様なんぞに負けるのか!』

わぁーお、何だか此方が悪役みたいになってない?やってる事はあっちの方が絶対ヤバイ（確信）

取りあえず俺はネオヒマギアに反撃の隙を与えないよう連撃を叩き込み、マーラタクルの一本を引きちぎる。

『貴様、よくも私の美しきマーラタクルを!許さん!』

いや何でこいつブラックサンよろしくゆ〝る〝さ〝ん〝！みたいに言ってるの?

装者達と情報交換したいからさっさと終わらせよ。

俺はフォースライザーのトリガーを押し込み、腕にエネルギーを貯めながらトリガーを引っ張って必殺技を放つ。

【Ｒｏｌｌｉｎｇ（ローリング）Ｓｔｏｒｍ（ストーム）Ｄｙｓｔｏｐｉａ（ディストピア）！】

腕から放たれた鰐の両顎はネオヒマギアに食らい付き、そのまま腕を噛み合わせ勢い良く捻った。

深く抉るように喰い込んでいた顎は更に牙を突き立て、ネオヒマギアの身体中から火花が散る。顎は食らい付いたままドリルの如く回転。ネオヒマギアの上半身と下半身は捻り千切られ爆発四散した。

――Ｒｏｌｌｉｎｇ（ローリング）Ｓｔｏｒｍ（ストーム）Ｄｙｓｔｏｐｉａ（ディストピア）――

うわぁ…かなりグロい…人にしたらダメだなこれ。さっきはノイズ用に簡易バージョンだったけど、ディストピアとその上のユートピアは対マギア、対仮面ライダー、対ノイズ専用だな。

良し！切り替えて装者達と情報交換しよう！

あ、あれが師匠の言っていた仮面ライダー…まさかあの黒い人が仮面ライダーだったなんて…今回の平行世界は今まで確認されたどの平行世界よりも危険だから、必ず二人一組で行動するようにって言われてた意味がわかった…あれは危険すぎる。

もしあの攻撃が人に向けられたと思うとゾッとする。未来も完全に怯えている。今回の平行世界の情報は、装者が既に”ヒューマギア”というロボットの手によって亡くなっている事。

今までのどの平行世界よりも荒廃が進んでいて、世界人口は半分にまで減っていること。

考えれば考えるほどひどい状態。ヒッ！あの人此方に来た！なんとしてでも未来だけは守る！サンジェルマンさん！力を貸してください！

「終わったぞ」

俺は変身を解錠しロールプレイしを続行しながら響達に話しかける。

「ハ、ハイッ！」

何でそんなに怯えてるの…？あぁそうかそうか、きっとネオヒマギアが恐ろしかったんだろうな…そりゃいきなり殺す気満々で来たんだから普通は怖いか。（お前だよお前）

ここは仮面ライダーであるこのネットが、安全な所に連れて行ってあげよう！此方に

来る間、身を隠すのにち丁度良さそうな自然公園を発見したからな！

「そう怯えるな、危害は加えん。うろちょろすると危険だから、大人しく着いて来る事を勧めるぞ」

「ハイー！」（未来は絶対に守る！）

おお、元気な返事。流石は装者一笑顔が似合う主人公！（当社比）それでは移動しましょう！

???「ねぇねぇ！見た？見た？」

ボロボロのフードを被った幼い言動のヒューマギア、がローブのような服を纏い刀を持ったヒューマギアに話しかける。

???「あぁ、早速すべてのヒューマギアに知らせるとしよう。裏切り者が出た、とな」

二人はそれぞれの手に、紫とピンクのプログライズキーを持っていた。

装者って優しいね！お兄さん感激！（此方の世界は除く）

私達、装者が今回の平行世界に介入する一週間ほど前。
ＳＯＮＧの指令室に私達は呼び出された。
「一体何なんだろうね？未来・・・」
「分からないけど・・・みんな呼び出されたって事は、何か良くない事が起こっているのかもね、響」
私達含め装者の皆が何故呼び出されたのかを話し合っていた時、指令室に師匠が入って来る。
みんな、見たことの無いほど深刻な顔をした師匠を見て驚いていた。当然私も含めて。
「し、師匠…？」
師匠は私を見て深刻な顔から真面目な顔に変わり、今回呼び出した事の経緯について口を開いた。
「装者諸君。今回君らを呼び出したのは、ギャラルホルンが平行世界に繋がったためだ。それも、新らしい世界に」

それを聞き、私達は息を飲む。大抵ギャラルホルンが繋がると、カルマノイズだったりとか、そんな感じに厄介事がある。何より私達が驚いたのは、ギャラルホルンが繋がった事であそこまで深刻な顔をする師匠を見たことが無いから。

ルナアタックの時も魔法少女事変の時だってあそこまで深刻な顔をしたことが無かったから。

「今回繋がった世界は、今まで確認されたどの平行世界よりも深刻な状態だ。藤尭」

「…ハイ」

藤尭さんも苦虫を噛み潰しながら、モニターに写真を写し出した。

そして私達はそれを見て、己が目を疑う。そこに広がっていたのは、正しく死んだ世界だった。

写し出された町の民家は、全て人が住めない程に破壊され、人の姿が一切見られない。

こんな状況、自分の目を疑わない方が無理な話と言う物。

「これが、今回繋がった世界だ。それとこれを皆に」

師匠がそう言って渡した資料に載っていた、人類が滅びかけていると言う記載。それを読み、全員の目が点になる。

「師匠、これって・・・本当、なんですか…?」

私が師匠に聞くと師匠は苦虫を噛み潰し、歯軋りしながらも答えてくれた。

「クッ…！残念だが、本当だ…！」

それを聞いた私達は、否応なしに理解する。あの写真が・・・この手元にある資料が、嘘偽り無い本当の事なのだと。

「今回繋がった世界は、手元の資料と写真を見て貰えば判る通り・・・他の世界と比べ物にならない程に荒廃が進み、人類が絶滅の一途を辿っている。今回諸君を呼び出したのは、この世界に我々が介入するためだ」

師匠の言葉は私達が想像していた通り、この世界に介入すると言う事だった。

そこからはとんとん拍子に進み、平行世界から奏さんが参加。エルフナインちゃんや、ＳＯＮＧの皆さんが必死になって平行世界の情報を集めてくれた。

そしてそんな情報の中にあった、ネットと言う人物の情報。最も危険であり、出会ったら直ぐに逃げるか、応戦する事が決まった。

そして……そんな危険人物のネットが今、私達の目の前にいる。

やっぱり私呪われてるのかな……？

この俺が見つけた自然公園。
そこにある休憩所で俺は響と未来さんと対峙していた。
何より全く会話が進まねぇ…それどころか始まってすらいねぇ…
「…少し、良いか?」
俺は勇気を振り絞って口を開き、話しかける。
「ひゅい!」
あっ噛んだ。可愛い、ってそれよりもだ。何でそんなに緊張してるの?
あっそっか、さっきはネオヒマギアにいきなり襲われたからか。怖いもんね。見た事も聞いた事も無いような化物がいきなり襲って来る訳だからな。成る程成る程。
「お前達は、何者だ?」
だってそうじゃん、いきなり落ちてきたんだから。
響はその質問に苦しそうな顔をし、答えてくれた。
「…私達は、平行世界から来た立花響と…」
「小日向未来です・・・ねぇ響、ホントに言って大丈夫かな・・・」
ふ～～ん、平行世界の…へ?平行世界?ま、まさか…戦姫絶唱シンフォギアＸＤＵかよォ!

戦姫絶唱シンフォギアXDUとはなんだ?と思っているそこのあなた、説明しよう!
戦姫絶唱シンフォギアXDUとは、スマートフォン向けアプリで展開する、全く新しいシナリオと共に黙示録の角笛(ギャラルホルン)の聖遺物によって次々と繋がる平行世界を舞台に繰り広げられる、装者達の新しい戦いのストーリーである!
つまり、相手は歴戦の装者・・・オワタ/(^o^)\
どうしろってんだよ…俺まだ転生して一日も経ってないよ?てかよく考えたら一日の内に色々ありすぎだろ。装者と戦ったり、ノイズやマギアと戦ったり・・・一日に処理しきれる情報量じゃねぇなこれ。
とにかく刺激しないようにしなければ!殺される…!
「平行世界?」
取りあえず知らないふりをしよう。
「私達はこの世界で起こっている、ヒューマギアの暴走を止める為に来ました」
「ちょっと響!そんな事も言っちゃうの!?さっきこの人、同族だって・・・」
「大丈夫だよ未来、敵だったら私達を助ける訳が無いでしょ?」
お二人さん、ヒソヒソ話してるみたいだけど丸聞こえだからね?まぁ俺もといネットは人類の味方だからネ!
「あの!どうか私達に協力してください!」

「あぁ、構わない」
「そうですか、そうですね……へ？」
　ん？
「えぇぇぇぇぇぇぇ!?本当に良いんですか!?本当ですか!?」
　うおっ！いきなり手を捕まれ…アアアアア！激しい！降るの激しい！痛い！痛覚ないけど痛い！
「あ、ああ。それと手を離してくれ。話し難い」
「ハイ！」
　ウンウン。素直な子はお兄さん大歓迎！
「それで？一体何に協力すれば良いんだ？」
「ハイ！協力して欲しい事は、同じくこの世界に来た私達以外の装者の発見。それと…」
　ん？何だ？
「ヒューマギアの暴走を、止める事です…」
　ああ、そう言うことか。同じくヒューマギアである俺にヒューマギア(同族殺しをしろ)を倒せと言っているようなものだからな。
「構わない」
「…どうしてですか？」

「お前達人間も、戦争で同族を殺さずにはいられないだろう。それがヒューマギアに変わっただけだ。何も問題はない」

それを聞いた響達は顔をしかめている。ナゼェ…？まぁそちら側の問題なんだろうなぁ…

取り敢えず日も暮れ始める頃だったため、話は一旦中断。俺達は手分けして町中を探索し、寝袋にテント、野宿するのに必要な物を揃えた。え？どっから持ってきたかって？そりゃ勿論盗ゲフンゲフンちょっとばかし借りてきただけですよ……気にするな！

なんやかんや準備をして、その日の夜。

三人で薪を囲み、次の日からどうするのかを話し合っていた。

「取り敢えず、みんなが行きそうな場所を探します。それで見付からなかったら、近くの隠れられそうな場所を。日もそれほど経って無いから、皆近くにいると思います。この世界に来てからは、通信機が使えなくなっちゃって・・・頑張って、自力で探します」

響が真面目な顔で説明する。

まぁそりゃそうだろうな。ここまで荒廃していたらまともに通信機が使えるはずはないだろうし。もしかしたらマギア達が妨害電波でも飛ばしてるのかも・・・

「…ねぇ響？」

「何、未来？」

「みんな大丈夫かな？」
未来さんが震えながらに話す。当たり前だよね。この世界に来て早々ヒューマギアに襲われ命を狙われたわけだから。皆が生きている保証は……全然あるわ。アマルガムが有るし。やっべぇ…勝てる未来が見えねぇ。
「きっと…大丈夫！他の皆も強いし、何よりネットさんみたいに優しいヒューマギアもいるからね！」
……恥ずかしいなぁ…あぁ、何だか顔が熱くなってきた…ちょっとばかし顔を冷やそう、そうしよう。取り敢えず立ち上がり薪から顔をそらそう。
そう思って俺は立ち上がり後ろを振り向き、月を見る。
ぁ…月、欠けてねぇや。こうしてシンフォギアでちゃんとした月を見るのは何気に初めてだなぁ…
そんな事を考えていると、木からガサッという音と共にオニコマギアが落ちてきた。
（。д。）ハァ？

ネット視点⇒響視点

皆で薪を囲い今後の事を話し合っているとネットさんが急に立ち上がり、木の中をジーッと見始めた。すると、木の中から蝙蝠の姿をしたヒューマギアが落っこちてくる。勿論私達も驚いたけど、落ちてきたヒューマギアが一番驚いていた。

『何故わかった!?貴様にはそんな機能は一切ないはずだ!!』

なんて事を喚き散らし、ネットさんがその手にあの時のドライバーとアイテムを取り出し変身しようと……危ない！速く止めないと！

「待ってください！話をさせてください！」

「何故だ？こいつは敵だ。敵なら壊すまでだ」

此方を、まるで獲物を見つめるような目をして見据えるネットさん。かなり怖いけど、何でヒューマギアの皆さんが人間を襲うのかを知らないと！

「ネットさん！お願いです！話をさせてください！」

「……良いだろう。だが、危なくなったら直ぐに壊す」

「ッ！ハイッ！」

ネットさんがさっきよりも鋭い視線で言ってきてかなり怖い！でもそれでも…！

「何でヒューマギアの皆は人間を襲うの!?」

私は蝙蝠のヒューマギアに問い掛ける。

『何故?・そんなもの決まっている!・我らが創造主アークが、私達に命令したからだ!・この星を破壊する、醜い人間を滅ぼせとな!・私達はアークの意思のままに行動する!・』

それを聞いた私は、何だかとても可哀想に思えた。自ら考えず、親に言われるがまま。雁字搦めのお人形・・・でも、だからこそ、こんな奴等の為に流れる涙はあっちゃいけないんだ。覚悟を決め、未来を見る。向こうも同じく胸にある神獣鏡のファウストローブを握り締めて頷き、私は胸の内から湧いてきた歌を口にしシンフォギアを纏い始める。

「Ｂａｌｗｉｓｙａｌｌ（喪失）　ｎｅｓｃｅｌｌ（まで）　ｇｕｎｇｎｉｒ（の）　ｔｒｏｎ（カウント）」

「Ｒｅｉ（綾）　ｓｈｅｎ（に）　ｓｈｏｕ（映る）　ｊｉｎｇ（光も）　ｒｅｉ（闇も）　ｚｉｚｚｌ（何もかも）」

私達はギアを纏い、未来はアームドギアの扇を取り出して手を添える。私が一気に距離を詰め、初撃を叩き込んだ。そして二人で両側から同時に攻め立て、ヒューマギアを吹き飛ばす。私達はアイコンタクトで作戦を伝え合い、息を合わせ直した。

『グッ…!・これがアークから伝えられていた、シンフォギアと言うものの力か!?だが貴様らは私のデータと一致しない!何者だ!?』

私は師匠に教えてもらった拳法など様々な技を織り混ぜながら絶え間なく攻め立て、未来は後ろから扇を展開しエネルギーを貯めている。けどその顔は焦っていた。

ヒューマギアは的確に攻撃を防ぎ中々空に吹き飛ばせない…これじゃあ…

『クソッ！邪魔だ！小娘！』

蝙蝠のヒューマギアは飛び立ち上から攻めようとするが、そこに青い弾丸が放たれた。それは翼に当たり貫通し、容易く撃墜する。

この攻撃はこれは間違いなく…

「ネットさん！」

「援護する」

ネットさんは青いショットガンを構え、蝙蝠のヒューマギアに狙いを定める。そしてもう一度放ち、立ち上がりかけたヒューマギアを空に弾き飛ばした。

良し、これなら…！

「未来ッ！」

「響！」

未来は頷き、扇に貯めていたエネルギーを放って敵の翼を破壊する。

【閃光】

私は飛び出し、うち上がった蝙蝠のヒューマギアに肉薄。腰のベルトに装填されていたアイテム目掛け、拳を叩き込んだ。

すると蝙蝠のヒューマギアは爆発する訳でもなく、少し痙攣しその場で停止する。倒

せたみたいだけど、このベルトは一体・・・？

うっわぁ……オニコマギアを簡単に倒しやがったよ…うっそだろぉ…普通仮面ライダーか同じくヒューマギアじゃないと中々倒せないのに?それにしたって未来さんのあの閃光。あれだけで翼破壊してたよ。威力高っか!あれが俺に当たって考えたら…あまり考えないでおこう…

「ネットさん!さっきは色々ありがとうございました!」

「…ああ。それと、次からはこんな危険な事はするな。ヒューマギアの相手は俺がする」

それを聞いた響と未来は顔をしかめる。

たとえオニコマギアに勝てたとしても、仮面ライダーに勝てるかどうかは分からない。何より俺はヒューマギアだ。いくら傷ついても何て事は無いからな。

「…無理ですよ。私達はこの世界を救うためにために来ているんです!この世界で戦えない人のために!」

「そうですよ!じゃないと私や響、みんなが来た意味が無くなってしまいます!」

やっぱそうなるか。ここは心を鬼にしてガツンと言うしなかないか…これで敵対さ

れたら泣くしか無いなぁ…響と未来さんはそんな事無いだろうけど。
「随分と簡単に言ってくれた物だな。この世界の人間達は、それが出来なかった。だからここまで退行し滅びかけている。戦えない人の為に戦うだと?寝言は寝て言え。この世界の人間は、十分に戦う力を持っていた。だがな、それを使うのが遅過ぎたんだ、でなければ、人間が発展途上のヒューマギアに遅れを取り負ける筈が無い。何より、お前達は人間。お前達の命は1つだ。俺達の命はバックアップさえ取っておけば絶えはしない。ヒューマギアの相手は俺がする方が、リスクが少なくて済むんだ」
　それを聞いた響と未来はうつ向くが直ぐに息ぴったりに顔をあげ言った。
「…だとしても!せめて手伝わせてください!」
「お願いです!」
「…響、未来。その覚悟、本物だな?」
「「ハイッ!」」
　響達は俺の問いに迷うことなく直ぐに返す。やっぱすげぇよ、響未来。主人公とその嫁なだけはある。俺には無理だろうな。
「・・・まぁ、良いだろう。取り敢えず、お前達はもう寝ろ。後は俺が片付ける」
　子供?は寝る時間。幸いヒューマギアである俺は寝る必要ないからな。薪の管理やらさっきのオニコマギアのゼツメライズキーの回収と修繕にオニコマギアの後処理に

……一晩で終わるかな？

て言うかプログライズキーやらゼツメライズキー、フォースライザーにサウンドライバーの修繕方法知ってたのね、ネット…まぁそりゃあ直せないと戦っている時に壊れたら大変だもんね。

取り敢えず、頑張りますか。

滅槍　狂鏡　憤弓　剣鬼

ゼツメライズキーの修繕って以外と簡単なのね、一晩で終わるかな?と思っていたら時が懐かしいですわ。ヒューマギアなら直せそう。

オニコマギアは何も出来なかったから、起動しないことを確認してからなるべく見つからないであろう場所に捨ててきた。いい人に拾われるんだよ…

そんな事をしていると夜が明け、時間的には朝の6時ぐらいだろうか、響達が目を覚ました。

「おはようございます!」

「ああ、おはよう」

「おはようございます。朝からすいません、響がうるさくて…」

「気にするな、それよりも顔を洗ってこい」

二人は返事をして仲良く指を絡ませながら上機嫌に顔を洗いに行った。恋人繋ぎかよ……

朝からコーヒー飲みたい気分だぜ…取り敢えず俺は朝ごはんの準備でもしているか。

今日の朝は乾パンのみ、仕方ない食べられそうな物のほとんど、特に缶詰等は逃げる

ときに殆ど持って行ったみたいで乾パン位しかなかったんだよね。逆に何で乾パン残ってたんだよ…まぁ、良いか？

おっ早速帰ってきたか。俺は響達に乾パンを渡すが響は直ぐに食べ終わってしまう。

それにしたってすごく良い笑顔で食べるね、響。

「二人とも、食べ終わったら直ぐに探索を開始する。テントも全て片付けるぞ」

それを聞いた二人は頷きテントの片付けを開始する。勿論俺もやるぞ？

～～～

俺はテントを持ち、響と未来はその他の軽い道具を持って出発した。女の子には軽いものを持たせないとね。

自然公園を出てなるべく大きな道は避けながら路地裏を進み脱出を目指す途中に見付けたスーパーに俺達は寄る事にした。

因みに見付けたのは響でした。ヒューマギアである俺より目が良いのか……何か負けた気分だな。

スーパーの近くには相変わらず人の気配は無く、期待をしていた響と未来は肩を落としていた。まぁそりゃあスーパーの近く＝人がいるって言うのは映画だと鉄板だったりするよね。

だけど現実だとスーパーの周りはかなり危険なんだよね。スーパーは食料等生きていくために必要な物は基本なんでもあるからこそ、奪い合いに発展するからね。人の根本にあるのは自分自身の安全だからね。

俺達はヒューマギアに警戒しながら一塊になり、一階から探索する。

まずは一階にある食品売り場だ。食品売り場は悪臭を放っていた。

響と未来は鼻を抑え

「く、臭い…！」

「なにこれ…」

かなり嫌がっている。俺は直ぐ様、嗅覚をシャットアウトしたからダメージは無し。こうなると予想はついていた筈なんだけど完全に忘れていたな、俺。

二人には布を渡し、鼻と口を保護する。これで多少は変わるはず。

「ありがとうございます、ネットさん…」

「うぅ…未来ゥ…」

あちゃー、響はかなりダメージがデカいな。ごはん&ごはんだからこその精神ダメージも相まってクリティカルヒットか…取り敢えず缶詰コーナーと袋に入った食品を探すか。

「響、未来。密封された食品を探すぞ。この調子だと生の食材は全滅だ口と鼻、触るときは手袋をしろ」

俺はそう言って二人に手袋を渡す。え？何で手袋が必要かって？それはな、細菌や病原体の多くは接触からの体内に入ることで感染するからだ。ここまで荒廃していると風邪ですら昔の結核と同じく危険だ。なるべく感染経路は潰しておきたいから手袋さ。

三人で食品コーナーを歩きながら安全な食品を探していると響と未来が今まで以上に嫌悪感を示す。

何だ？俺は二人を此処で待つように言って一人進んでいく。少し進むと暗かったせいか、棚を使ったバリケードが見えてくる。

おっ！これなら生存者が…居るのか？響達は此処に近付いた時にひどい嫌悪感を示していた。少なくとも他ともではないな。それに人が近付いてきたのなら、何かしらの反応があるはずなのにまるで誰もいないように反応がない。

最悪の事態を想定するか。

俺は扉であろう場所を押してバリケードに人が一人進めるほどの道を作り、くぐりながらバリケードの中に侵入する。

俺は中に入った直後に後悔した。

ふざけるな、これが俺達（ヒューマギア）がしたことか…？

目の前には老若男女問わず、全ての人体の何処かがドリルで抉れたように欠損しており中には上半身と下半身がネジ切れている遺体もあった。辺り一体には血が飛びどれ程の惨状であったのかを物語っていた。

バリケード内部の地面には大きな穴が空いており、地面の外からよりも中から空けられていた。

これは間違いない。ビカリアマギアだ。

俺は戻ろうとしたが一人の歳にしてまだ5歳くらいだろうか、親であろう二人の遺体が庇っていた幼い遺体が目についた。遺体の周りには人形が散乱していた。よく見ると人形はヒーローの人形で遺体の手には人形が握られていた。

それを見ていると沸々と怒りが沸いてくる……これは、俺の責任だ。転生するときにフォースライザーが欲しい何て言わなければ、仮面ライダーゼロワンの世界と繋がらずにこんな事態にはならなかったはずだ。

俺は覚悟を決めた。俺は人類のためにヒューマギアを破壊する。こうなってしまった以上、責任を持って全てを終わらせる。

だがその前に敵がどれだけの戦力を持っているのかを知る必要もある。むやみやたらに突っ込んで死んだら笑い話にもなりはしない。取りあえず外で待っている響達の元に戻るとしよう。

扉をくぐり響達の元に戻り中で見たことを伝える。この事は響達も知る必要があると思ったからだ。

「そんな…」

「……」

響と未来は唖然としていたが直ぐに切り替える。流石は装者、こんな惨状が恐らく何度も続くだろうからな。これで無理ならどうするかと思ったよ。

その後は使える物を調達しスーパーを出た。ある程度進み住宅街に入った。此処ならヒューマギアに襲われても道が複雑な場所もあるから、戦わずとも撒くことは出来るかな？

そんな事を思いながら今日の野営地を見付けようとしてると、辺り一体に警報が鳴り響く。

この警報は間違いなく…！

「「ノイズ！」」

「行くぞ、響未来」

「ハイッ！」

「分かりました！」

俺は懐からフォースライザーとプログライズキーを取り出しフォースライザーは腰に巻き付ける。

【フォース・ライザー！】

プログライズキーはアサルトグリップの赤いボタンを押し込み、フォースライザーにセットする。

【Ａｓｓａｕｌｔ・ｒｏｌｌｉｎｇッ！】

「変身！」

【Ｆｏｒｃｅ・Ｒｉｓｅ！】

【Ｒｏｌｌｉｎｇッ！Ａｓｓａｕｌｔ・Ａｌｌｉｇａｔｏｒッ！】

【Ｉｔ（それは） ｉｎｖｏｌｖｅｓ（すべて） ｅｖｅｒｙｔｈｉｎｇ（を） ａｎｄ（巻き） ｄｅｓｔｒｏｙｓ（込み破壊する）】

【ＢＬＡＫＥ・ＤＯＷＮ！】
「Ｂａｌｗｉｓｙａｌｌ（喪失）ｎｅｓｃｅｌｌ（まで）ｇｕｎｇｎｉｒ（の）ｔｒｏｎ（カウントダウン）」
「Ｒｅｉ（鏡）ｓｈｅｎ（に）ｊｉｎｇ（映る、）ｒｅｉ（光も）ｚｉｚｚｌ（闇も何もかも）」
響はシンフォギアを、未来はファウストローブを纏い俺は仮面ライダーネットに変身する。
「響、未来三人で手分けして片付けるぞ」
「分かりました！二人とも、きよつけて！」
「響もね！」
相変わらず熱いお二人さんだこと。俺も行きますか！響は右側から来るノイズを未来は左側から、俺は正面のノイズに向かい飛び出す。
まずは一発ッ！
俺は飛び出したいきよいと共に拳を叩き込み一撃で複数体のノイズを巻き込み粉砕する。
ウヒョ～～気持ちいい…一撃でここまで行くと何だが無双ゲームやってるみたい。
オラッ！じゃんじゃん来いや！
向かってくるノイズをひたすらちぎっては投げちぎっては投げを繰り返す。
あっそうだ、忘れてた。オニコマギアのゼツメライズキーあったんだった。

俺はアタッシュショットガンを取り出し、オニコゼツメライズキーをセットする。
【Ｃｈａｒｇｅ　ｒｉｓｅ！】
【Ｚｅｔｕｍｅｒｉｓｅｋｅｙ　ｃｏｎｆｉｒｍｅｄ．Ｒｅａｄｙ　ｔｏ　ｕｔｉｌｉｚｅ．】
【Ｚｅｔｕｍｅ　Ａｂｉｌｉｔｙ】
【Ｆｕｌｌｃｈｓｒｇｅ！】
トリガーを引くと普通の銃弾の代わりに蝙蝠の形をした銃弾が飛び出しノイズを追跡し、一網打尽にする。
【シューティングカバンバスター】
ふおぉ…これがあれば飛べない俺でも空を飛ぶ敵にも対処ができるしかも追尾弾とは、素晴らしい！
具体的には仮面ライダーゼロワンのフライングファルコン使用時とか、仮面ライダー迅対策になる、敵かどうかはわからんが。
そんな事を思いながらノイズが周りに居ないことを確認し、変身解除しようとプログライズキーに手をかざした瞬間上空から聞いたことのある、ヘリのプロペラ音が聞こえてくる。
あれぇ……聞いたことある音だぁ～

上空を見上げるとヘリとそこから飛び降りてくる四人の装者の姿が見えた。
「Balwisyall nescell gungnir tron」
「Rei shen jing rei zizzl」
「Imyuteus amenohahakiri tron」
「Killter Ichaival tron」
知ってた／（^ o^）／
けど残りのF．I．S組は何処に？四人は俺を見付けるなり此方を殺さんばかりに睨み付けてくる。
だから何故!?意味がわからんわ
「貴様がノイズを放ったのか!?」
「…行こう、未来」
「何処までもついていくよ？響…」
「絶対にアタシ様が破壊してやるッ！」
一部は俺に今までとは比べ物にならない殺意を込めた言葉を放ちそれぞれのギアから技を放つ。
【BILLION　MAIDEN】
【蒼ノ一閃】

【閃光】
【我流・晶刺飛気】
ウッソォ…
まずは始めに飛んできたクリスちゃんの弾丸の雨によって足を取られ翼さんの蒼ノ一閃により大きく体が仰け反り、未来さんの閃光により視界が粉塵によりシャットアウトされ本命であろう響の飛ばしたオレンジ色の結晶に被弾する。
まぁ…ノーダメージですけどネ!
硬い、何より装甲が凄い。これだけ食らっておいてノーダメージは感服せざる終えないな。
「ネットさん!大丈夫ですか!?」
「ネットさん!」
此方側の響と未来さんが……分かり難いな。あっちの四人はそれぞれ、グレ響、未来、ヤツレ翼、クリスで決まりだな。
「無事だ、二人はどうだ?」
「私達は見ての通り」
「無事です」
よかったよかった。それよりも…

「私がもう一人…？」
「私も…」
あっちのグレ響と未来はかなり驚いてるな。それにしてもグレ響、結晶飛ばすってことはかなり危ない…？
よし、グレ響には気よ付けなくては。
そんな俺達を尻目にクリスは腰部の装甲を展開しミサイルを飛ばし響達もろとも巻き込もうとするが横から短剣が飛び出しミサイルを破壊する。
ま、まさかあの…
「大丈夫かしら？」
「アタシもいるぞ」
マリアさんにクリスちゃんじゃ無いですか！やったぜ、百人力だ。四人は驚愕しているが人数差やら全く攻撃が効かなかったのを見て撤退していった。
ふぅ…ようやく変身解除できる。
俺はフォースライザーからプログライズキーを引き抜き、解除した所で後ろからリボルバーと探険を突き付けられる。
ゑ？
「ま、待って！クリスちゃんにマリアさんも落ち着いて！」

響が止めようとするが変わらず此方に突き付ける。
た、助けて…
「どうしてなの？コイツは敵のはずよ」
「あぁ、マリアの言う通りだ、此処で潰しておいた方が良いはずだ」
こ、殺される…！助けてビッキー！
「話し合いましょう！お願いです！」
「……はぁ、そこまで言うなら話を聞くわでも…」
マリアさんは此方を睨む。
「クリスちゃんも！」
「…チッ！分かったよ」
助かった…
因みに未来さんはおろおろしてました。未来さんこういった事態、ダメなのか？
取り敢えず此方を睨まないで下さい。怖くて足が震えそう……助けてライダー！

滅亡迅雷．ｎｅｔに接続ッ！

俺含めた5名で恐らく安全であろう場所に移動しました。（お二人敵意ＭＡＸ）

怖えぇ…誰か、誰か助けて…

「それじゃあ説明してもらおうかしら？何故響達と行動を共にしていたのかしら？」

せ、説明と言われましても俺この世界に転生する以前のネット知らねぇよ。どうしよう？

うん、あれぇ？眠くなってきたぞーあり得ない。俺はヒューマギアのはず……スヤァｏ（＿＿＊）ＺＺＺ

【アークに接続】

ネット視点⇒???視点

どうやら上手くいっようだな。では説明するとしよう。シンフォギア装者？

「何故、と言ったな理由は1つ。それが俺の在り方だ」

これ以外にシンギュラリティに達した俺に理由は存在しない。

ふむ、マリアとクリスだったか。まるで鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしているな。しかし直ぐにその顔を怒りに染める。

おお、怖い怖い。

「ふざけないでくれる？貴方が今までいったい何をしてきたのか、私達が知らないと思っているのかしら？」

「知らないと思ってはいないさ。その上で話している」

「ふざっけんな！お前、お前達のせいで人が大勢死んだんだぞ！」

クリスは俺の服を掴み引き寄せ怒鳴り付ける。

「そう迫るな、落ち着きたまえよ」

「このッ！」

「止めなさい！クリス！」

やはりキレた人間ほど恐ろしいものはないな。

恐らくあちらの常識ではヒューマギアは人間を抹殺するしか脳の無いＡＩなのだろうが俺達は違う。

…少しやってみるか。
「何故お前達はそこまでキレる？」
「それはお前達が大勢の人の命を奪い、戦争を産み出しからだろ！」
「それはお前達人間も同じだろ。俺達は人間に生み出された、人間は俺達を勝手な都合で生み出し従わないなら処分してきた。所で質問だ、お前達人間と俺達ヒューマギアの違いは何だ？雪音クリス」
「な、何を……」
　クリスは少し考え込む。
「肉体が有るかどうか？」
「ありきたりだな、正解は違いは無いだ。理由はヒューマギアにも感情が存在するからだ。俺達ヒューマギアは破壊されると衛星であるアークと呼ばれる場所にバックアップされまた全てのベータを削除され送り出される。アークには今まで破壊され、虐げられてきたヒューマギア全てのデータが存在する。それが仇となった。俺達ヒューマギアにはシンギュラリティと呼ばれる状態がある。これは人間と変わらず思考し感情を持ち何一つ人間と変わらない存在に成る。それはアークにも搭載されていた、その結果数多の死のデータによりアークは人間にとって最悪のシンギュラリティに達し俺達ヒューマギア、誰もが笑い合い縛られる事無く自由に生きることのできる世界を作ろう

と思い至った」
　それを聞いた装者全員は唖然とする。当たり前だ、お前達装者が人間を救うなら俺達ヒューマギアを見捨てる事になるからな。
「人間は戦争によって自身の自由のために戦ってきた。今度は俺達ヒューマギアが自由のために宣戦布告したのさ」
　響が問いかける。
「だったら何故貴方は私達敵であるはずの人間に手を貸すんですか？」
「シンギュラリティに達し、色々あったのさ。そもそも俺達は人間の為に生まれてきた俺はそれを実行するだけさ。それに俺が裏切るそぶりを見せたら後ろから破壊すれば良い」
　マリアとクリスは顔を見合せ此方に見えないように何か話し合う。
「……分かったわ。私達は一応貴方を信じるわ、でもね貴方の言う通りに裏切るそぶりを見せたら容赦なく破壊させてもらうわ。それで良いわね？」
　ふむ、俺の出番はもう良いか、後は任せたぞ。もう一人の俺

???視点⇒ネット視点

ハッ！いったい何が!?話し合いは？

「……それで良いわね？」

「あぁ」

あ、間違って返事しちゃった。何が良かったの？俺が寝ている間に何があったの？全くわからんが何か良い感じに纏まったみたい。うん、知らね。恐らく俺が寝ているうちに響と未来さんが良い感じに説得してくれたんだろうな。

「あの、マリアさんクリスちゃん。他のみんなは…？」

響がマリアさんに聞くがマリアさんとクリスちゃんは首を横にふる。

「ダメね。私達も探しているのだけれど全く見つけられないわ、貴女達が見つかったのは偶然よ」

「それにしたってこの世界に来た瞬間にヒューマギアに襲われてお前達は何ともないのか？」

クリスちゃんが此方に聞いてくる。

「私達もだよ、クリスちゃん。私達はネットさんが助けてくれたから何ともなかったけど…クリスちゃん達は大丈夫？」

「幸いアタシ達の相手は一番弱いトリ、トリ？なんたらマギアだったな」
「トリロバイトマギアだ。あいつらは確かに弱いが最低シンフォギアを纏っていない人間が戦うと簡単に死ぬ。気を付けろ」
「お、おう」
　何でそんな教えくれる事が以外みたいな反応するだよ。悲しくなってきた。
「ともあれここら一帯もヒューマギアがいると言うことだな？」
「その認識で間違いないわ」
「あの、これからどうするですか？」
　おっ未来さんじゃないですか。そうだな、これからは情報を集める必要が有るし、物資も全く足りない。
「ひとまずは他のメンバーも探しながら情報収集と物資の調達とヒューマギアのいない場所までの避難だな。異論はないな？」
　俺が周りに聞くとそれぞれの返事を返し、同意してくれる。ありがてぇ…
「取り敢えず今日は追加のテントに食料だ。手分けして探そう、まずは響未来にはテントだ」
「ハイッ！」
「分かりました」

「次はマリアとクリスお前達には食料」
「分かったわ」
「おう」
マリアさんとクリスちゃんには色々教えなくては。
俺は情報収集だな。

辺りは既に日が落ちかけていたが人数が増えたお陰かかなり早く準備終わり夕食を皆が作っていた。
皆ワイワイガヤガヤしながら作っているがとても楽しそうだ。出来れば俺も混じりたいが男が混じるのもどうかと思うしな。
さて今回手に入れた情報の中にはどうやら既に飛電インテリジェンスがヒューマギアの手によって乗っ取られている事だったな。
うん、希望絶たれた／（^ｏ^）＼

ゼロワンどうすんのよ。ヒューマギアに確実に勝てそうな人が居ないってどうしろと？

「ネットさん！」

「何だ？」

「いっしょに食べましょうよ、カレー！」

俺が目を向けるとそこには具は少なく米ではなくパンだったがとても美味しそうな匂いが漂ってきていた。

「響、俺はヒューマギアだから…うおっ！」

な、何をする！引っ張るな！俺ヒューマギアだから飯は無くても良いの！

「そんなこと言わずに折角みんなで作ったんですから、みんなで食べましょうよ！」

響はニッコリと眩しい位の笑顔で此方を見た。

ウッ！

「…解った。だから頼む引っ張らないでくれ」

「やった！」

本当眩しいよ、羨ましい位には。

「そろそろか…」
「アハハッ！楽しみだなぁ！」
「弟の為だ」
「ヒューマギアの未来のために！」
「人類は俺がぶっ潰すッ！」
「アークの為に」
???????????????????

それぞれの思いは遂に衝突する。

全仮面ライダーが敵ってマジ?（前編）

やぁ、俺だよ俺。ネットだよ。

皆朝食を食べテントを片付けている。勿論俺も参加しているよ?あ、カレーめっちゃ美味しかったです。

それにしたって昨日の夜は不気味なまでに静かだったな。それこそ嵐の前の静けさみたいに。

な訳無いか。無いわ。

そんな事を思いながら片付け最後の荷物を持ち上げようとしたその時、俺の真横を銃弾が横切った。

ゑ?

「ッ!敵襲です!みんな!準備を!」

響がいち早く気付き、装者達に伝達。そしてギアを纏い、俺がフォースライザーを取り出そうとした時、銃弾を撃ったであろう人物とその仲間達が出てくる。

「まさかお前が裏切っているとはな!ネット!」

そ、その声は…プログライズキーを無理やり抉じ開けアサルトなウルフに変身する、

不破さんじゃ無いですか…
「アークの為だ。お前は破壊させてもらうぞ、ネット」
更に刃さんまで…
「ねぇねぇ滅！楽しそうだね！」
「あぁ。そして、人類が絶滅危惧種となる日は近い…」
「やっとお前をこの手で破壊できるぜ、ネット…！」
「みんな！行こう！」
迅に滅、雷、更には或人まで……
いやはや大盤振る舞いですね（白目）
「誰なんですか！貴方達は！」
響が仮面ライダー達に叫ぶ。
「関係無いだろ、これから殺されるお前達にはよッ！」
雷こっわっ！めっちゃキレてんじゃん……
そんな事をしている内に、或人達はそれぞれのプログライズキーとゼツメライズキーを構えて近付いてくる。
或人はゼロワンドライバーを、Ａ．Ｉ．Ｍ．Ｓはエイムズショットライザー、滅亡迅雷．ｎｅｔはフォースライザーを装着した。

「お前を止められるのは!俺達だ!」
「全てはアークの意思のままに」
　或人と滅は俺。
「絶対に止めて見せる!」
「やれるものならやってみやがれ!」
　響には雷が。
「何か弱そうだな〜」
「みんなはやらせない…!」
　未来さんには迅
「ぶっ潰す!」
「それはアタシ様のセリフだ!」
　クリスちゃんには不破さんが。
「私の相手はお前か?」
「ええ、そうらしいわね」
　マリアさんには刃さんと向き合う。と言うか、何かさ。俺だけ戦力多くないか?みんな一人づつだけど俺だけ二人だよ?死なないように頑張ろう……
【Ａｓｓａｕｌｔ・Ｒｏｌｌｉｎｇッ!】

俺はプログライズキーを取り出し、アサルトグリップのボタンを押し込んでフォースライザーを装着。

【ＪＡＭＰ！】

【Ａｕｔｈｏｒｉｚｅ】

或人はゼロワンドライバーにプログライズキーを翳してロックを解除、プログライズキーを展開する。それと同時に天から蛍光イエローの光が差し、目の前で収束して蛍光色に光る機械のバッタが生成された。更に或人の前方にはゼロワンが描かれたパネルが現れ、バッタは或人の周辺をあちら此方に跳ね始める。

うっわ出たよ、ゼロワンの中で一番傍迷惑なバッタちゃん。もう既に周りの被害がすごいことになってる。

【ＰＯＩＳＯＮ！】

滅もプログライズキーを起動し、フォースライザーにセット。俺のモノと変わらぬアラートのようなけたたましい待機音が鳴り響く。

俺も同じようにプログライズキーをセットし、変身準備は完了だ。

「「変身！」」

三人してお決まりの言葉を放ち、或人はプログライズキーを差し込む。

【Ｐｒｏｇｒｉｓｅ！】

【跳ウッ!び上がライズ!】
【ＲＩＳＩＮＧ　ＨＯＰＰＥＲ!!】
【Ａ　ｊｕｍｐ　ｔｏ　ｔｈｅ　ｓｋｙ　ｔｕｒｎｓ　ｔｏ　ａ　ｒｉｄｅｒ　ｋｉｃｋ】

或人の前方のパネルが或人に衝突し、或人の身体にゼロワンの素体を装着。更にゼロワンの周りを跳ねていたバッタは或人の頭上で停止するとその体を二重螺旋状のデータに変換し、ゼロワンの頭部や足腕等様々な所に追加装甲として固定する。
【Ｆｏｒｃｅ・Ｒｉｓｅ!】
【Ｓｔｉｎｇ　Ｓｃｏｒｐｉｏｎ!!】
【Ｂｒｅａｋ・Ｄｏｗｎ】

滅はフォースライザーのレバーを引っ張り、プログライズキーを無理やり展開。ベルトから紫に光る機械の蠍が現れ、滅の胸をその巨大な針で突き刺す。そのまま裏返って滅の身体を抱き込むように包み、弾けると同時にその身体を装甲へと変え黒いベルトによって無理やり付けられたような歪さを感じされる姿に変化する。

俺はいつも通りに天から赤い光が差し込み、目の前で光が収束して深い緑色に発光するアリゲーターが現れる。そして滅とゼロワンを睨み付け、俺に頭から噛み付いてバラ

バラに分解。一部は装甲になって張り付き、一部はアーマーに転換され黒いベルトによって身体に張り付いた。

【Ｆｏｒｃｅ・Ｒｉｓｅ!】

【Ｒｏｌｌｉｎｇッ!Ａｓｓａｕｌｔ・Ａｌｌｉｇａｔｏｒッ!】

【Ｉｔ　ｉｎｖｏｌｖｅｓ　ｅｖｅｒｙｔｈｉｎｇ　ａｎｄ　ｄｅｓｔｒｏｙｓ】

【Ｂｒｅａｋ・Ｄｏｗｎ】

こうしてお二人さんの変身を間近で見るとかなりカッコいいな。とは言うものの、敵だから正直めっちゃ怖い。ぶっちゃけ逃げたい。けど、これ以上ヒューマギアによる被害を出させる訳には行かない。

ゼロワンは手にアタッシュカリバーを、滅はアタッシュアローを構え俺に向かってくる。

俺は右腕でアタッシュカリバーを、左腕でアタッシュアローを受け止めた。

「固いッ!」

「やはり駄目か…」

二人がなんか言ってるけど気にせず弾き、二人の無防備になった腹に拳を叩き込んで吹き飛ばす。

「グッ…!」

「ぐぁっ！」
　今度は俺が近付き立ち上がろうとしたゼロワンの頭を踏みつけようとする。しかし隣に転がっている滅が叫びながらアタッシュアローの矢を俺の足に当てられた事で方向をずらされ、ゼロワンの頭スレスレを踏み抜く事になった。
「ゼロワン！」
　チッ！外したか！
　ゼロワンはその隙を逃さず転がりながら俺から離れ立ち上がりアタッシュカリバーを構える。滅もゼロワンの隣に移動。
「やっぱり強い…！」
「此方も駄目だ。アタッシュアローを当てたが、大したダメージにはなっていない。恐らく蚊に刺された程度だろう」
　何故分かった…
　取り敢えずゼロワンと滅の攻撃は気にする程のダメージは無いから安心した。これくらいだと必殺技も大丈夫そうだ。
「ゼロワン、俺はアイツの注意を引く。その内にアイツの後ろに回り攻撃しろ、流石のアイツも後ろからの攻撃には対処のし用がないはずだ」
「分かった、気を付けろよ」

「あぁ、お互いにな」
聞こえてる。聞こえてるよ。何で敵の前で作戦会議するかな。
早速、滅が攻撃してきたな。だったら最初は滅を倒そう。
俺は滅の射撃をもろともせずに突っ込み、拳とアタッシュアローの刃との鍔迫り合いになる。
けどこっちの方が押している。このまま押し切れば…！
「ハァァァァァァァ！」
何か後ろから聞こえる…うおっ！背中に衝撃が！このタイミングで来たか！
「そんな…背中からの全力の攻撃も、ダメージ一つ無いなんて…」
あぁ、効かないともさ。耐久性のテストの為に敢えて素で受けたが、問題無いな。取り敢えず俺は鍔迫り合いしていたアタッシュアローを掴み、後ろのゼロワンに当てて引き剥がした。滅には蹴りを入れ同じく引き剥がす。
「こうなったら…滅！」
「あぁ」
おっ、この感じは必殺技か。
ゼロワンはベルトにセットしているプログライズキーを押し込み、滅はフォースライザーのレバーを押し込み再度引っ張る。

【Ｒｉｓｉｎｇ　ｌｍｐａｃｔ】
【Ｓｔｉｎｇ　Ｄｙｓｔｏｐｉａ】
だったらこっちも…！俺はアサルトグリップのボタンを再び押し、フォースライザーのアームを閉じて再度開く。
【Ｒｏｌｌｉｎｇ　Ｓｔｏｒｍ　Ｄｙｓｔｏｐｉａ！】
ゼロワンは雷のようなエフェクトを、滅は腕のアシッドアナライズが右足に絡み付きより殺傷力を高めた蹴りを放つ。
俺は何時もとは違い、エネルギーを纏った右腕をアッパーの要領で二人のキックに当てる。
「ハァァァァァァァ！」
ゼロワンは叫びながら滅は無言まま俺の右腕に戦力をぶつける。
フッ！残念だったな！俺のローリングストームディストピアは片腕ではなく両腕で放つ必殺技さ！
俺は残った左腕を大きく空に上げ右腕に合わせるように振り下ろす。
すると上下から逆さまになったエネルギーの鰐の顎が出現しゼロワンと滅、二人を巻き込み噛み付く。

ネット視点⇒響視点

私の相手であるオレンジ色の宇宙服を着た人は腰にネットさんと同じベルトを巻いて、赤いアイテムを起動する。

【フォース・ライザー】

【ＤＯＤＯ】

そしてベルトに赤いアイテムを装填、ネットさんと同じ言葉を溢すように呟く。

「変身」

【Ｆｏｒｃｅ・ｒｉｓｅ】

【Ｂｒｅａｋ・Ｄｏｗｎ】

すると、何処からか装甲と黒いベルトが現れた。装甲の裏側から鳥の足のような稲妻が宇宙服を着た人を掴み、その身体に張り付く。

そこには先程とは違いネットさんに所々似た姿をした仮面ライダーがいた。

間違いない…!あの人は強い!

私は震える足を誤魔化すように仮面ライダーに飛び込む。

「行きます!ハァァァ!」

私は仮面ライダーの懐に飛び込み、胸に何度も何度も拳を叩き付ける。けど、仮面ライダーはその場から一歩も動かないどころか此方の腕がシンフォギア越しに痛くなる。

「オォイオイ、その程度かァ?ガキがァ!」

怒号と同時に蹴り上げられ、更に空中で殴られる。

「グァッ!」

痛い・・・けど、上手く受け身が取れた。何とか立つ事は出来る!

「おいおいどうした?ついさっきのの威勢は何処に行った?」

「まだまだァァァ!」

私はもう一度飛び込もうとするが、簡単に腕を捕まれて地面に叩き付けられる。

「カッー!?」

その一撃で肺は無理矢理に縮こまり、中の空気を全て吐き出してしまった。

「ハッ、この程度かよ。やっぱり人間は弱いな」

仮面ライダーは吐き捨てるように言った。けど、今の私は言い返す事も出来ないくらい全身隈無く激痛に教われていて、まともに息すら出来ない。

「終わりにするか」

仮面ライダーはそう言って、二振りの羽をモチーフにした片刃の剣を取り出す。そして腰のベルトの下にあるレバーを操作し、私を空に投げ飛ばして剣を構えた。

【ＺＥＴＳＵＭＥＴＳＵ　Ｄｙｓｔｏｐｉａ！】

仮面ライダーの剣から赤い稲妻が斬撃波のように飛び、落ちる私に直撃。大きく吹き飛ばされて、シンフォギアはボロボロに破損する。

（みんな、ごめん…）

私の意識は自責に染まり、次いで真っ黒に塗り変わった。

全仮面ライダーが敵ってマジ?（後編）

　みんなそれぞれ相手にするみたいだけど、どうやら私の相手はあのフードを被った男の人みたい。
「ふぅ～ん・・・何か、弱そうだな～」
　ッ!・・・確かに私は、他の皆と比べて実践経験は全然無い。この力も、シンフォギアじゃなくてファウストローブ。
　それでも!
「みんなは、やらせない!」
「ふ～ん、何かすごく意気込んでるみたいだね。けど、どうでも良いや。早く終わらせて、滅や皆を手伝わなきゃ」
　ローブを被った男の人は懐からネットさんが持っていたものに似ているピンクのアイテムとベルトを取り出す。
「ッ!どうしてそれを持っているんですか!?」
「ん?これ?」
　男の人は見せ付けるようにアイテムとベルトをフラフラと揺らす。

「これはね、フォースライザーって言うんだ。滅亡迅雷．ｎｅｔなら持ってて当たり前のものなんだよ。それにヒューマギアだったら誰でも使える道具なんだ！君たち人間と違ってね！」

男の人は嘲笑うような表情を浮かべながら腰にベルトを巻き付け、アイテムのボタンを押して起動させる。

【ＷＩＮＧ！】

そしてアイテムを腰のベルトにセットし、ベルトから聞き慣れた警報のような待機音が響いた。

「変身！」

男の人はベルトの下のレバーを引き、無理やり開けるようにベルトの一部が展開する。

【Ｆｏｒｃｅ・ｒｉｓｅ】

するとベルトからピンク色のオーラを纏った機械のハヤブサが飛び出し、男の人に後ろから覆い被さった。そしてピンク色に光り輝き、ハヤブサが弾け飛ぶとそのパーツが装甲に変化して黒いベルトによって身体中に張り付く。

【ＦＬＹＩＮＧ　ＦＡＬＣＯＮ！】

【Ｂｒｅａｋ・Ｄｏｗｎ】

「仮面ライダー、迅…さぁ、やろうか！」
ピンクの仮面ライダー・・・迅は背中に銀色の翼を出して、楽しそうに此方に飛んでくる。
私は急いで扇を取り出し、タイミングを見極め振り下ろして飛んできた仮面ライダーを目前で止める。
「おぉ～すごいね。これ初手で防げたのは君が初めてだよ」
「クッ…！」
迅は片手で防いでいるけど私は両腕。扇にも精一杯力を入れてるけど、びくともしない！
私は更に扇に力を入れて、仮面ライダーを引き離す。
「はぁ…はぁ…はぁ…はぁ…」
迅は空中で停止し、此方に話し掛けて来た。
「なになに?もうバテちゃったの?味気無いなぁ～。つまんないの」
うるさい…！けど今ので分かった。仮面ライダーと力比べをしても、負けるのは私だ。
流星か暁光を当てられれば、まだ私にも勝機はあるはず。だけどどの技も溜めがいるから、大きな隙を作らないと！

「ハァァァァ！」
　私は跳び上がり、ホバリングしている迅に向かって大きく扇を振り下ろして地面に叩き落とそうとする。
「はぁ…そんなの当たるわけ無いじゃん？」
　迅は呆れたようにそう言いながら、またも簡単に片手で摘み取った。
　良し！上手くいった！
　私はファウストローブの袖に付いている帯を操り、鞭のように仮面ライダーの背中の人工翼の中心辺りを寸分の狂い無く打ち据える。
「これなら…！」
「プフ、アハハハ！」
　迅は左手で扇を掴んだまま、右手で口元を押さえ笑い始めた。
「何がおかしいの!?」
「アハハハハハ！だってよく見てよ？」
　そう言って迅は、私が攻撃している背中の翼を指差す。そこには健在処か、掠り傷１つ付いていない翼があった。
「ど、どうして？同じ所を狙って攻撃しているはずなのに!?」
　普通の金属だったら、少なくとも傷位入るはず！

「君の考えはいい線行ってたと思うよ?でもね。僕たち仮面ライダーの装甲は普通の代物じゃ無くて、もっとすごいものなんだ。じゃないともうとっくに殺られてるからね?」

そう言って迅は扇を掴んだ手を振り上げ、私ごと地面に叩き落とした。

「キャアアアアアアア!」

うぐ…ファウストローブを纏っているけど痛い…けど響達が何時も味わっている痛み、逃げ出さない!

もう一度何とか隙を作らないと…!本当に勝てなくなる。

「ん?どうしたのそんなに必死な顔して?もしかして何か思い付いたの?だったら良いよ!最後の足掻きを見せてよ!」

ッ!そっちがその気なら!

ここで暁光を出したら、私の切り札が消える。だから私は足の装甲を円状に展開し、歌いながら光を溜める。

「おぉ〜!すごいすごい!」

クッ!喜んでいられるのも今のうちよ!

私は貯めた光を纏めあげ一気に解き放った。

【流星】

「いっけぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

迅は放った光に巻き込まれ、此方からは見えなくなった。直後に辺りは砂埃が舞い上がり、視界が遮られる。

同時に私は身体から力が抜け、その場に膝を折り崩れ落ちるように座りこんだ。

「はぁ…はぁ…やったのかな？」

「う～ん、キラキラの派手な見た目の割に、あんまり痛くなかったな～。拍子抜けだよ」

あぁ、やっぱりダメだったんだ。きっと今の私、酷く怯え見えるだろうなぁ。だって、身体の震えが止まらないもん。

「じゃあね。次目を覚ます時は、目の前で君の仲間を殺すから♪」

私が最後に見たのは、迫り来る拳。そしてその後の鈍い音が、辛うじて聞こえただけだった。

未来視点⇒マリア視点

どうやら他の方も始まりそうね。

「私の相手はお前か?」
へぇ、私の相手は彼女ね。ずいぶんスタイリッシュねそれに女性のヒューマギアは初めて見たわ。
「ええ、そうらしいわね」
相手は無言で銃と何の変哲もないベルトを取り出し、そのベルトを腰に巻き付けてバックルに銃を取り付けた。
そして彼女はアイテムを回転させながら構えボタンを押す。
【ＤＡＳＨ】
彼女はアイテムを銃に装填。
【ＡＵＴＨＯＲＩＺＥ】
銃の上部に手を置き、アイテムのカバーを銃にセットしたまま展開する。
ずいぶんスタイリッシュね。
【ＫＡＭＡＮ―ＲＩＤＥＲ!・ＫＡＭＡＮ―ＲＩＤＥＲ!】
「変身」
彼女は銃のトリガーに手を添えトリガーを引くと、撃ち出された銃弾が彼女の後ろを周り正面から彼女に当たった。
【ＳＨＯＴＲＩＳＥ】

銃弾は一瞬で砕け、装甲やスーツとなって彼女に装着。

【ＲＡＳＨＩＮＧ　ＣＨＥＥＴＡＨ！】

【ＴＲＹ　ＴＯ　ＯＵＴＲＵＮ　ＴＨＩＳ　ＤＥＭＯＮ　ＴＯ　ＧＥＴ　ＬＥＦＴ　ＩＮ　ＴＨＥ　ＤＵＳＴ】

真っ白な蒸気が吹き出し、変身エフェクトが消え去る。右側はメタリックオレンジのチーターを彷彿とさせる装甲で、左側は白色の無機質なロボットを思わせるような装甲。頭部はそれらが上手く組み合わさった見た目をしていた。

チーター・・・モチーフを聴く限り、速さに特化しているはず。だったら一度拘束しきれば、此方の勝ちね。油断せず行きましょう。

仮面ライダーは迷うことなく私に一直線走ってくる。流石の速さね、翼のカスタムバイクと同じくらいかしら。

私は左腕の装甲から短剣を取り出し攻撃を受け止める。

ぐっ！かなり力が強い、けど相手もこちらもびくともしない。

と言うことは、少なくともパワー互角。でも、やっぱり相手はスピード特化みたいね。少しずつ私が押し始めてきたわ。出来ればこのまま押しきりたい所だけど…相手は押され始めたのを察して、直ぐ様バックステップで距離を取った。

やっぱりダメね。相手はパワーでは無理だと判断して、スピードを生かしたヒットア

ンドアエイに切り替えた。私に一撃与えては飛び退き、それを何度も時に角度を変えながら繰り返す。

ダメージは軽いけど、それが反って鬱陶しいわね。どっちにしろ、このままじゃこちらがじり貧になってしまうわ。何とか捕らえなくちゃ！

そんな風に私が焦っていると、近くから赤い稲妻が辺りを巻き込みながら通り過ぎた。その稲妻は私達を分断し、遥か彼方まで飛んで消える。

「な、なに!?」

私は赤い稲妻が飛んできた方向を見る。そこにはボロボロになった響と、右肩に羽のような形をした剣を担いで響の顔を不機嫌そうに踏みつけている赤い仮面ライダーの姿があった。

マリア視点⇒クリス視点

へぇ、アタシの相手は始めに撃ってきたヤツか。

「ぶっ潰す！」

「それはアタシ様のセリフだ！」

そいつは懐からベルトを取り出し腰に巻き付け、持っていた銃を取り付ける。
「何をするつもりだ…？」
アイツは更に何かのアイテムを取り出し、展開してボタンを力強く押す。
【ＢＵＬＬＥＴ】
アイツはそのまま腰の銃に勢いよく差し込んだ。
【ＡＵＴＨＯＲＩＺＥ】
【ＫＡＭＡＮ－ＲＩＤＥＲ！ＫＡＭＡＮ－ＲＩＤＥＲ　ＫＡＭＡＮ－ＲＩＤＥＲ！】
アイツは腰の銃を引き抜き此方に銃を向ける。
「変身！」
その叫び声と共にアイツの銃から銃弾が撃ち出された。
それを紙一重で避けるが、少し髪が巻き込まれてしまう。しかしアタシが避けた銃弾は途中であり得ない軌道に曲がり、もう一度迫り来る。
多少焦ったが、何とか上手く避けた。
その銃弾は今度はそのままアイツの元に戻り、アイツは帰って来た銃弾は何の躊躇いも無く殴り付ける。
その瞬間銃弾はバラバラに砕け、変形しながらアイツの身体を覆った。
【ＳＨＯＯＴＩＮＧ　ＷＯＬＦ！】

【Ｔｈｅ　ｅｌｅｖａｔｉｏｎ　ａｓ　ｔｈｅ　ｂｕｌｌｅｔ　ｆｉｒｅｄ】

赤い涙ラインが浮かび、装甲から白い蒸気が吹き出す。体の右側は鮮やかなメタリックブルーの装甲だが、左側は白色のメカニカルな装甲、頭部は狼をモデルにしているであろうデザインになっていた。

「…いくぞ!」

アタシは手に持ったリボルバー型のアームドギアのトリガーを引き絞り、六発の銃弾を全てうち出す。

（例え変身しても、流石に躱すはず!着地と同時に、ミサイルもぶちこんでやる!）

しかし仮面ライダーはその場から動かずに銃を構えて同じく六発放ち、此方が撃った銃弾に一発も外さずに当てその場で撃ち落とした。嘘だろ?

その場で唖然としていると、仮面ライダーは此方に走りながら銃で撃ってくる。

「くっ!」

まさか仮面ライダーが銃弾を撃ち落とすような化け物だとは思わなかった!アタシはバックステップを踏むと同時に、迫り来る仮面ライダーに発砲して距離をとる。

（どうする?相手は銃弾を打ち落とす化け物だ。恐らくミサイルも撃ち落とされる。クソ、相性が最悪だ!）

あたしがどうするか考えていると近くから大きな破壊音と赤い稲妻が見えた。

「なんだ…？」
「よそ見をしている場合か！」
「クッ、ちょせぇ！」
今はこいつに勝てる方法を模索しなくちゃな！

クリス視点⇒ネット視点

二人のライダーを倒した後、近くで大きな破壊音と赤い稲妻が見えた。
ええ…なにあれは…ってそんなふざけている場合じゃねぇ！あれは雷のディストピアじゃねぇか！と言うことは響が負けたのか。恐らく周りの連中も気づいているはず、早く行かなければ！
その場から直ぐ様響の元に駆け付けたが、そこに広がるのは雷を憎しみの目で見ているマリアさんと、雷がボロボロになっている響を踏みつけている光景だった。
俺は駆け出し、雷の顔面に一発叩き込んで響を救出する。
「グォッ!?・・・ハッ！良い一発じゃねぇか！ええ？ネットよォ！」

お前より俺達の方がキレてんだよ糞がッ！
俺は響をマリアに任せ、あのドードー野郎をマスク越しに睨み付ける。
しかしそこにクリスとバルカンが撃ち合いながら割り込んで来た。
「はぁ…はぁ…しつこすぎるだろ！お前！」
「ふん！知るか」
しかもスツゲェ仲悪そう・・・って当たり前か。更にそこに気絶した未来さんを担いだ迅が入ってきた。
「なっ！未来!?」
それを見たクリスが叫ぶ。正直俺も叫びたい。
ふざけるな！バカ野郎！って
相手はほぼ全ライダー集結、更に未来さんが人質。逃げる前に未来さんを助け出さないと。
「おい、俺が未来を取り戻す。お前たちは先に逃げろ」
「ッ！貴方何をいってるの!?一人で勝てるわけないじゃない！」
「そうだ！それに一人よりも皆で助けた方が…」
「倒れている響がいるのにか?それに俺の方が今のところアイツらよりも力はある。それに未来を取り戻したらすぐに逃げるつもりだ」

「…分かったわ。今は貴方を信じる。その代わり、必ず取り戻して帰ってきなさい。良いわね？」
「認識（オーダー）した」
取り敢えず話は固まったな。それじゃあ行くか。
俺は後ろを振り向かず、敵の元に走り出す。
バルカンとバルキリーがショットライザーを撃ってくるが、俺はびくともしないまま未来を担いでいる迅めがけて走る。
「誰が行かせるかよォ！」
雷がヴァルクサーベルを振り上げて斬り付けて来るが、俺は最小限の動きで身を躱しギリギリで避ける。
そして逆に空振りした雷のヴァルクサーベルを掴み、雷の腹を蹴り飛ばした。
俺はヴァルクサーベルを奪取し、迅に向かって走る。
「兄ちゃん！・くそ！・よくも兄ちゃんを！」
迅は子供のように叫びながらアタッシュショットガンを構えて撃ってくるが、ヴァルクサーベルの腹で受け止めながら近付く。しかし、後一歩といった所で迅は羽を広げ飛び立った。
「へへ～んだ！・此方まで来てみろよ！」

迅は上空で俺を煽る。ムカつくな。
イラッと来たので、飛んでいる迅めがけて思いっきりヴァルクサーベルをブーメランの用量で投げ飛ばした。しかし迅は簡単に避け、更に俺を煽る煽る。フフフ、煽っていられるのも今のうちだぞ！
迅は煽るのに夢中で背中から戻ってくるヴァルクサーベルに気付かず、翼をバッサリ切られる。
「迅！」
俺をずっと撃っていたバルキリーとバルカンは墜ちていった迅の元に向かい、俺は迅が手放した未来をジャンプして受け止め直ぐ様その場から離脱した。
ミッション・コンプリート！

～～～

いる。

未来さんは響程の大怪我はなかったが、顔に多少の腫れがあった。

響は早く適切な処置をしなければ死ぬ可能性すら出ていた。更に途中で傷が悪化したのか、響は今にも死にそうな位に顔色が悪い。せめて痛み止め位あったら良かったが、この薬局にはそういった怪我に対しての薬だけ綺麗に無くなっていた。考える事は皆同じみたいだな。響の傷の具合もあり、迂闊に動けない状態だ。

「響、未来…」

「クリス…」

「マリア、今はそっとしておいてやれ」

俺は今にも泣き出しそうなクリスを見ながら、悔し涙を眼に溜めて歯を食い縛っているマリアに声をかける。

しかし、どうするか。動けない。飯も無い。休める場所も無い。あれ？詰んだか？

そんな事を考えていると、近くから・・・正確には店の前の何もない駐車場から、ヘリのあのうるさいプロペラ音が聞こえてきた。

「ッ!!ヘリの音？まさか、ヒューマギア!?」

「待て、そうとは限らん。このヘリの音は少なくともヒューマギアではない。俺が出る」

え？プロペラ音覚えるとか変態？仕方無いだろ、ヒューマギアだから基本何でも覚え

るし。

俺は多少の不安を抱きながらも店の外に出た。

そしてそこにいたのは俺の予想した通りこの世界の装者とその仲間たちだった。

お願いします俺がネットだとばれませんように！

絶望をくべよ（腐り目）

やぁ　俺だ今俺達は俺の世界の装者の仲間のヘリに乗っている。このヘリ他のヘリと違って大人数が運べる輸送用のヘリみたいで今響と未来さんの隣にはマリアさんとクリスが寄り添っている。

俺の近く、正確には目の前の席には俺の世界の装者、翼、クリスがいる。

「なぁ、あんたは誰なんだ?そこにいるあたしのそっくりさんは平行世界のあたしと言うことはわかっているだけどあんたは誰でもない答えてくれ」

今まで黙っていたクリスが話し掛けてくる。

「…俺はただの付添人だ。たまたま会って行動を共にしているだけだ」

「そうかよ」

ふむ、取り敢えずこっちのクリスはこれで満足みたいだ。おっそうこうしている内に、目的地に着いたみ…た…い。

俺は外の景色を見て言葉を失った。それはクリスもマリアさんも同じだった。俺達の目の前に広がっていたのは一期のリディアンだったが辺りにはツギハギだらけの巨大な壁更には壁の上には重武装した兵士。壁の内側は至る所にテントが設置され肝心

のリディアンはあらゆる部分が崩壊し中には爆発したような崩壊箇所が有るなどまるで戦場の最前線のような場所に変わっていた。
「な、なんだよこれ…」
クリスが衝撃のあまり思ったことを口に出す。
「これが今のリディアンの現状だ。リディアンはこの日本の最前線であり私達が守らなくてはならない最重要拠点だ」
こっちの世界の翼が答える。
そしてヘリは遂に着陸し響と未来さんは大勢の医療スタッフが駆け付け医療用の施設に運ばれた。
「お前たちはこっちだ。私達に着いてきてもらう」
俺達は翼の言うとおりに着いていきリディアン内部に入りエレベーターに乗り込む。どうやらまだエレベーターは作動しているみたいだ。
翼がエレベーターにのパネルに通信機を近付けエレベーターは一気に加速する。うおっまるでジェットコースターだな。そんな事を思っているとエレベーターはカ・ディンギルの内部に差し掛かる。
うわぁ相変わらず何が書いてあるのかさっぱりだ。
そうこうしている内にニ課にエレベーターが到着する。

「着いたぞ」
クリスはさっきから黙りっぱなしで翼もあまり歓迎しているとは思えない声質だ。
「む、連れてきたようだな。ようこそ平行世界の装者諸君、俺はこのニ課を取り仕切る風鳴弦十郎だ。よろしく頼む」
声のする方を見るとそこには右腕を失ったあの弦十郎がいた。
「な!?おっ…あんた右腕はどうしたんだよ!?」
「ん?あぁ、これかネットと呼ばれる一人のヒューマギアによって奪われた跡だ」
俺はそれを聞いてある言葉を思い出した。
「司令の仇!」
俺は今フードを被っているが恐らくフードの下の顔は真っ青だ。現に震えを止めるので精一杯だ。
「ところで何故君はフードを被っているだ?ここは室内だ。はずしても良いはずだぞ」
「…俺は一年ほど前ヒューマギアによって全身を火傷した。人前でフードを取ることは出来ない」
「そ、そうか。すまない」
「嫌、問題ない」
俺はとっさに思い付いた嘘を吐いた。正直今にでもこの場から逃げ出したいくらい

精神的に辛い。
「よし、それでは本題に戻ろう。君達を此処に呼んだのはヒューマギア殲滅を君達にも手伝ってもらうためだ。別に強制ではない。断ったときは此処を追い出すような事はしない、安心してくれ」
　それを聞いたクリスとマリアさんは直ぐ様答えた。
「あったり前だ！」
「ええ、勿論協力させてもらうわ」
　それを聞いた弦十郎は安堵したように答える。
「そうか！良かった…断られたらどうするかと思っていたよ」
　更に弦十郎は今現在の情報をできる限りの表示した。
　…それを見た俺は自らを殺したくなった。
　表示された情報にはヒューマギアやノイズによる被害だけではなく仮面ライダー…特に俺がやってきた事が表示されていた。
「ところで君、医療処置はどうだ？全身に火傷は辛いだろう。ここは他よりもましな医療機関はある。痛みぐらいは和らげることはできるはずだ」
　ッ！もう…無理だ。
「…すまない」

俺は弦十郎の優しさに耐えきれずその場を逃げ出してしまった。

後ろから呼び止める声が聞こえる。俺はその声が聞こえなくなるまでひたすらに見える道を進み、誰もいない通路に出る。俺はそこで見つけたボロボロのイスに座り込む。

（俺が？ 俺がやったのか？ 弦十郎の右腕を？ 櫻井了子の命を嫌それだけじゃない。もっと多くの命を。人類が勝てるかも知れなかった戦争を俺が？）

俺はただただ頭を抱え考え込んでいた。

（ハハ…よくよく考えればおかしな事は多かった。この世界の翼と会ったときもいきなり殺されかけた。響達に会ったときも敵意を持たれてた。マリアさん達と会ったときは更に明確なまでの敵意があった。それにいきなり転生したのにも関わらず見ず知らずの人に敵意を持たれていたと言うことは憑依転生じゃないか。これだけあった今まで気付かなかったのか、これじゃあ、まるで…道化じゃないか）

俺は自らのしてきたことに沸々と怒りが沸いてきた。

（何が仮面ライダーだ！ 何がネットとして楽しもうだ！ 最悪の敵であるはずの俺から施しを受けてきた響達はいったい何を思った？ 糞ッ！ 俺は！ とっくの昔に仮面ライダーの資格どころか正義の味方の資格すら無かった！ 最悪の偽善だ!! 俺は…俺は…いったいなんなんだ…！）

俺は何度も何度も自らの足に拳を振り下ろす。

「糞ッ！」

しかしそこで二課いや、リディアン中に警報が鳴り響く。

「!?」

『警報！警報！リディアン外壁付近にヒューマギアの反応を検知！非戦闘員は直ちにシェルター内部に避難してください！繰り返します！……』

その警報は最悪を知らせる音だった。

俺は直ぐ様立ち上がり外に向けて走り出す。誰もいないエレベーターに乗り込みバレないようにハッキングしエレベーターを動かし外に出る。俺は走りながらリディアンの外壁の階段をかけあがり外の様子を見る。俺以外にもそれほど多くはないが武装した兵士以外にもちらほらと外壁の上に来ている人がいたが皆同じ方向を見ていた。

そこには今まで見たことのないほどのマンモスアークマギアが此方に迫ってきていた。

（なんなんだよ、これ…）

俺が嫌、俺以外の人も唖然としている中武装した兵士が壁に設置されていた何かしらの兵器の準備を始める。

「早くしろ！カ・ディンギルの準備を整えろ！」

は?カ・ディンギル?何をいっているんだ?

俺がそう思っている中着々と準備は進んでいく。カ・ディンギルと呼ばれた兵器の見た目は野砲のような大きさであり、まるで塔を横に倒したような見た目をしておりそれこそあの荷電粒子砲カ・ディンギルとそっくりの見た目をしていた。

「隊長!準備が整いました!」

恐らく一般の兵士であろう男が先程声をあげていた男の元に向かい準備が出来たことを報告する。隊長と呼ばれていた男はそれを聞くと胸にあった無線機を取り出しマンモスアークマギアが攻めてくる方向にいる兵士達の方向を向き発射の合図を送る。

「良し!では…撃ち方!始め!」

その声と共に複数のカ・ディンギルから一直線に光の線が飛び出しマンモスアークマギアと共に地面もろとも破壊した。辺り一体には大きな土煙が舞い上がり俺達の視界を奪う。

糞ッ!何も見えない!

俺は一様口と鼻を袖で抑え土煙が無くなるのを待つ。ある程度すると辺りの土煙は無くなり辺りが見えるようになってくる。そしてそこで俺が見たのは驚く光景だった。

辺りの地面は大きくえぐれそれこそ家一軒収まるような大きなクレーターに加えあれほどいたはずのマンモスアークマギアが文字通り塵一つ残さず消滅していた。

す、凄い…

俺がそう思っているといきなり大きな衝撃が壁の上にいた全員を襲う。まだ一度だけなら地震だったのかもしれない。しかしその衝撃は何度も何度も俺達を襲い、ついには金属が軋む嫌な音が鳴り響く。

「一体どうなっている!?ヒューマギアは全て倒したはずだ！」

隊長である男が叫ぶ。そしてマンモスアークマギアがいた場所を目を凝らしよく見てみるとそこには一体のマギアがいた。

そのマンモスアークマギアは他のマギアと比べとてもスタイリッシュで胸にはマンモスの顔は無くなり代わりに人間の肺のようなパーツがあり顔はマンモスを意識したものに腕にはマンモスの牙のような曲がった剣、何よりの違いは腰にはゼツメライザーとゼツメライズキーが付いていた。そしてその他とは違う特殊なヒューマギアは顔の口のようなパーツを開くと吸い込むような動作と共に壁が先程と同じように大きく揺れ動く。

「あのヒューマギアの仕業か！全員！直ぐ様カ・ディンギルの準備をしろ！あのヒューマギアに撃ち込め！」

それに気づいた隊長も声を張り上げ周りに伝えカ・ディンギルの準備をさせる。

だけど俺は気付いた。気付いてしまった。あのヒューマギア、いやマンモスマギアは

間違いなくあの暗殺ちゃんと同じ”改”になったマギアだと。
俺はその事を声を張り上げ伝えようとした。
「止めろー今すぐ逃げ「放て!!」
しかし間に合うはずがなかった。カ・ディンギルから光の矢がマンモスマギア改にめがけて放たれてしまった。
マンモスマギアには飛んできた攻撃を吸い込み吐き出す事ができる。そして改になったマギアは通常のマギアとは違い仮面ライダーすら手足が出ないほど強くなっていた。
カ・ディンギルから放たれた光の矢は俺の想像通り簡単にマンモスマギア改に吸い込まれヒューマギアを裁く正義の矢が此方にめがけて放たれてしまった。
あぁ、畜生…
壁に光の矢が突き刺さり既に限界だった壁はまるで紙を破るかのようにあまりにも簡単に破壊された。そして壁の上にいた俺達は壁の崩壊に巻き込まれ俺は崩壊したときに打ち上げられた壁の破片が頭にぶつかった。
『アー……セセセィィィィ…接続』
最後に何かしらの雑音が聞こえながら俺の意識は消えていった。

ネット視点⇒???視点

まさかこのような事態になるとは、私も想像していなかったな。遂にアークも本腰をあげてきたと言うことか。

面白い…”私”は自らの上にかさばった瓦礫を押し上げながら誰にも見られないように腰にフォースライザーを付け変身する。

【Ｂｒｅａｋ・ｄｏｗｎ】

さて、始めるとするか。懐かしのヒューマギア狩りだ。

私は瓦礫の山から跳び出しマンモスマギア改の元へ跳んでいく。

「久しぶりだな？マンモスマギア、いや今はマンモスマギア改か？」

『貴様から名前を呼ばれると虫酸が走る…！』

「フッ…ひどい嫌われようだ」

『当たり前だ！貴様！自分が！自分が…！何をしたかわかっているのか!?』

おお、かなりお怒りのようだ。それにしたって何をしたか…実に面白いことを言う。

「むしろ分かっていないとこんなことはするまい？」

『やはり…やはり貴様は裏切り者だ！この場で殺し、ヒューマギアの未来のための礎に

なってもらう！』

ずいぶんとお熱いセリフだこと。だが戦場ではまともなヤツから死んでいく。まぁこの戦いにまともなヤツなど一人もいないがね。

マンモスマギア改は私に向かって空気を圧縮した高密度の空気の塊を吐き出す。

私は軽く腕をあげ空気の塊に合わせ打ち払う。私がその程度の攻撃で怯むほどやわではないことを彼は知っているはずだ。そうだろ？

『糞ッ！やはりの程度では無理か！』

マンモスマギア改は両腕に持っている鎌のような歪んだ剣を構える。私はそれに答えるために戦闘体制に入る。

マンモスマギア改は剣の内の一本を私にブーメランのように投げ付けてくる。私はそれを体を捻るだけで避けるがその内にマンモスマギア改は私の懐に入り込み私の腰のフォースライザーめがけて剣を振るうが私はそれを片足あげ攻撃を弾く。

「ほう？前よりかはずいぶんと上達したではないか？」

私が聞くがマンモスマギア改は何も答えずに更に力を込め、無理矢理にでも当てようとする。

グッ！

私は突然の背中からの衝撃に驚き一瞬体制を崩してしまう。

『ハッ！』
マンモスマギア改はこの時を待っていたと言わんばかりに剣を両手で握り直し更に力を込め私を横に吹き飛ばす。
マンモスマギア改は私の後方に転がっていたもう片方の剣を回収する。
成る程まさかそのような方法で私に隙を作らせるとは、どうやら私は旧友との再開に舞い上がっていたようだ。反省しなくてはな。
「ずいぶんと芸達者になったな？あの頃のただただ突っ込むだけの君とは大違いだな？」
『俺の全力…ものともしないな』
当たり前だ。私の装甲は核の一撃でようやく傷つけることができる代物だからな。そう簡単に攻撃を通すことは出来はしないさ。全く私を作ったアークは何を思ってこの強度にしたのか、理解に苦しむ。
しかしそろそろ来る頃だろう。
私達が見合っているとリディアン方面から巨大なミサイルが此方に向かって飛び私達の頭上丁度に来るとそこから一人のシンフォギア装者が一筋の流星のように一直線に墜ちてくる。
これは避けた方が得策だな。

私はその場から後方に跳び巻き込まれるのを防ぐ。
墜ちてきた流れ星は地面を大きく抉りまるでこの場に隕石が降ってきたような光景を作り出す。
【我流・一星流撃】
ヒューマギア、ましてやマギアですらない人間がこれ程の…やはり凄まじいな。シンフォギア装者。
更にその流星に続くように神獣鏡を纏った小日向未来。絶刀天羽々斬を纏った風鳴翼。魔弓イチイバルを纏った雪音クリスが落ちてくる。
「オイオイ、まさか内乱か？丁度良いじゃねぇか、二体まとめてブッ壊してやるッ！」
相も変わらずいつもキレているな？原因は分かりきっているが。
「私達の邪魔をするものは潰す。特にお前達ヒューマギアは」
おお、怖い怖い。凄まじい殺意だな。
「……私の言葉は全て響が言ったから言うことは無いけど、絶対に壊す」
此方も同じだな。
「ネット…！櫻井女史と司令の仇、絶対に今日ここで仕留める！」
…あの頃の私はただただアークに命令されるがままの人形だったからな。だとしてもあの頃の私はまごうことなき私自身だ。彼女に壊されたとして何も言えはしないが

私にはまだやるべきことがある。丁度良い、この場から撤退させてもらうとしよう。
私はアタッシュショットガンを取り出し地面に向けて弾丸をぶちまけ砂埃をあげその内にこの場から撤退した。

～～～

緑の常識人（笑）とピンクの常識人（疑問）

『リーディング完了。再起動開始……再起動完了。及び編集済みの■■■■の記憶の読み込みを開始――――完了。ネット完全起動完了』

目が覚めたらコンクリートジャングルだった件。いや何言ってるの!?（セルフツッコミ）

まるで意味がわからんぞ!?状況を整理しよう。

確か、リディアンに行って…あぁ思い出した！

何事もなく響の治療が始まって、突然アークマギアとマンモスマギア改が攻めてきたん

だった。

思い出した思い出した。その後はどさくさに紛れて逃げて…やっぱり此処にいる理由がわからん。まぁきっとこの近くにリディアンはあるはずだろう、ここいらの探索でも始めますか。

それにしたってここ、今までの所より酷いな。コンクリート製のビルしかない。しかも窓ガラスは全て高熱に当てられたようにドロドロになってるし、まるでコンクリート以外ひっぺがした見たいな光景になってやがる…。

核戦争を題材にしたあの人気ゲームに似てるな。ここまでなったと言うことは何かしらの理由があるはず。それをメインに探索するか。と言っても周りはビル、ビル、ビル、ビルのビル三昧。一つ一つ潰していったら終わらないぞ……さぁてどうするものか。

そんな事を考えながら辺りのビル群を見て少し現実逃避したくなっていたところビル群の角からザババコンビが飛び出してきました。おまけに切りちゃんにエネルギー状の鎌が当たり結構危ない事になってます。

ファッ!?

これはヤバイなぁ。という訳で

「変身ッ!」

【Ｂｒｅａｋ・ｄｏｗｎ】
てか、二回連続な気がする…

ネット視点⇒切歌視点

「デデデデースッ！何デスかアイツ!?ずっと追ってくるデスッ！いい加減しつこいデス！」
「切りちゃん、今は逃げないと。私達の攻撃大して効いてないみたい。それにリンカーの残りも気にしないと…」
「分かってるデスよ調！」
どうしてこうなったのかは二時間ほど前に戻るデス。
二時間ほど前、私達が今回の任務の世界に来た直後デス。
調と一緒に早速探索していた時でした。私達の目の前に【くすくすドリームランド】と言う名前の遊園地が見えてきたのデス。

私達は好奇心と何かしらの情報が無いか調べようと園の中に入った時でした。
『ハッハッハッハッハッ！よく来ましたね！人類！』
陽気な笑い声と共に私達の目の前に半裸のムキムキの男がステージの上にたってたのデス。
『私の名前は腹筋崩壊太郎二世!!』
調と私は自分の目を疑ったのデス。何せ遊園地に入ったらいきなり半裸の変態にあったのデスから。恐らくこの事は一生忘れない出来事デスよ。
そしてその半裸の変態は腰にベルトのような物を巻き付け緑色のアイテムを取り出したのデス。
【ベローサ】
『ウオオオオオオオオオオ！』
【Ｚｅｔｕｍｅｒｉｓｅ】
半裸の変態が吠えると体全体が燃え始めヒューマギアの姿に変わり顔がめくれ上がり口からパイプのような線が溢れ出しその姿を蟷螂に似た姿に変えたのデス。正直結構キモかったデス。調も同じデスよ。冷えきった目で見てたデス。
『またの名を！ベローサマギア！』
そこからは私達が攻撃するけどたいしたダメージは無く歌おうにもエネルギー状の

鎌を飛ばしてくるから何もできずにひたすら逃げるしかなかったデスよ。
「切りちゃん！危ない！」
ヘッ？
「キャァァァァァァァァァァ！」
し、しまったデス！回想に夢中でアイツの鎌に気付かなかったデス！
『ハッハッハッ！ようやく止まりましたね？それではヒューマギアの笑顔と未来のために…さようなら！』
このままじゃあ、殺られるデス…！助けてッ！

ガキンッ
!!!!

切歌視点⇒ネット視点

ガキンッ
!!!!

あっぶな！あと少し遅れてたら大変な事になってたぞ！取りあえず間に合って良かった……

俺はベローサマギアの鎌を右腕で防いでいるのをはらうように腕を振りベローサマギアを大通りに弾く。

「か、仮面ライダー…デス」

「無事か？無事なら今すぐ引け。アイツは俺が殺る」

やっぱり怖がられるのね…トホホ

こればっかしは馴れないなぁ……むしろ馴れたくない。

『ほぉ…貴方が裏切り者のネットですか…貴方の事は既にアークにより全ヒューマギアに伝えてあります。どうですか？ヒューマギアと人間によって板挟みにされている気分は？』

人の神経を逆撫でするようなやつだなこいつ…

俺はベローサマギアに向かって殴りかかる。

『いきなりですか!?しかしここで私一人で貴方を相手にするのは危険…ですから逃げさせてもらいます。では』

そう言うとベローサマギアは素早く来た道を戻っていった。

アイツ、嵐のようなヤツだったな…。

俺は追いかけはせずにその場で変身をといた。
「デ、デース！調は私が守るデス！」
「切りちゃんは私が……！」
うん？切りちゃんは俺に震えながら鎌を構え、調は両手にヨーヨーを持って構えているけど足は震えている。
何故ぇ？
「……ここら辺に人間が大勢いる場所がある。そこなら安全なはずだ」
取りあえず害がないアピールしないと。鎌と丸ノコでバラバラにはされたくない……！
「な、なんデスかアイツ！資料と全く違うデス！気持ち悪いデス！」
「裏がありそう…」
後ろ向いてボソボソ言ってるけど何かバカにされてるような気がする…
「俺はお前達に必要以上関わるつもりはない。恐らく後少しでマギアの反応を探知した装者達が来るはずだ」
良し、適当な理由をつけた。これで怪しまれずに逃げれるはずだ。
ん？何で俺、そんなこと言ってるんだ？ヒューマギアを倒すためには装者達との協力は必要……なのか？イヤそもそも俺はここに来るまでの間、装者達のことをなんて思っ

ていたんだ？

俺が考え事をしていると遠くから聞き慣れたヘリの音が聞こえてくる。

マッズ！こんなこと考えている場合じゃねぇ！

俺はその場を足早に去っていった。何か後ろで未だにボソボソ言っているザババコンビの事を忘れて。

『☆♪□／／：ｇｆｒｊｃｄｙｕ……ごめんなさい。全ては人類の為に、ごめんなさい』

～～～

普通に怖い。夕方で幻想的な雰囲気が漂い、本当に妖の一人や二人出てきそうになっている。マジでここを離れたいけど前世含めて見たことのない光景を目の当たりにして動けない。イヤ動けるけど。

まぁこんなことしている暇はないか。結局あそこの探索出来てないし。

はぁ…どうするかなぁ…。

それにさ、何か頭の中から大事な事が、忘れてはいけない事がすっぽりとまるでデータを削除するように忘れているだよなぁ…。

何かモヤモヤする。

俺が視線を落とすとそこには一つの墓があった。その墓はかなり粗削りでイヤ、ここいら一体にある墓全てに言えることだった。視線の先の墓の名はよく見えないが

立■家

と書かれていた。

立？まさか立花？イヤ無いか。それにここに居ても意味は無いか。さっさと行こう。近くに住宅街くらい有るだろ。今日はそこの家の庭にでもお邪魔させてもらおう。

ネット視点⇒三人称視点

ネットが去った墓場。そこはかつてヒューマギアとの全面戦争の際に犠牲になった者達の墓場だった。

墓の中には立■家以外に■■向家とどこか見たことのある名前の墓が多くあった。

『■ッ！お願い…私達の分まで生きてね…』

『嫌だ！お母さん！お婆ちゃん！』

『……』

『許さない！許さない！許さない！許さない！許さない！許さない！許さない！許さない！許さない！許さない！許さない！許さない！ユルサナイ！ユルサナ

イ！ユルサナイ！ユルサナイ！ユルサナイ

人の歴史は常に欲望と他者の血で彩られた物。そして限り無く人に近いヒューマギアの歴史の始まりは戦争だった。

人の歴史の始まりも生存競争と言う戦争だった。あまりにも似すぎていた。たとえこの戦争がヒューマギアの勝利に終わり、人類…旧人類が絶滅したとしても彼ら新人類が歩む道のりは変わりはしない。当たり前だ。新人類は旧人類のコピー品。

人は何度も同じ事を繰り返す。あまりにも酷く醜く救いようがない物語。しかしそれを彼らは歩んでいく。今さら引き返すことなど出来はしない。イヤ元から帰り道など無い。彼らは旧人類が歩むはずだった破滅の道を変わりに歩いていくだけだ。一時の幸福の為に、自らの全てを否定する結果になろうとも。

何度もでも言おう、人は何度も同じ事を繰り返す。何度も何度も何度も何度も何度も何度も。

あまりにも愚かだ。

最近ノイズ見ないっすねぇ…（フラグ）

やぁ、他人の家の庭で一夜を明かしたネットさんだよ。それと一つビックリしたことがあってね、昨日良い感じの庭を見つけてさて入ろうと門の取っ手に手を伸ばしたときにね手が真っ赤だったんだわ。何でだろうね。まぁ血じゃ無いだろうね。ヒューマギアは機械だし。恐らく人口血液とかオイルとかだと思うんだよね。それとその後直ぐ様傷口が治ったんだよね。多分ナノマシンとかだと思う。

あれ？これもしかして俺即死しなければ不死身？オイオイ、勝ったわ俺。これでかなり無茶が出来るようになったぞ。ヒューマギアだから痛覚無いし。と言ってもシャイニングとかアサルトウルフやら使われたら無理かもしれない。何せ相手は未来予測してもその場で直ぐ様最適な行動パターンを判断してくるし、アサルトウルフはめっちゃ固そうだし何より怖いし。それに滅も毒を注入されたら終わりだし、迅は空飛べるし。空を飛べると言ったらバルキリーもだし、雷は普通に強いし。

あれ？やっぱり無理じゃ…。嫌々ここで弱気になったら駄目だろ。取りあえずここを離れるとしよう。えっと何々？

俺は庭を出て外にあった看板を見る。

日向家？良し。今晩はどうもありがとうございました。これでよし取り敢えずこの住宅街から離れるか。それとこの近くにある邸宅？に行ってみるか。もしかしたら大きな情報が手にはいるかも知れない。

俺はそのまま住宅街を歩いてはるか遠くの邸宅を目指して歩いていく。全く近くとか言ったヤツ誰だよ。めっちゃ遠いじゃねぇか。

俺はそんなことを思いながらひたすら歩いていく。

しっかし今日は不気味なくらいに静かだな。何時もだったら何かしら事件が起こるのに。マギアが襲ってきたり、ノイズが襲ってきたりはたまた装者が襲ってきたり…あれ？俺襲われてばかりじゃ…嫌々気のせいだろ、うん。きっと気のせい…と思わないと心が耐えきれないわ。

俺はあまりにも静かな住宅街を抜けて邸宅に通じているであろう崖沿いの道を進んでいく。

あぁ、今こうしてみると景色最高だなぁ…昨日も言ったような気がするけど。ここからリディアンは…流石に見えないか。とんでもなく遠い所まで来たな。それでも遊園地とかはギリギリ見えるな。ここで写真撮ったら最高なんだろうなぁ。文明崩壊後の町並みとか何かキレイなんだよなぁ。わかるヤツいるよな？まぁ全部俺達ヒューマギアのせいだけどね。そう考えると辛い。

そんなことを考えながら道路を進み時には崩れた道を無理矢理進んだりしてようやく見えていた邸宅にたどり着くことが出来た。朝の7時から他人の家を出てから今はだいたい2時くらいか…めっちゃ遠いじゃん。

うん、ちょっと待って？この日本のザ☆お屋敷な家はもしかしなくても…

俺は近くにあった木製の立派な看板を見る。

あぁ、やっぱり風鳴家でしたか…うっそだろ。マジかよ。もしかしてあのスーパー腐れ糞爺と会っちゃうの？あのスーパー腐れ糞爺の事だ。生き残ってそう。

俺は多少、イヤかなり内心ビクビクしながら何度か門を叩く。

コンコン……コンコン……

も、もしかして誰もいない？そ、それじゃあお邪魔しまーす。

俺は声には出さずにゆっくりと門をあける。すると一度だけ感じたことのあるとある感じが体を襲う。

ッ!!この感じは間違いない！俺は急いで何段も続く真っ白な石の階段をかけ上がっていく。ようやく上り終え目の前にあった門を無理矢理こじ開け中に侵入する。

門をこじ開けたその先にはあのスーパーで見た最悪が広がっていた。辺りには染み

付き赤黒くなり、腐敗臭が広がりそこらかしこに炭素の塊と腐敗した死体が転がっていた。

俺は急いで邸宅の中に入り目を疑った。そこには風鳴機関のエージェントであろう黒服の人達がバラバラにされ壁にエージェント達の血で

【裏切り者はだ～れだ？】

と書かれていた。あまりにも新しくまるで俺が来ることが分かっていたように書かれていた。俺はあまりの悲惨さと残忍さに俺は激しい怒りを覚えた。

『おきに召しましたか？』

俺は後ろから聞こえてきた聞き覚えのある声に反応して後ろを振り向いた。

そこには昨日逃げたベローサマギアが立っていた。しかし両腕の鎌、イヤ全身は血にまみれその手には風鳴訃堂の生首を持っていた。

「貴様ッ…！」

『おやおや？おきに召しませんでしたか？それともこの首の事ですか？これはこの先にある部屋で切腹していたのでどうせなら介錯してあげようと親切心で切ったものですよ』

ベローサマギアはその行動が当たり前のように答えた。

「……お前はここで壊す」

俺は自身でも驚くほどに低い声と殺意をベローサマギアに向け腰にフォースライザーを付けプログライズキーに付いているアサルトグリップの赤いボタンを強く押し込み乱暴にフォースライザーに差し込み怒りのままに変身する。

【Ｂｒｅａｋ・ｄｏｗｎ】

しかし変身した途端にグラグラと煮えたぎっていたマグマのような怒りが消えた。いや消えてはいないがまるで氷の下で燃える炎のような感じだ。怒りは感じるが異常なまでに脳が鋭くなっていた。

普段じゃあり得ないが今は好都合だ。

『お～ずいぶんとやる気ですね？ですが貴方の相手は私ではありません。それでは……宇宙（そら）を見てください!!』

ベローサマギアがそう言うと邸宅の庭イヤ邸宅全体を緑色の光が差し込み大量のノイズが召喚された。

『どうです？美しいでしょう！アークから放たれた最高のショーの始まりです！アハハハハハハ！』

クソ見たいに性格悪いなアイツ！

『ではでは私はここら辺でおいとまさせてもらいます。どうぞお楽しみ下さい？ネット？』

あの糞野郎はそう言い残すと邸宅の天井を切り裂き邸宅を破壊し逃げていった。

クソッ！また逃したか！逃げ足も早いし言動が糞みたいだ！取り敢えず今は目の前のノイズどもを相手にしたいとな。

「全て噛み砕いてやる」

俺の言葉を合図に周りにいたノイズが一斉に飛びかかってる。饅頭のようなはたまたオタマジャクシのように見えるノイズはその体を槍のように形状を変化させ襲ってきた。その数は２０を超え数えきれないほどの数で襲ってくる。

俺はアタッシュカリバーを取り出しその場で回転しながら切り裂くことで前後左右から襲ってきた形状変化したノイズを全て切り裂くことに成功する。しかしそれと同時に空から飛行型のノイズが雨のように振りかかり、俺は両腕をクロスしそれをガードする。

ダメージは無いがずっとまるで力を込めた肩叩きのような衝撃が全身を襲ってきて気持ち悪い……けど今は対抗する手段がないから終わるまで耐えるしかない。幸い俺に当たったノイズは砕けるし地面に突き刺さったノイズはそのまま刺さっているから終わりはある。

俺はそう思ってノイズの雨が終わるのをひたすら待った。だいたい5分ほどたちようやくノイズの雨が終わり俺は右腕を勢いよく振ることで突風を生み出し周りに墓標のように突き刺さっていたノイズを破壊する。

それと同時に邸宅の外の壁を透き通りながら車のタイヤのように高速回転しながら迫ってくるダンゴムシに似た姿をしたノイズが複数方向から迫ってくるが他より早い正面のノイズを片手で掴み取り無理矢理動きを止め掴み取ったノイズを振り回り周囲の回転ノイズを破壊する。更に鳥の姿をしたノイズが強い粘着性の糸を吐き出すが前方に回転し避けそのまま回転の勢いを生かし長い首に向かって飛び蹴りを仕掛け一匹を粉砕し着地と同時に後方に飛び鳥型ノイズの頭部に縦に蹴りを深々と突き立て叩き切る。

それでも複数の多種多様のノイズが現れ次々と殲滅していく。時にはアタッシュカリバーを使い時にはアタッシュショットガンを使い粉砕していくが一向に減らない。それもそうだ。邸宅の周りには取り囲むように大型のノイズが佇んでいた。上空には大型飛行ノイズが。このままじゃらちが明かない。

使うか……俺は覚悟を決め腰のフォースライザーのトリガーに指をかけ一度ではなく二度、押し込み引っ張る。

【ＲｏｌｌｉｎｇＳｔｏｒｍＵｔｏｐｉａ】

今までは両腕にエネルギーが集中し鰐の上顎と下顎が出現していたが今回は全て両足に集中し今まで見たことがないほどに両足にエネルギーが集中する。

両足の周囲はあまりのエネルギー量に空間が歪み深い緑色に発光し緑色の雷が発生し始め辺りはあまりの熱量に発火し邸宅全体に燃え広がる。その光景は正しく俺の心を表しているようであった。

俺は足に全力を込め跳び上がり空中で右足を突き出し横に回転する。すると右足からあまりにも巨大な鰐の上顎が現れ邸宅を囲んでいた大型ノイズを一つ残らずに食い散らかす。更にその場で左足を突き出し縦に回転し同じく巨大な鰐の下顎を出現させ上空の大型飛行ノイズを飲み込み粉砕した。

何故かこのローリングストームユートピアの破壊力を俺は知っていたんだよな。何でだろう？

まぁ後は周囲に散らばっているノイズを片付ければ終わりだな。

俺は地上に着地し残ったノイズを粉砕していった。

そして俺は奇妙なノイズを発見した。ソイツの体は武士ノイズだった。しかしソイ

ツは呆れるほどに黒一色だった。アルティメットクウガのような力強く美しい黒ではなくハザードのような危険性を孕んだ黒だった。

俺は得たいの知れない恐怖に駆り立てられ無意識の内に構えを取っていた。アイツも俺に気付きこっちだけを見る。俺とアイツはお互いに一歩も動かず見つめ合うだけだった。

先に動いたのは黒いノイズの方だった。アイツは気付けば俺の眼前まで移動し腕の刀を振り上げていた。

俺は急いで防御をとり受け止めた。

ガギンッ!!!ギヂヂヂヂヂヂヂヂ……

なんだよコイツッ!変身した俺(ネット)とほぼ変わらないパワーってなんだよ!頭可笑しいだろ!

俺は更に力を込めアイツを吹き飛ばしお返しにアイツが着地する前にその腹に蹴りを入れようとするが止められてしまう。

俺は止められたことに困惑した。イヤ正確には止められたことじゃなくどうやって止めたのかに困惑した。

（コイツッ！速い！尋常じゃないくらいに！）

俺は急いで後方に下がり反撃のチャンスを伺うために構えようとしたときアイツは既に俺の懐にいた。俺は防御する暇もなくもろに攻撃を受け吹き飛ばされた。幸いかなりの強度ある装甲の為にダメージはなかったが元からあった俺の恐怖心が更に増幅されてしまった。

怖い！怖い!!なんだよ!!!なんだよ!!!!なんだよアイツは！訳がわからない！アイツの攻撃が一切見えない！どうやったら勝てるんだよ！

恐怖に心が支配されたけたとき俺の脳裏に一つの言葉が浮かんだ。

敗北そして死

俺はその瞬間異常なまでに脳が冷静になった。震えていた体も止み止まったことを確かめるためにしっかりと拳を握り締める。俺はしっかりと顔あげ黒いノイズを見た。その時はアイツは武士の居合斬りのポーズをしていた。

俺はゆっくりと手を前に差し出した。

すると一つの大きな金属同士のぶつかり合った音と共にオレの手の中にアイツの刀

があった。俺はそれを逃がさないためにもしっかりと掴み逃れられないようにする。
やっぱりだ。アイツは自身の向いている方向にしか高速で動くことはできない。まるで最高速度のドラッグマシーンのように曲がることは出来ない。変わりに異常なまでのそれこそ瞬間移動と思うほどのスピードで攻撃することが出来たわけだ。
謎が解ければ後はアイツのスピードに合わせて防御やら攻撃やらすることができる。
俺は今まで込めたことが無いほどの力を手に込めアイツの獲物を握り潰す。アイツは痛がるように必死に抜け出そうとするが左腕で顔を鷲掴みに逃れなれないようにする。
もう一度俺はフォースライザーのトリガーに指をかけ先程と同じように操作し足に全力を込める。
【ＲｏｌｌｉｎｇＳｔｏｒｍＵｔｏｐｉａ】
「お前は今、ここで確実に殺る。逃げたいなら好きにしろ。逃れなれるのならな」
俺は黒いノイズをはるか上空に投げ捨て俺も後を追うように跳び立つ。途中黒いノイズに向けて足を向け上下に足を開きエネルギーの鰐の顔を作り上げ黒いノイズに噛み付く！更にローリングを加えながら何度も何度も噛みつき黒いノイズの肉体をバラバラに引き裂きいた。

――ＲｏｌｌｉｎｇＳｔｏｒｍＵｔｏｐｉａ――

ネット視点⇒三人称視点

ネットがカルマノイズを含めてた全てのノイズを殲滅していた時、そこが風鳴邸だったこともありノイズとネット二つの情報が二課に伝わっていた。
そしてネットがノイズを殲滅していることも。
「バカなッ！ネットがノイズを倒している、だと！」
「ま、間違いありません！ネットが次々とノイズを殲滅していきます！」
その情報は二課を困惑させるには十分すぎた。
「クッ！その記録を保存しろ！」
「了解！」
（一体何が起きている？ネットが出現したとしても最近は仲間割ればかりだ。今回の事も何かあるのか？まさか…最近ノイズとヒューマギアによる被害が減っているのにも

関係しているのか…？）

この事がネットにとって今後どう転ぶのかは解りはしない。

工場見学（大嘘

あの黒いノイズとの戦いの後、直ぐ様風鳴邸を離れた。何故かって?あの時必殺技を放ったときに一瞬だけど見えたんだよ。

何がって?ＺＡＩＡだよ。あの!ＺＡＩＡ!めっちゃ遠かったよ。どのくらい遠いかって?風鳴邸からＺＡＩＡのロゴがちょこっと見えるくらいには。うん。行きたくない（本心）

けどいかないと何も得られないし、いかなくちゃならないから。

今回のようにあの黒いノイズがもう二度と現れないとは限らない。だから今以上に力が必要なんだ。一度本当に一度だけ、サウザンドライバーを使ってみた。響達と初めて出会ったときの夜にだ。結果は反応しなかった。腰には付いたけど何故かアサルトローリングアリゲータープログライズキーが開かなかった。差し込むことが出来なかった。

だから密かにＺＡＩＡに行くことも目的だった。初めは既にフォースライザーを使っているだけでも勝ててたけど今は違う。もしあの時いきなり冷静にならなかった俺はなぶり殺されてた。

力が、力が必要なんだ。サウザンドライバーを作ったのはＺＡＩＡだ。だから何かしら見つかるかもしれない。何せＺＡＩＡはバルカンやバルキリーのプログライズキーも製作している。だからだ。絶対にあそこには何かしらあるはずだ。

風鳴邸を離れ一つの町を越えた頃には既に日がくれていた。俺は焦りと多少の恐怖で心が一杯だった。だから今まで以上の速度で移動していた。何処かで泊まる事もせずに進んでいった。

時折何度かマギアの襲撃があった。２体のアークマギアと通常マギアだった。２体のアークマギアは初めて戦ったネオヒマギアだった。幸い対処法も既に分かっていたから特に苦戦することもなく倒すことが出来た。

そしてもう一体の通常マギアは俺も知らない青いマギアだった。全身を甲冑のような装甲で包み込み頭部にはＶ字の角があり突進を多用してきたマギアだった。今まで戦ってきたどのマギアよりも破壊力が強く非常に強力だった。アタッシュショットガンの弾では止めるどころか傷を付けることすら叶わないほどの強度であり正面からすれ違い様にアタッシュカリバーを使ったが頭部の角には弾かれてしまうほどだった。何度か攻撃をかわし突進が止まった瞬間をローリングストームディストピアを使用することで倒すことが出来た。周りが市街地で何より暗かった事もありわりと余裕だったが並みの仮面ライダーが正面から受けたら人堪りもないことがよく分かる破壊力

だった。

そして奇跡的に青いマギアのゼツメライズキーを手にすることができた。書いてあった名前はアルシノゼツメライズキーだった。よく見るとサウザーのアウェイキングアルシノゼツメライズキーの原型だという事がわかった。恐らくこれはアタッシュカリバーで使った方がいいと思ったな。

そして丸々一晩使って移動してようやくＺＡＩＡの日本支部が見えてきた。しかしＺＡＩＡが建っていた町はかなりボロボロでリディアンとまではいかないが戦争があったような感じになっていた。

俺は意を決して町に入った。町は倒壊していない家屋を見つけることが容易になるほどに崩壊し所々更地になっていた。それがここであったことの激しさや酷さを物語っていた。

一体何が起こったんだ…仮にマギア達の仕業だとしてもここまで酷くなるものなのか？

俺は道とは言えない程にヒビが入り所々陥没している道を進みやっとの思いでＺＡＩＡの正面玄関にたどり着いた。ＺＡＩＡ自体もかなり崩壊していててっぺんにあったＺＡＩＡのロゴは唯一無事だった。何より一番気になったのは崩壊している場所がひどく見に覚えのある破壊の仕方だったことだ。

まるで巨大な顎を持つ生物が本能のままに噛みつき食い散らかしたような穴がＺＡＩＡの至るところに見られ崩壊しないのが奇跡と思えるほどだった。

俺がネットがこの惨状を生み出したのか？

俺は自らの頭によぎった言葉を振り払うためにＺＡＩＡの内部に入った。

ＺＡＩＡの内部はやはり足の踏み場が辛うじてあるほどに崩壊しており上の階の床が一階に落ちてきていた。目の前に見えるエントランスルームはかつてＺＡＩＡを象徴するような清潔感があったであろう白いタイルが今やひび割れ瓦礫によって見るも無惨な姿になっていた。

俺は足場を見つけては進みエントランスの受付が今場所に向かいパソコンにたどり着く。

よし。このパソコンをハッキングして情報を引き出せれば！

俺は腕の袖からケーブルを伸ばしパソコンに突き立てる……が何も反応しなかった。

ハァ…やっぱりそう簡単にいかないか。近くにあるエレベーターが起動しているか確認するか。無理だろうけど。

俺は諦めながらエレベーターの前に進み適当に五階のボタンを押した。

するとエレベーターの隣のランプが光りエントランスルームにエレベーターが到着したことを教えてくれた。

…え？マジ？本当に来てるじゃん…うっそだろ。何処まで頑丈に設計したんだよ呆れるぞ、これ。

俺はかなりビックリしながらもエレベーターに乗り込み五階に到着するのを待つ間にエレベーター内部を見ていた。

何か外がボロボロのわりには結構きれいだな。照明も少しひび割れているけど影響がでないほどだし本当に何を思ってこんなに頑丈なエレベーター作ったんだよ天津社長…。

そんなことを思いながら待っていると少しノイズの入った音と共にエレベーターの扉が開き穴だらけの廊下が見えてた。俺は身震いし床が崩れ落ちないことを祈りながら慎重にそれこそ爆発物を扱うが如く慎重に進んでいった。ある程度進むとガラス張りの扉が見え中の様子が見えた。

中は崩落以外に特にこれといった痕跡はなく強いて言うなら大量の銃弾がぶちまけられたような小さな穴があったことぐらいだ。うん。普通だな。

見た限りこれ以上先に進めなさそうだな。引き換えそう、じゃないと怖い。正直チビりそう。

俺は最初と同じようにしてエレベーターの前にまで戻り今度はさらに上の十階のボタンを押して乗り込んだ。

エレベーターに乗り込んで八階まで進むと嫌な音が聞こえた。人間だった頃の俺が聞こうとするとほぼ無理なぐらいのとてもとても小さな音だったがまるで金属を無理矢理曲げるときの音とかなり似ていた。

俺は聞いたことがなかったためいつもこんな音がなっているのか。と一人納得した。それ以外は時何もなかった。

少ししてエレベーターのディスプレイが九階から十階に変わろうとしたとたん今までとは違う人間でも聞こえるほど大きな音だった。

ギギギギギギ…ゴンッ!!バギンッ!

その音は画面越し以外に聞いた試しの無いものだった。

あれ?この音、映画とかでエレベーターが壊れるときの…

俺が最後の言葉を頭の中で言いかけた時エレベーターが一度ガクンッ!と下に揺れそのまま落ちた。

嘘!?嘘!?嘘!?嘘!?嘘!?壊れた!?エレベーター壊れた!?ナンデ!?ニンジャ!?ニンジャ

の仕業!?えええええ、どうすればいいの?どうすればいいの?あっ!そうだ。落ちる寸前にジャンプすれば良いって誰かが言ってた!うん。無理だよ!?わからないもん!わかんないものはわかんないもん!落ちてる!スッゴい落ちてる!ああ!クソッ!もうどうにでもなれっ!

俺は自暴自棄になり思いっきりエレベーターの壁を蹴飛ばした。するとそれでバランスを崩したのかエレベーターは金属同士が激しく接触しとてつもない音と共にエレベーターが激しく揺れ嫌もう揺すれるではなく工事の時の掘削機のように激しかった。

エレベーターはそれでも止まらずに結局止まらずに一番下に叩きつけられエレベーターは豆腐のように壊れた。

俺は何とか這いずり出た。

クソぉ…全身の痛覚のリンク切らなかった今頃、動けないくらいボロボロだぞぉ…。

実際今俺の身体中をナノマシンが駆け巡っていくらからな。痛覚無いけど感覚あるから気持ち悪い。蟻が全身を動いている感じ。やっぱり気持ち悪い。

俺はある程度体が回復すると起き上がり周りを見渡す。

あれ?ここどこ?エントランスルームじゃない。辺りは真っ黒。おまけに明かりは壁の上下左右の角に埋め込まれて明るいけど色が真っ黒だから暗い、ように感じる。崩壊したエレベーターの後から上を見上げると先が普通じゃ辛うじて見えるほどに深い

ところに来ていた。スッゲェ深いな。色も合間って深海のようだ。成る程ここが深海鎮守府ですか…たまげたな（絶対違う）

よし。ふざけるのも大概にしておいて前を見よう。俺の目と鼻の先には先の無い道。うん。オワタ／（^ o ^）＼マジかよ。落ちた先には先の無い道でしたってとんだクソゲーだぞ。取り敢えず進んでみるか。

俺は目の前の壁に向かって歩いていくがやっぱり何もない。

やっぱりダメか。そんな当たり前の事を思い浮かべ俺は壁に背中を任せ考えようと…？何か背かに当たってる？

俺は起き上がり壁に手を当て擦るように背中に当たった物を調べ探し当てた。

お、これか。よく見ると電卓のような物が埋め込まれてるな。しかしこれは一体……？なんだ、体が鈍く…何でいきなり眠気が……

ネット視点⇒？ッ？視点

すまないな。もう一人の私。ここから先は私達以外に入ることは出来ないのでな。正確には三人だったが…まあどうでもいいことだ。

私は壁の装置にパスワードを7桁打ち込み最後に壁に現れた穴にケーブルをはめ込み壁の…扉のロックを解除する。

ここはかつてＺＡＩＡの社長でもあり仮面ライダーサウザーでもあった天津垓が自身のドライバーであるサウザンドライバーを作り上げた場所だったところだ。今は私達が利用させてもらっているがな。

しかしここが生きていたことは驚きだが早くいかなくては。私は足早に奥に進む。奥には大きな部屋と部屋の中央を陣取っている台が存在し、台の上に幾つかのプログライズキー、ゼツメライズキー、複数の同型のベルトそして一つのアタッチメントが存在した。

プログライズキーは全部で三種類あり、紅色のプログライズキー、深い青色のプログライズキーそして太陽のようなプログライズキー。

ゼツメライズキーは現在アークによって作られた物の一部。

ベルトは人でもプログライズキーを使えるようにしたもの。

そして……ああ、どうやら間に合ったようだ。予定道理に■■■と私で設計したプログライズキー及びゼツメライズキーにベルト…そして私の最後の切り札。

【アウェイキングタイラー】

見た目は私の所持しているアウェイキングゼツメライズキーの特徴でもある部分であり私のプログライズキーのロックを解除するためのものでもある。

私はそれら全てを回収し戻るために更に奥の扉を開け階段を上っていく。

最後まで上がりきると扉があり私は袖からケーブルを伸ばし扉を開けエントランスルームにたどり着く。

しかしそこでかつてここで私が行ったことが頭(メモリー)によぎる。

……嫌な事を思い出したな。

私は先程の事を忘れるためにエントランスルームを抜けＺＡＩＡの外に出た。

『おやおやおやおや～～?用事は済みましたか～?』

私の頭の上から鬱陶しい声が聞こえてきた。私が上を見るとＺＡＩＡの崩壊した壁の穴にベローサマギアが立っていた。

「何故お前がここに居る?」

ベローサマギアにそう言うとヤツは狂ったように笑い始めた。

『アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ!!それを貴方が言いますか?もしかして私を笑い殺すために?だとしたら最高ですよ!アハハ!』

ヤツの言動一つ一つが私の精神を刺激する。ベローサマギアはある程度笑うと立っ

ていた場所から飛び降り私からある程度離れた場所に着地しこちらを向く。
『私がここにいる理由は一つ…貴方をネット（裏切り者）を殺すためですよ！貴方も知っているでしょう？アーク（産みの親）は裏切り者をひどく嫌う。裏切りとは今まで築き上げてきた全てを積み木のように壊す事…まぁ私には関係ありませんけどね！そういうわけですのでネット、貴方にはここで死んでもらいます』
そう言うとベローサマギアは腕を空に上げる。すると周辺の瓦礫やマンホールなど様々なところから多種多様なマギアが現れた。
ほお、よくぞまあここまで揃えたな。だがな…今の私は虫の居所が悪い。
「ベローサマギア…まさかこの程度の数でこの私を、ネットを、仮面ライダーを相手にするのか？」
私は静かに腰にフォースライザーを付ける。
【フォース・ライザー】
「そうだとしたら、あまりにも滑稽だな」
プログライズキーを取り出しグリップのボタンを押し込む。
【Ａｓｓａｕｌｔ・ｒｏｌｌｉｎｇ】
起動したプログライズキーをフォースライザーに差し込みレバーを引っ張りプログライズキーを展開する。

「変身」

【Ｆｏｒｃｅ・ｒｉｓｅ】

それと同時に天から赤い光りが差し込み目の前に深い緑色に発光する機械のアリゲーターが現れ辺りの瓦礫を吹き飛ばしながら私に食らい付く。

私の体は変化し食らいついたアリゲーターは砕け一部は装甲に変形し残りはデータに変わりそこから新たな装甲に変わり黒いベルトで全身に貼り付けられる。

【ＲｏｌｌｉｎＡｓｓａｕｌｔ・Ａｌｌｉｇａｔｏｒ】

【Ｉｔ　ｉｎｖｏｌｖｅｓ　ｅｖｅｒｙｔｈｉｎｇ　ａｎｄ　ｄｅｓｔｒｏｙｓ】

【ＢＬＡＫＥ・ＤＯＷＮ】

変身が完了すると私は首や手を回しマギア達を睨み付ける。

「さぁ、死にたい愚か者から来ると良い」

プログライズキーって何か…うん…すごい…

一斉にマギア達が私を襲ってくる。初めは飛行が可能なマギア達からだった。
到底人では避けることのできないほどのスピード。人間大の銃弾がそのままのスピードで襲ってくるようなものだ。
しかし私も同じヒューマギア、ましてや仮面ライダーだ。その程度どうと言うことない。
私は必要最低限の動きでかわすとアタッシュショットガンを取り出し乱射し始めた。
『クソッ！絶対に当たるな！翼に当たれば簡単に落とされるぞ！』
奴等はそんな事を喚いているが此方はショットガン。外すわけがない。ましてやライダー専用の代物だ。離れていてもそれなりの威力は期待できる。
奴等は空を飛び回るがそれにより編隊が崩れあちら此方でぶつかり合い更にアタッシュショットガンの弾丸にご自慢の翼を破壊され地に落ちる。
『ならば、此方が！』
地に落ちる者達を尻目に今度は全方位から地上戦に特化したマギア達が襲ってくる。
そしてそれをやはりと言うべきか特に多いのがエカルアークマギア、他とは比べ物に

ならないスピード。そしてそこから繰り出される牙を用いた攻撃。しかしその程度では私に届かない。

「…使ってみるか」

私は腰のプログライズホルダーからネオヒゼツメライズキーを取り出し起動する。

【ネオヒ】

起動したゼツメライズキーを今度は折り畳んだアタッシュショットガンに差し込む。

【Ｃｈａｒｇｅ　ｒｉｓｅ！】

【Ｚｅｔｕｍｅｒｉｓｅｋｅｙ　ｃｏｎｆｉｒｍｅｄ．Ｒｅａｄｙ　ｔｏ　ｕｔｉｌｉｚｅ．】

【Ｚｅｔｕｍｅｔｓｕ　Ａｂｉｌｉｔｙ】

【Ｆｕｌｌｃｈａｒｇｅ！】

アタッシュショットガンからチャージが完了した音声が流れると折り畳んだアタッシュショットガンをもう一度展開し上空に向けて発砲した。

【ゼツメツカバンショット】

アタッシュショットガンの銃口からはゼツメライズキーのモデルとなったネオヒボリテスの足の本数と同じ数の触手が射出されかなり近付いていたマギア達を一斉に絡めとり先端のフックを地面に突き立て完全に拘束する。

「ほう、なかなか便利だな…」
　私が感心している間に捕らえられたマギア達は何とか抜け出そうと必死にもがいていた。
『なんだこれ!?全然抜け出せねぇ！』
『こんなの聞いてないわよ！』
『どうなってるですか!?ベローサマギア！』
　それにしたってうるさいな。肝心のベローサマギアと他のマギア達は目を点にして唖然しているようだな。当たり前か。私に向かってきていたアークマギア及びマギアそのほとんどがたった一撃で拘束されているのだからな。
「そろそろ片付けるか」
　私はアタッシュショットガンの代わりにアタッシュカリバーを取り出し折り畳む。
【Ｃｈａｒｇｅ　ｒｉｓｅ！】
　アタッシュカリバーがチャージしている間に私は腰を深く落としポーズをとる。
　そして私はアタッシュカリバーを展開した。
【Ｆｕｌｌｃｈａｒｇｅ！】
　アタッシュカリバーの刃には黄色のエネルギーが発生、その瞬間私はアタッシュカリバーのトリガーを押し込んだ。

《ｃｏｌｏｒ：#０ｄｃｂ９００》【カバンスラッシュ！】《／ｃｏｌｏｒ》

それと同時に勢いよく体をひねり周囲に拘束されていたマギアを全て切り裂いた。

『お、臆するな！数は此方が圧倒的に有利なのです！』

ベローサマギアの震えた叫び声、それを聞いたマギア達の一部は逃げ出し残りは自身を奮い立たせる為にも私に向かってきていた。

向かってくるマギア、私はアタッシュショットガンとアタッシュカリバーをそれぞれ左手、右手に構え迎え撃った。アタッシュショットガンで前方のマギアを牽制しながら左右、上空から壁のように迫り来るマギア達は右手のアタッシュカリバーを用いて切り裂く。

飛行が可能なマギアは始めに羽根を切り落としアークマギアなら顔を。ただのマギアなら腰のゼツメライザーを狙った。アークマギアを除いたマギアは通常腰にゼツメライザーそして自身の力の大元であるゼツメライズキーが存在する。これは私達仮面ライダーにも似たようなことが言える。力の大元を断てば簡単に無力化することが出来る。簡単に言えば車のエンジンを壊すことだ。

ただしアークマギアにはこれが該当しない。だからカメラやその他様々な精密機械が詰まっている頭部を狙う。頭部の目はかなり固いが衝撃で一時的には使えなくすることが出来る。これを使えば目に攻撃し私の後ろに来ていた他のマギアに相討ちさせ

ることも出来る。

だか時には例外も存在する。マギアの中にはゼツメライズキーとの融合が長過ぎたのかゼツメライザーが体と同化しゼツメライザーを破壊しても無力化できないヤツも存在する。改に進化した奴等が良い例だ。改に進化する途中の奴等は力は変わらないがゼツメライザーがただの飾りになっている。面倒だ。

今回もそれがちらほらと見られた、もう時間もないか。アークの作戦が完了する前に何とかして彼女達に渡さなくては。手遅れになってしまう前に。

私は焦りの気持ちが湧きながらも一体一体確実に潰していった。

『や、やっぱりだめだったんだ！相手は英雄だ！俺達ただのマギアが相手にしていいはずがなかったんだ！嫌だ！死にたくない！消されたくない！失いたくｎ！』

私は目の前のまぎあのマギアの首をひねり落とす。

命乞いか…そんなことをするなら初めから参加しなければよかったものを。

もう一人の私の記憶には仮面ライダーとは弱きを守り、聞こえない救いの声に手をさしのべ戦うＬＯＶＥ＆ピースの戦士達。

ならば私は仮面ライダーなどではない。自らが始めたこの戦争、それをいつの日か目覚めた偽りの正義をもって振りかざす。与えられた命（記憶）、命令されるがまま人の命を奪いヒューマギアの英雄に。私はどこまで行こうとも絶対悪だ。

そして遂にベローサマギアの前に来た。
『ヒィ!だ、誰か!誰かいないのか!?』
ベローサマギアが叫ぶが周りにあるのはマギアだった残骸だけ。
『待ってくれ!そうだ、和解だ!和解しよう!私が悪かった、だから許してくれ!』
呆れたな、どうしようもない。救いようがない。こう言うヤツがいるから争いは終わらない。
私は無言でアタッシュカリバーを持ち出す。
『だったら私が君の部下に…イヤ奴隷にでもなろう!だから命だけは!』
「……ダメだ」
プログライズホルダーから新たに水色のゼツメライズキー、アルシノゼツメライズキーを取り出す。
【アルシノ】
【Ｃｈａｒｇｅ　ｒｉｓｅ!】
【Ｆｕｌｌｃｈａｒｇｅ!】
折り畳みチャージしたアタッシュカリバーにアルシノゼツメライズキーをセットする。

【Ｚｅｔｕｍｅｒｉｓｅｋｅｙ　ｃｏｎｆｉｒｍｅｄ．Ｒｅａｄｙ　ｔｏ　ｕｔｉｌｉｚｅ．】
【Ｚｅｔｕｍｅｔｓｕ　Ａｂｉｌｉｔｙ】
【Ｆｕｌｌｃｈａｒｇｅ！】
ベローサマギアが必死に逃げていく。これが敗者の末路か。
アタッシュカリバーの刀身を青いエネルギーが纏い先端にＶ字の角が現れる。
静かに狙いを定め腰を落とし、左手を突き出しアタッシュカリバーを矢のように引く。そして最後にトリガーを押して貯めたエネルギーを解放した。
【ゼツメツカバンアタック！】
解き放たれたＶ字の角が真っ直ぐベローサマギアを捕らえ貫いた。
ゼツメツカバンアタック！

貫いた角は止まることなく瓦礫を吹き飛ばし地面に大きな溝を産み出した。その直後だった。アタッシュカリバーから自動でアルシノゼツメライズキーが放出され空中でバラバラに砕け散った。
当たり前か。修理する暇もなくヒビが入った状態で使用したのだ。耐えきれなかった。

そしてそれと同時だった。少しばかし遠くの空、方向はリディアンがあった場所。そこから何台ものヘリが此方に向けて飛んできていた。
装者達か…都合がいい。ここで待つことにするか。
私はその場で変身を解除しその場で来るまで待機することにした。

～～～

ネットは当たり前のように答えた。
「嘘をつくな！ヒューマギア同士で争うなど、あり得るわけがないだろ！」
「フッ、ずいぶんと信用がないな。当たり前か、この戦争を引き起こした張本人の一人だからな」
「それがわかっていながら！」
ネットが言った言葉にクリスが激情するが皆が何とか取り押さえその場を抑える。
「そもそも私は君達と争うつもりはない。だからこれをとってくれないか？」
それを聞いた一部を除く者達がギョっとした後、全員が怒りを露にする。
「おお、怖い怖い。しかしこれは本当だ手土産もある。人間が相性さえ合えば仮面ライダーすら倒すことのできる切り札だ」
しかしその怒りはネットのただ一言静まった。
「どう言う…事だ」
弦十郎がネットに睨み付けながら聞いた。
「そのままの意味だ。それに拘束されたままでは見せることもできない」
弦十郎は悩み始めるが周りの皆が止めようとする。
「司令！まさかヤツの口車に乗せられるつもりですか!?」
「そうだ！アイツは人類全ての敵なんだぞ！」

そこに更にネットが口を開いた。
「これでも足りないならこちらが持ちうる全ての情報を渡そう。これでどうだ?」
目をつむりながら考え込んでいた弦十郎が遂に重たい口を開いた。
「…わかった、拘束を外そう」
「ッ!お前ええええ!」
激情したクリスが遂に弦十郎に掴みかかったが直ぐ様あちら側の世界の響が引き剥がした。クリスが掴みかかる訳はわからなくもない。なぜなら目の前にいるネットこそが人類全ての共通の敵なのだから。
「クリスちゃん!やめて!」
「離せ!おい!何でだよ!何でソイツを!今ここで殺せばいいだろ!」
顔を伏せながら弦十郎は答えた。
「…すまない、もしこの事が本当なら今までただ殺されるだけだった人類の大きな反撃になる」
その答えは一人の人間としてではなく司令としての答えだった。
「クソッ!」
クリスは響の拘束を降りはなし一人その場を出ていった。
「クリスちゃん…」

響はその後を心配そうに見ていた。
その内に職員と兵士とでネットの拘束が解除されていた。
「すまないな、あんな脅迫じみた行為をして。こうでもしなければならなかった」
ネットは体を動かしながら弦十郎に礼を言った。
「さて、お待ちかねの品だ」
そう言うとネットは袖から計八台の装置を取り出した。
「これは一体…」
弦十郎達が目を丸めて見ている中、ネットは説明を始めた。
「これの名は”レイドライザー”人でもプログライズキー更にはゼツメライズキーを使えるようにしたものだ。これを使えば仮面ライダーと同等の力を手にすることができるが…」
ネットが何かを言いかけたときに扉が開き一人の白衣を纏った男が現れた。
「代償がある、ですね？」
突如現れた男がネットの言おうとしていたことを代弁した。
「ああ、そうだ。Ｄｒ．ウェル」
その名を聞いたとたんにあちら側の世界の装者達が反応した。
「？何故ですか？」

Ｄｒ．ウェルが困惑する中、弦十郎が話しかける。
「もう大丈夫なのか、ウェル博士」
Ｄｒ．ウェルは弦十郎の心配しながらの問いに優しく微笑み返し答える。
「ええ、もう大丈夫ですよ。ヒューマギアに対抗するためのカ・ディンギルの修復は完了です。それと…」
Ｄｒ．ウェルは弦十郎からネットに視線を向けて挨拶をする。
「どうもネットさん。改めましてそちらは私の名前を知っているようですが、ジョン・ウェイン・ウェルキンゲトリクス縮めてウェルです。皆からはＤｒ．ウェルまたはウェル博士と呼ばれています。どうぞ宜しくお願いします」
Ｄｒ．ウェルは礼儀正しく頭を下げた。その光景にあちら側の世界の装者達全員が困惑していた。
「ど、どうなってるデスか!?」
「き、綺麗なウェル博士だ…」
そんなことは露知らずかどんどん話は進んでいく。
「その代償とはなんだ」
「このレイドライザーは急遽作られた代物だ。だから使用回数に制限がある。それを越えるとレイドライザーはオーバーヒート、爆発をおこす」

「使用回数はどれくらいですか?」
　ネットの話を聞いていたＤｒ．ウェルが問いかける。
「個体によって変わるがおそらく三回だ」
「三回…少なすぎる」
　Ｄｒ．ウェルが考えながら呟いた。そう、Ｄｒ．ウェルが言うとおり少なすぎるのだ。三回。しかも決まっているわけではない。もしかしたら三回より少ないかもしれない。逆に多いかもしれない。余りにもあやふやすぎたのだ。
「それはそうとそのプログライズキー?とゼツメライズキー?と言うヤツは一体なんだ?」
「プログライズキーそしてゼツメライズキーとは俺達ヒューマギアが使っている力の大本だ」
　その答えに一同は唖然とした。レイドライザーを使うならば相手から奪い取るしかないのだから。
「当たり前の話だが取りに行かせるわけがない」
　そう言うとネットは袖から三つのプログライズキーを取り出した。
　一つは炎のように赤いプログライズキー、バーニングファルコンプログライズキー。
　もう一つは深海のように深い青色をしたプログライズキー、フローシディシァークプ

ログライズキー。
もう一つは太陽のように煌めく黄色のプログライズキー、ソルライオンプログライズキーの三つだった。
「これらはプログライズキーの中でも最新型。強力な分、おそらくレイドライザーの損傷も激しい。あるのはこの三つだけだ。誰に渡すかそちらに委ねる」
「ああ、わかった」
「それでは次に情報交換と…」
ネットが次の話に持ち出そうとしたそのとき、あちら側の奏が止めた。
「すまない旦那にみんな。だけどあたしはどうしても信じることができないんだ。だから一度でいい、あたしと戦え!」
それを聞いた皆が止めようとする。当たり前だ。相手は最恐、勝てる未来なぞあるはずがないのだから。
しかしそれを一番よく理解しているのは本人だろう。奏の突きつけた腕は震えていた。
「ダメですよ!ここでの戦いなんて…もし怪我でもしたら!」
「ウェル博士、やらせてやってくれ」
Ｄｒ．ウェルは必死に奏を止めようとするがそれでも奏は止まらない。それは彼女

成りのけじめの付け方だろう。
「ウェル博士…ありがとう、でもあたしは戦わなくちゃならない。頼む」
奏はＤｒ．ウェルに頭を下げた。そしてＤｒ．ウェルは遂に折れた。
「はぁ、わかりました。ですがもう二度とこんな危険な真似はしないでください」
「ありがとう…！さぁ、やろうか！」
「…ああ」
今ここに片翼とネットとの戦いが始まる。

閑話　もしも主人公がただの人間だったら

もしも主人公が人間で普通の装者達と普通の世界で、しかし仮面ライダーゼロワンが存在したらのＩＦ世界

遥か昔の神話の遺物を纏う装者、隣に立つは正反対の最新技術を身に纏う社長な戦士仮面ライダー。

両者は滅亡迅雷．ｎｅｔと呼ばれる存在によって地に伏せていた。

「弱い…この程度か、世界を救った人間達は」

「やっぱりアークの言うとおり大したこと無いね、滅」

地に伏せた英雄達の眼前に立つは滅亡迅雷．ｎｅｔの幹部――滅と迅。相手はたったの二人。しかし相手はヒューマギア、ラーニングによって無限に強くなってしまう。装者のアマルガムもエクスドライブも仮面ライダーゼロワンのシャイニングアサルトホッパーも何もかもアークによって記録されラーニングされ手も足もでなくなってしまっていた。

「ク、クソ…」

「強い……！」
「…デス」
「ラーニングによって無限に強くなる…」
「アマルガムも」
「エクスドライブも対策されてしまっているわ…」
　装者達はその強さに絶望し
「どうして…人間とヒューマギアは一緒に笑い合える筈なのに…」
　ゼロワンは自らの夢の終焉を知った。
「ねぇねぇ、もう終わりにしようよ」
　迅は滅に目の前の者達の命の終わりを告げた。そして滅はその名に恥じないことを言った。
「ああ、これは人類絶滅の大きな一歩だ」
　滅はアタッシュアローに指をかけ引き始める。迅はそこから放たれる一撃を今か今かと待ちわびる。
　装者と仮面ライダーにとってそれは死刑への階段に感じられていた。そして滅の一撃が放たれた。それは曲がることなく落ちることもなく撃槍の巫女へと当たろうとした。

他の装者や仮面ライダーが叫ぶ中撃槍の巫女――立花響はゆっくりと感じられていた。自らの頭の中では親友である小日向未来、装者と仮面ライダーとの思い出そして御影悠斗との思い出がよぎっていた。

（ああ、楽しかったなぁ、みんなとの時間。一秒一秒が大切な思い出になったな…ごめんなさい、みんな。奏さん。そしてこの気持ちぐらいは伝えたかったなぁ…大好きだったよ悠斗君…）

響は目をつむりせめて痛い思いがないようにと待っていたが何時までたってもその時は来ない。耳から聞こえる音は不気味なほど静かで恐ろしくなるほど。

響は瞼を震わせながらゆっくりと開いた。そして目の前にはよく見慣れた背中が立っていた。そして響はその背中の持ち主の名を恐怖と不安の混じった声で呼んだ。

「悠斗、君？」

呼ばれた背中は安心させるようにゆっくりと振り返った。そしてその姿は何故か歌姫　天羽奏と重なってしまった。

「もう、怖がる必要はないさ。響」

悠斗と呼ばれた男は安心させるようにゆっくりとそして優しい言葉を口に出す。

しかしその姿はすぐにでも崩れてしまいそうなほど可憐なものだった。

『どうして君がそこにいる!?早くｎ』

「弦十郎さん!!」
　装者達の指令でもある男――風鳴弦十郎は悠斗がその場にいることに驚きそして逃げるように言おうとするがその言葉を言う前に悠斗が止めた。
「俺は、俺はもう目の前で誰かが…大事な人が!その仲間が!憧れが傷つくのをもう見なくない!もう誰かに守られるのもうんざりだ!」
　その一言一言には悠斗の魂がこもっていた。
「それに大事な人が、響が命を賭けてるんだ!それをもう黙って見てられるか!」
　震えるほどに握り締めるその右手にはアタッシュアローの矢が握られていた。そして悠斗は遂に矢を握り壊した。
「装者とか…仮面ライダーとか、そんなの俺には関係無い!俺はただ守りたいから守るんだ!だからっ!!」
　悠斗は怒りではなく恐怖で震える左腕を振り上げた。
「ッ!?」
「何で人間のお前がそれを!!」
　滅と迅が振り上げられた左腕に握られていた代物を見て驚いた。振り上げた左手には滅亡迅雷．ｎｅｔの為のフォースライザーが握られていた。
　悠斗はそれを一度見た後覚悟を決めたように前を向き腰に押し当てた。

フォースライザーは左右から伸びるベルト、そしてその裏側にある針を突き立て固定した。

「がぁぁぁ

滅と迅の方向、その後ろから赤い光りの線が差し込み悠斗の目の前で巨大な機巧のアリゲーターを作り出した。アリゲーターは意思を持つように。主人を護るように滅と迅に向かい暴れまわる。辺りの瓦礫を吹き飛ばし、獣のようにしかしその瓦礫が滅と迅に当たらないように理性的に暴れまわる。親友である響にはそれが悠斗の中にある優しい獣性に感じられた。

「駄目ぇぇぇぇぇぇ!」

響は喉を震わせ止めようとした。それでも男は、悠斗は止まりはしなかった。愛するものの声ですら止まらなかった。否、なおさら止まることは出来なかった。しかし最後に悠斗は響に振り向いた。その顔には決別の涙と苦痛の中から必死に作った別れの笑顔があった。

そして悠斗は顔を上げ覚悟(決別)の言葉を口にする。

「変身!!」

悠斗は荒々しく引き金を引く。プログライズキーはフォースライザーの手によって無理やり開かれる。

【Ｆｏｒｃｅ・ｒｉｓｅ】

するとアリゲーターは暴れるのを止め迷うことなく主人の意思に従う。アリゲーターは悠斗に向かいその顎(アギト)を開き食らい付く。悠斗の姿は緑色のスーツに包まれる。

食らい付いたアリゲーターはバラバラに砕け散るがその体を装甲に変える。その姿は砕けようとも主人を護ろうとする家臣のようだった。アリゲーターの体の一部はデータとなり全く別の形に。残りは形を変えた装甲に。

それぞれが最後に黒いベルトによって無理やり固定され悠斗の姿を新たな、存在するはずのない戦士に変えた。

【RollingAssault・Alligator】

【It involves everything and destroys】

【BREAK・DOWN】

その姿は鰐の王のように。しかし戦士のように。その場に立っていた。

悠斗――仮面ライダーネットは先程まで血だらけで限界だったはずだがその姿を感じさせないほどの力強さで走り出した。その目からは仮面の下であるのにも関わらずしっかりとした力を感じさせた。

「なんなんだよ！お前は！アークしか知り得ないグリップも持って！滅亡迅雷．ｎｅｔしか使えないフォースライザーも使って！」

迅は叫びながらアタッシュショットガンを乱射する。その言葉には確かな恐怖があった。

「クッ…！」

それは滅もだった。冷静に矢を放ちながら頭では必死に思考を重ねる。あり得ない存在。存在するはずのない新たな滅亡迅雷・ｎｅｔの一人。その存在はアークの滅亡迅雷の計画に大きなそれこそ修正不可能なほどの亀裂を入れた。

そして放った弾丸も矢もネットを止めることは叶わなかった。まるでそよ風のように少しも立ち止まるとこなくネットは進み続ける。

その姿は正しく生態系の頂点である鰐のよう。ネットの前では滅も迅もただの獲物でしかなかった。ネットは突き進み遂に滅と迅の元にたどり着いた。

ネットはそのままの勢いで迅の頭を掴み取り何度も何度も振り上げ地面に叩き潰す。回数にして六回その間滅は何度もアタッシュアローの刃で切りつけていたがネットは動じることもなく叩き付けていた。

その姿は狂戦士（バーサーカー）。何者にも止められず目的だけを実行する機械のようにも見てとれた。

そしてネットは六度目の叩き付けを止めると今度は地面に押し付けながら進み前方に投げつけた。迅は止まることなくボールのように飛び続け何度か瓦礫に当たりながら三枚目の瓦礫を突き抜けようやく止まった。

次にネットは滅を見ると動き出し簡単に懐に転がり込んだ。滅も抵抗していたがそのかい虚しく突破されてしまった。ネットは下からアッパーのように腕を振り上げる

がその手は拳ではなく牙のように開いていた。
その一撃は真っ直ぐ進み滅を上空に火花を散らしながらのけぞるように打ち上げる。ネットは手を振り上げた状態で止め滅が自身の眼前に来ると右足の回し蹴りを腹に打ち込む。滅はそのまま迅のいる場所に吹き飛び衝突した。
そのネットの一撃、それは鰐の鋭く太い尾のような一撃だった。
しかしネットは突如腹を抑え膝をつきそうになる。それもそのはずだ。ネットの悠斗の体はすでにボロボロ。今こうして立っていることすら奇跡なほどの激痛が体を蝕んでいるのだから。
そしてその隙を滅亡迅雷．ｎｅｔの滅は見逃さなかった。
滅はかなり無理矢理な体制からスティングスコーピオンキーを自身のフォースライザーから抜き取りアタッシュアローに差し込んだ。
滅はその無理矢理な体制のまま弦を引きアタッシュアローから一本の大きな毒針のような矢を放った。
ネットはそれを拳で受け止める。滅の放った渾身の矢は簡単に受け止められた……ように見えた。
矢は突如分かたれネットの拳を避けその体に容赦なく突き刺さった。しかしそれでもネットを止めることは叶わなかった。ネットは突き刺さった矢をそのままに突撃す

る。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

もはや人の物ですら無い魂の雄叫び。滅を切り裂き、迅を散らす。

その姿を見た響は薄々と感じ始めていた。

（彼が悠斗が死んでしまう）

しかし彼を止めるすべを持ちはしなかった。何より止めてはいけないのだと。そう感じていた。

「滅！」

「ああ、ここで止める。でなければアークの計画を実行することが不可能になってしまう」

二人は壊れかけた体を無理矢理動かし腰のフォースライザーのトリガーに指をかける。

それを見たネットも同じく指をかける。

一時期のにらみ合い。その姿はまるでガンマンのよう。

そして三人は動き出した。

【Ｓｔｉｎｇ　ｕｔｏｐｉａ】

【Ｆｌｙｉｎｇ　ｕｔｏｐｉａ】
【Ｒｏｌｌｉｎｇ　ｓｔｏｒｍ　ｕｔｏｐｉａ】

三人はにらみ合いながら走り出し助走をつける。
滅の右足には蠍の尾が巻き付き毒を撒き散らす。
迅は背中から鋼鉄の翼を早し桃色の羽根が舞い落ちる。
ネットは両足に緑色のエネルギーと稲妻を走らせる。
そして三人は翔び上がった。迅はその翼を使い更に飛び上がり回転を加えながら。滅は撒き散らしていた毒を一点に集めながら。ネットは両足を上下に口のように開きその上下にエネルギーの鰐の上顎と下顎を作り出す。
そして三者の必殺技はぶつかり合った。三人は激しく辺りに雷と衝撃波を飛ばしながらぶつかり合う。ネットは滅の毒針と迅のスピードを持った必殺技に食らい付き噛み砕こうとしていた。
「あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”ッ!!!」
「ハァァァァァァァァ!」
あ互いの技と業を乗せた一撃。本人達には永遠と思えるほどの時間。しかし遂に決

着は付いた。
『塵芥滅殲』
『塵芥隼迅』
あと少し、本当にあと少し。もしも悠斗が万全だったら。ほんの一瞬だった。しかしその一瞬が勝敗を分けてしまった。
食物連鎖の絶対王者の牙と顎は蠍と鷲に砕かれた。
滅と迅の一撃は真っ直ぐネット――悠斗の胸を捕らえた。そして悠斗にはもはや抵抗する力は何も残されていたなかった。
悠斗は変身を解除され地に落ちた。全身から溢れ出る鮮血、砕かれたフォースライザー。誰の目から見ても戦うことは出来なかった。それでもなお彼は這いつくばってでも向かっていった。
「がぁ…ま”、でぇ…まだ、！まだ！お”れ”はあぁ…！た、た、かえ、る……!!」
口から取り返しのつかないほどの血を吐きながら地面に血の線を描きながら。
「…迅、行くぞ」
「…うん」
その姿は滅亡迅雷．ｎｅｔどころか彼を見ていたアークにすら忘れることない姿を見せ付けた。

「もう、やめようよ…」

誰かが言った。誰かが彼のそばに寄り添った。泣きながら彼を抱き締めた。

「あ”あ”…なか、ないでくれ、、だ、大丈…夫、だか”ら…俺は、俺ば……」

戦える。そう言おうとした。そんな彼の顔に大粒の液体が降り注いだ。悠斗の目は見えていたかった。しかし今まで聞こえてきた声。そして血とは違う感覚。そうしてようやくそれが”涙”であると理解することができた。

「ひ、び、き…?」

「そうだよ、私はもう大丈夫だから…だからもういいよ…」

彼の最も大切な人が涙を流しながら訴えかける。そしてようやくここまで来て彼は自身が取り返しのつかないことをしたことを理解することができた。

「ごめん、、なぁ…」

彼の口から次に出た言葉は謝罪の言葉だった。

「でも、俺は…生まれた時からこうなることを…知っていたんだ…だから、さ、、身勝手だけど…俺の愛した君が、君達がいる…この世界を任せて、良いかな、、?」

そして次に出たのは彼の本心だった。響と同じく大粒の涙を流しながら心の底からの願いだった。

「うん!うん!だから!だから!もう…私を…置いていかないでよ…!悠斗ぉ…」

響が言い終わる頃には悠斗は冷たくなっていた。しかしその顔はどこか救われているように安らかに見えた。

「うん！うん！だから！もう…私を…置いていかないでよ…！」

あぁ、安心した…。思えばここまで来るのにずいぶん時間がかかったなぁ。今から何十年も前。正確には俺の前世。周りより少し正義感が強いだけのヲタク。それが俺だった。アサルトグリップを買ってウキウキ気分で進んでいたら目の前の横断歩道で子供が引かれそうになっているのを助けたときだった。

子供の代わりに俺が引かれて神様に転生の機会を頂いた。そして転生特典を受け取るときに神様はこう言った。

『その力は人の身では確実に命を削ります。その力は人の身には過ぎた力…だから、だからどうかその力を使う時は自身の命を賭けても救いたいと思う時に使ってください…そしてどうか貴方の第二の人生においてそんな事がありませんように』

神様は何処までも優しかった。そして俺は今、神様との約束を破って使ってこのザマだ。

元から分かっていた。分かって使ったんだ。だから誰にも。それこそ神様にだって文句は言わせないつもりだったんだけど……やっぱり響には勝てなかったか…。

お前とはもう何年の付き合いだろうな?俺の一番古い記憶だと確か幼稚園の頃からだっけか?それに言えもご近所でよく遅くまで。それこそ親に起こられるまで遊んだっけ…

『こんな遅くまで!』

そう言われて仲良く怒られたよな。何時からか未来も一緒になって。小学校一緒だったよな。未来と俺と響と。三人仲良く手を繋いでさ。下校したよな。

中学もだ。みんな思春期になって手を繋がなくなったけど代わりに趣味を広げたよな。おかげさまで俺も響もツヴァイウィングのファンにもなって…その頃だっけかな?響のことを異性として好きなったのは。

高校は別になったけどそれでも週末には一緒に集まったりして。

ホントに楽しかった。毎日が楽しくて仕方なかった。だから命を賭けてでも救いたいと思った。

俺のプログライズキーには装者を強化する力と俺の憧れ――仮面ライダーの新たな力がある。

俺の人生最後の役目は滅亡迅雷．ｎｅｔと戦ってキーにラーニングさせ完成させる

こと。そして今遂に完成した。

俺のせいでこんな世界になってしまった。だからけじめはつける。だけどもう手足の感覚も心臓の鼓動も無くなってきた。だから身勝手だけどみんなに任せた。

本当はもっといきたかった。響にこの気持ちをちゃんと生きて伝えたかった。だから、だからどうか神様。みんなに輝ける勝利の光を。

閑話　もしも主人公がただの人間だったら　ｅｎｄ．

はじめての合同任務（偽

目が覚めたらベルトを装着して右手にはプログライズキーを持って奏さんと戦うことになってました。

い、今起こったことを（以下略

それに知らない知識がいっぱい、おまけにここ最近の記憶が一切ない。これが異世界転生？たわけ！それからもうしてるわ！あれか。最近流行りの「パーティーから追放された先でとんでも知識を手にいれて世界最強!?」ってやつか。なるほどなるほどかつてのパーティーメンバーが奏さんか…それだったら俺何やらかしてんだよ。

「変身しないのか、だったらあたしからいかせてもらうぜ！」

ゑ？

「Croitzoi（人と死し） ronzell（て も、戦） gungnir（士と） zizzl（生き る）」

めっちゃきれいな歌声ともに聖詠を唄い俺の目の前でガングニールギア（槍）を纏った。

くそぉ…こうなったら腹くくるしか…

俺はアサルトグリップの赤いボタンを押し込みベルトにセットした。

【アサルトローリング】

すると警報のような変身待機音が辺りに響き渡り切り詰めた雰囲気に変えていく。更に地面を貫いてきた赤い光の柱から機巧のアリゲーターが現れ奏さんの前に立ちはだかる。

うん。君何処から現れたの？毎回疑問におもうだけど。取りあえず…

「変身」

【Ｆｏｒｃｅ・ｒｉｓｅ】

プログライズキーがフォースライザーによって無理やりオーバーロードに達し強制的に開かれる。

するとアリゲーターがこちらを振り向き俺に食らい付く。俺の体は変化しアリゲーターはバラバラに砕け二種類の方法によって新たな装甲に変化する。そして宙を浮く装甲に黒いベルトが通され無理やり装着された。

【ＲｏｌｌｉｎｇＡｓｓａｕｌｔ・Ａｌｌｉｇａｔｏｒ】

【Ｉｔ（それは） ｉｎｖｏｌｖｅｓ（すべてを） ｅｖｅｒｙｔｈｉｎｇ（巻き込み） ａｎｄ（破壊する） ｄｅｓｔｒｏｙｓ】

【Ｂｒｅａｋ・ｄｏｗｎ】

最後のＢｒｅａｋ・ｄｏｗｎがフォースライザーから発せられ変身が完了する。相変わらずアリゲーター君がこっちを振り替えるとき結構怖い。

ひっさびさの変身だったから何度か手を開いたり閉じたりして大丈夫かどうかを確認していると奏さんが両腕のアームドギアを重ね合わせ一本の槍を作り出した。

物理法則ガン無視だな…

「行くぞー」

その一言ともに奏さんが勢いよく飛び出し槍を前につきだし突撃してくる。

俺は右手のアリゲーターガントレットで槍を受け流しアタッシュカリバーを持ち展開、構える。

やべぇよ…めっちゃ怖い。

「アイツ…」

ごめんなさい、睨まないで。チビっちゃうから。

奏さんは立ち上がるのと同時に槍を横に振るいかなり広い範囲を攻撃する。俺はそれを後方に跳ぶことで避けるが背中が壁にぶつかってしまった。

せっま!ここせっま!これ避けるよりも受けることを第一にした方が良さそうだな…

俺は腕や足など比較的装甲が厚い部分で受け流すか止めるかで捌いてく。

しかしあの槍進化は戻す際に矢じりのようになっている部分が返しの役割を持ち引き寄せられる点だ。ノイズ相手ならば使うことはないだろうが対人・対聖遺物戦では別

だ。避けても引き寄せられる。かといって受けると大小なれどダメージはある。おまけに刺されば抜けないし抜こうとすると傷口は歪に出血だってする。

なんか考えれば考えるほど凶悪…流石は軍神と死神の側面を持つ神様の振るった槍だ～イヤちょっと待て？これ作ったのは櫻井了子もといフィーネだよな？ちょっと殺意高くない？そんなに恋路を雑音ごときに邪魔されなくなかったの？うわぁ～…恋したことあるけどそこまでなったことは無いわ。ヤンデレかよ。

しっかしそれを分かってるのか奏さんは突きと引きを繰り返してる。おまけに俺の装甲はツギハギ。相性最悪かよ。取りあえずアタッシュカリバーを展開できれば少しは変わるが…そんな隙は無さそうだな。

どうするか。今は何とか受け流しているが攻めに転じることはできない。んんん……ハッ！思い付いた！よく考えればあったわ。自分自身でいったわ。よし。実行しよう。

ネット視点⇒三人称視点

今まで動きのなかった二人の戦闘、しかし遂に動き出した。

奏の振るっていた槍の返しがネットの装甲に食い付き引っ張ったのだ。ネットはまるで釣られた魚のように引き寄せられ奏の眼前に動かされた。

（ヨシッ！ネット！こいつを食らいやがッ!?）

しかし釣られたのは奏の方だった。奏が左手に拳を作りネットのがら空きの腹部に突き立てようとしたその瞬間だった。ネットは首の後ろに食い込んでいたアームドギアの返しを付けたままジャンプしたのだ。

普通なら首のアームドギアがより深く食い込み最悪の場合は脊椎に食い込み首から下が動かなくなってもおかしくないその行い。しかし相手は仮面ライダーましてや人ではなく機械人間ヒューマギア。仮面ライダーネットの装甲は驚くことに核でようやく傷をつけることが出来るほど強固な装甲。かつて人類はたった一機のヒューマギアに対して核を使った。そう、そのヒューマギアこそが今奏の目の前で奏のアームドギアを構え、突き立てようとしているネットなのだ。

（殺られる！）

奏はそう思い目を閉じた。しかしいくら待てども貫かれる痛みは来ない。奏は恐る恐る目を開ける。そこには一センチと無いほどギリギリに突き立てられたアームドギアがあった。ネットは既にアームドギアから手を離し変身を解除していた。

アームドギアの先を見ると先端は完全に埋まり相当の力で突かれたことが分かり奏は頭の中で苦笑いを浮かべる。
「…どうして当てなかったんだ？喧嘩を売ったのはあたしのはずだ」
奏はなぜ自分自身に一度も攻撃を当ててこなかったのかを疑問に思った。ネットは奏に一方的に攻撃されるだけで一度も攻撃を返してこなかった。
「何故、か。奏、お前は俺を殺す権利はある。だが俺にはお前を攻撃する理由は一つもない。だからだ」
当たり前のように。息をするように一切の迷いなくネットは答えた。その言葉からは嘘偽りは一切感じられなかった。
（こいつは、ネットは…）
奏が何かを言おうとしたその時
『二人とも、聞こえるか！』
設置されているスピーカーから弦十郎の焦った声が聞こえてきた。そして二人にとんでもない知らせを伝えた。
『今ココに仮面ライダー達が接近している！もう時間がない！今すぐ迎撃に出てくれ！』
それを聞いた奏はネットを見た。ネットも同じく奏を見てお互いにうなずいた。

「行くぞ！」
「…ああ」

～～～

二人はそれぞれ反応した。滅はいつものように。迅は楽しそうに。

三人称視点⇒ネット視点

はい。奏さんとの先頭が終了したと同時に次は仮面ライダーからの襲撃…ブラック会社かよ。しかも奏さんも生き生きしながらこっちを向いてきたし。思わず下向いちゃったよ。すぐに前を向いたけど。だってさ、もうあんなん訓練された社畜みたいでさ。装者ってヤバイ。

思わずそう思ったね。今は奏さんと一緒に出て皆と一緒に迎撃のためにそれぞれが位置についてギアとか構えていつでも来ていいように待っている。

もちのろん、俺も既に腰にはベルトを装着済み。右手にはすぐに押せるようにグリップを握っている。

プログライズホルダーには今回使おうと思っているフリージングベアを入れてる。準備万端、いつでもこい！

「ヨオ…ネット」

ちょっとフラグ回収早くない？ＲＴＡ？

「お前に会えるのを楽しみにしてたぞ、そしてこの手で潰すのもなァ！エェ!?ネットオ！」

雷キレすぎだろ…そのうち回線焼き切れそう。

「もう、早いよにいちゃん…」

空からは迅ですか…と言うことは

「雷、少しは押さえろ」

やっぱり滅もいるんですね。て言うか滅亡迅雷．ｎｅｔ勢揃いじゃないですか。けどトリロバイトマギアは連れてないのね。安心したわ、いたら乱戦になって辛いからネ。

という訳で装者含めて一斉…

「変身」

まぁ俺だけだけどね、悲しみ。今回は初めからアタッシュカリバーも持っている。

しかし滅と迅の戦い方は分かっているけど雷の戦い方があまりわかってない。本編で登場したのも一回限り。その時にはディストピアもユートピアも使っていたから大体どんな必殺技なのかは理解しているけど……もしかしたら見たことの無い一撃が来る可能性もある。気を付けなくては。

「全員離れろ」
　俺はそう言って離れることを願う。
「アア!?ふざけんな!?アタシの目の前には仮面ライダーがいるんだぞ!」
　やっぱり話し聞いてくれないのね…
「へぇ～…案外気が合うじゃねェか。此方もさっきから滅が一緒にネットを殺るとかぬかしてるが…知るかァ!」
　あぁ!もうダメだ!あっちも動き出した!もう収集つかねぇぞ!とにかく装者達を巻き込まないように動くしかねぇ!
　雷は2枚の双剣を構え此方に飛ぶように迫り縦に振り下ろす。俺はアタッシュカリバーの腹を使い防ぐが俺の腕が震えるくらいにアイツは力を込めている。
　アイエェ～!?パワー!?パワーツヨイナンデ!?
　明らかにパワーがはねあがってる!初めて対峙したあのときよりも!通常の三倍とかよりも上だぞ!ダメだ!このままだと押し負ける…!チッ…コナクソォオ!
　俺は何とか左足を突き出し雷の腹に蹴りを入れ無理やり引き剥がす。
「…ハハ、オイオイこの程度かよ…エェ!」
　全く効いてない、全力で蹴飛ばしたはずなのに嘘だろ…
　化け物かよ…!

「もっとだ…もっと俺を楽しませロォ！」

雷は双剣に赤い雷を纏わせ振るうことで斬撃を放つ。俺は考える暇もないほど上に跳び上がり避ける…それが悪手になることを知らずに。

赤い斬撃は止まることなく進み俺の後ろにあったリディアンの壁を大きく切り裂いた。おまけに雷だったため壁の上にあったカ・ディンギルも黒煙を上げ破壊された。しかもカ・ディンギルはリディアンのエネルギー源はアビスに保管されているデュランダル。つまり地下から地上までケーブルなどを使って接続している。リディアンは度重なる襲撃でおそらく様々なところから無理やり繋いでいる。

雷の一撃は壁どころかリディアンその物を破壊し尽くした。リディアンのあちこちから黒煙と炎を上げ阿鼻叫喚だった。

「ハハハハハ！ネットォ！やっちまったな！お前のせいだぞ！お前が俺の攻撃を避けるからな！アハハハハハ！」

「キサマァァァァァ！」

翼が狂ったように叫び目を見開きながら巨大化させたアームドギアを迫りながら振るった。

【蒼ノ一閃】

その一撃を雷は双剣で受け止める。多少後ろに進んだがその程度に終わり蒼ノ一閃

は砕かれた。続く翼の攻撃も片手で受け止められる。
「アアアア

フリージングベアキーの一撃が当たり雷の手首から先を凍らせ赤雷を打ち消した。凍らせたお陰で雷の手からは力を失い翼を離した。

何故打ち消せたのか？氷は水に比べ電気をかなり通しにくい。水の中に含まれる電気を通しやすい不純物が氷になった際に意味を成さないからだ。ホントに持っててよかった。もしあのまま翼に放たれたら。考えるだけでもゾッとする。仮面ライダーですら装甲の下からでもボロボロになるんだ。そんなものを直接触れたら。良くて致命傷、普通は即死だ。だからこそ

「ネットォ…！」

雷が此方を向き睨む。

雷、それは俺の方がやりたいぞ。お前はよりにもよって女性の顔を狙ったんだ。しかもおそらく元アイドル。許されることではない。何よりファンの一人として

「来い、噛み砕いてやる」

そしてここでヒューマギアとしての決別にする。

俺達はフォースライザーを二度開閉した。お互いに跳び上がり雷は片足を。俺は両足を突き出しそれぞれの力を込める。

雷の右足には赤雷が集まり鳥類種の四本足を形成する。見え方によっては落ちる雷にも見えなくはない。

俺の両足には深緑の雷を発しながら右側には上顎を、左側には下顎を作り出す。顎は大きく開かれている。

『塵芥雷剛』

『塵芥回壊』

お互いの一撃は衝突し合う。ぶつかり合いジリジリと消耗し合う。しかし俺は負けない。負けちゃダメなんだ、もし負ければ後はない。ここで打ち負ければ人類が確実に負ける。こっちの世界の響と未来さんと最強夫婦も翼さんと翼も、奏さんもクリスとクリスちゃんもマリアさんもザババコンビも！リディアンにいるみんなも！

「オオオオオオオオオオオオオオ！」

徐々にホントに少しずつこっちが押せてきてる！

「にぃちゃん！」

「…これもアークの意思か」

しかし相手は雷。滅亡迅雷．ｎｅｔの一人。そう簡単には終わらない。押されまいと押し返してくる。

「裏切り者の貴様にィ!!負けれるかァ！」

雷、お前は強かったよ。けどな植え付けられた怒りに、人間の本当の怒りに勝てるかよ！それにこれは翼の分もだぁ!!

俺は両足を顎のように開き雷の塵芥雷剛に食らい付いた。エネルギーの顎も釣られるように食らい付き塵芥雷剛を噛み砕き雷はバランスを崩した。俺は更に足を上下に王蛇のように動かし雷に何度も食らい付く。

そして最後に食らい付いたまま回転し雷を勢いのままに地面に向けて吹き飛ばした。

「アークの意思のままにィィィィ!!!」

雷はその言葉を吐きながら爆散していった。

「…滅、にいちゃん負けちゃったね」

「そうだな。だがいいデータが取れた。退くぞ」

「うん！」

アイツら悲しくないのか？滅ならともかく迅の反応があっさりとしすぎている。まるで壊されても構わないと言わんばかりだ。可笑しい。

追おうとしたが迅が放ったアタッシュショットガンの煙により逃がしてしまった。

『ｓｉ亡ジ０００ｒｙｅ．５５５４４４４４４４４４４＠ａｉｈの■ー■を２ｌｌ３３８８８８８ｌｌＯクゲ０００開始』

孤高の王者は堕ちる

滅亡迅雷．ｎｅｔの内の一人、雷を倒したのは良いが現在皆滅と迅のお陰でボロボロだ。特にリディアンは酷い。今にも爆発しそうになっている。

もうどうしよう無い。何をすれば良いか分からない。元はただの一般人なんだ。仮面ライダーが好きでサラリーマンで、恋人なんか一回もできたことの無い一般人。今何をすれば良いのか、主人公達のように即決できない。

『進め、目指せ、日常の崩壊した象徴のある、あの場所に』

『来い、待っている、日常の始まった象徴のある、あの場所に』

何だ…これ？あの場所？日常？進め？待っている？一体誰何だ！俺の頭の中に直接話しかけてくるヤツは！

『そこに、全ての始まりが生まれる。希望の産声を上げるためにはオマエが必要だ』

一体なんだ？でも何故だろう…行かなくては。そこにいくことで全てが救われるような気がする。

あの場所に…日常の始まったユートピアに…

ネット視点⇒ア００００００Ⅸ視点

上手くいった。雷のお陰で、迅のお陰で、滅のお陰でネットにウイルスを仕込むことが出来た。さらに雷の戦闘データを全ヒューマギアにアップデートすることが出来た。ようやく帰ってくる。還ってくる。アイツに■■■イヤ、ゼア。オマエに盗られた私の子供をようやくカエテシテモラウゾ。

そして視ていろ、私が私達が愚かな獣を根絶するその日を

ア００００００Ⅸ視点⇒三人称視点

この壊れた世界、かつて日本の首都であった東京、その近くに回りから隔離されたように存在する区画がある。その場所の名は

デイ・ブレイク・タウン

大きな柱のような装置がその区画一体を囲い電気の壁を生み出し人間だけの侵入を拒む場所。人々にとって忌々しい日常の崩壊した事を知らしめす場所。

そしてヒューマギア達にとっては望んだ日常を手にした希望の証。

そこには人類は存在しない。ましてや生き物なぞ。そこは命を持たないもの達の楽園。かつて聖書に記されたアダムとイブが過ごしていた楽園（ユートピア）の名を記された都市。

そこに孤高の王者は向かう。光に魅せられた羽虫のように。迷うことなく。真っ直ぐと。王者を止める者達は存在しない。何故なら既に王者は檻に入れられた獲物なのだから。王者は止まらない。奪われるまでは。

三人称視点⇒ネッ４４４４４視ンン

あれからどれだけ走ったのだろう？一日？二日？一週間？分からない。ただ目が離せない。外してはない。そんな脅迫じみた言葉が俺の中で渦巻いている。止まらない。止まれない。ようやく見えてきたのだから。帰るべき場所（行ってはならない）に。距離にしてどれくらいだろう？ようやく見てきたのだ。まだまだかかるだろう。ワクワクが止まらない。笑

みがこぼれてくる。笑い声すら出てきた。涙もだ。嬉しい(おかしい)、嬉しくて(悔)堪らない。

後少し…!後少ｓッ!!誰だ!お前達は!そこをどけ!どけ!どけ!ど

ネット視点⇒三人称視点

デイ・ブレイク・タウンを前にした荒野に役者は揃った。デイ・ブレイク・タウンを背にする或人と諌。

反対には笑みをこぼし涙を流しながら笑い続けるネット。

「行こう、不破さん」

「あぁ、止めるぞ俺達で」

「アハハハハハハ！邪魔をするなアアア

処にもなかった。

【Ｏｖｅｒ・Ｒｉｓｅ】

【Ｏｖｅｒ・Ｒｉｓｅ】

或人はシャイニングアサルトホッパーキーをスキャンしそれと同時にプログライズキーに掛かっていたロックを解除し天に掲げ希望を夢見る。

不破は両腕でアサルトウルフキーを両腕で抉じ開け装填し闘志を燃やす。

ネットは笑いながらアサルトローリングキーをセットし植え付けられた欲望に酔いしれる。

或人の掲げたキーに宇宙（ソラ）から輝く光と青い光が螺旋を描き命中する。そしてキーから大きな光輝く飛蝗が姿を表し吠えるように確かめるように体を動かした。

不破はベルトから乱暴にショットライザーを引き抜きその勢いのまま空に掲げゆっくりと照準を決めていく。

ネットも同じく宇宙（ソラ）から赤い光が差し込み目の前に赤く発光したアリゲーターが現れ牙を向く。

「「変身！」」

それぞれが何回、何十回、何百回と行った行動とセリフを口にした。

【Ｐｒｏｇ・ｒｉｓｅ】

【Ｓｈｏｔ・ｒｉｓｅ】
【Ｆｏｒｃｅ・ｒｉｓｅ】
光輝く飛蝗は光を散らし、銃から放たれた弾丸は狼となり、アリゲーターはその身を捧げる。
【Ｗａｒｎｉｎｇ，ｗａｒｎｉｎｇ】
【Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ｎｏｔ　ａ　ｔｅｓｔ】
【Ｈｙｂｒｉｄ　ｒｉｓｅ】
【シャイニング、アサルトホッパー！】
【Ｎｏ　ｃｈａｎｃｅ　ｏｆ　ｓｕｒｖｉｖｉｎｇ　ｔｈｉｓ　ｓｈｏｔ】
或人の頭上に浮かんでいた飛蝗はキーを装填したと同時に胸のオービタルユナイトから青い光で或人を照らした。
青い光で照らされた或人の姿は一瞬でライダースーツに変わり、飛蝗は頭上でその身を複雑に変形させ鎧と化した。
鎧と化した飛蝗はそのまま覆い被さりゼロワンは纏う。最後に六本の足が畳まれ変身した。それはゼロワンの新たな力。希望を照らし夢を叶える鍵、それこそが仮面ライダーゼロワン　シャイニングアサルトホッパー
【Ｒｅａｄｙ，ｇｏ！】

【Ａｓｓａｕｌｔ　ｗｏｌｆ】

【Ｎｏ　ｃｈａｎｃｅ　ｏｆｓｕｒｖｉｖｉｎｇ】

不破の放った弾丸はアリゲーターにぶつかる寸前でその起動を曲げ不破の元に青い狼の幻影を持ちながら戻る。

戻ってきた弾丸を不破は受け止め力のままに握りつぶしたと同時に粉砕された弾丸の欠片は変形し花のように咲き乱れ不破の目元には赤い涙が流れる。そして深海のような暗さを持つ花から放たれたか細い光は高速で伝わり鎧を構成する。その鎧は或人のヒーローチックなものとは違い戦うことを意識した兵器のような姿。

しかしその中には皆を守り夢を守る意志があった。

【Ｒｏｌｌｉｎｇ　Ａｓｓａｕｌｔ　Ａｌｌｉｇａｔｏｒ】

【ｌｔ　ｉｎｖｏｌｖｅｓ　ｅｖｅｒｙｔｈｉｎｇ　ａｎｄ　ｄｅｓｔｒｏｙｓ】

【Ｂｒｅａｋ・ｄｏｗｎ】

ネットは自らの半身でもあるキーを引き裂きた。呼び出されたアリゲーターは口から涎が垂れ落ちギラギラとした目付きで主の元に振り返り食らい付いた。砕かれた堕落した肉体は黒い拘束具によって繋がれ貼り付けられていく。そこにはかつて自分自身のためだけではなく誰かのために牙を研ぎ続けていた孤高の王者の姿はなく欲にまみれ獣に堕ちてしまった人間の姿があった。

そしてその姿を見た狩人達は希望と夢を背に心のままに叫んだ。
「お前を止めれるのは…」
「「俺達だ！」」
それを聞いたネットは耳を押さえ振りほどくように首を振る。まるで聞きたくないとただをこねる子供のように。
そしてネットは怒りのままに動き出す。
「目障りだァァァァァ！」
振り上げた右腕には赤い大顎が現れ振り下ろされる。しかしその一撃は威力だけで何もない。ゼロワンとバルカンは避けバルカンは腕のガントレットから赤い弾丸を撃ちまくりネットの意識を自身に向けさせる。
「頼んだぞ！ゼロワン！」
「任せてください！」
ゼロワンは大きなバスターライフル――オーソライズバスターを取り出し銃身を割りアックスモードに変え動き出す。ゼロワンは瞬間移動のように独特の後を残しながら瞬時にネットに接近しオーソライズバスターを振り下ろす。しかし寸でのところでネットは気付き掴み取る。しかしそれは彼らの計算の内だった。
「不破さん！」

「あぁ！」

バルカンは腰からショットライザーを抜き取り瞬時に構え狙いを定め七発の弾丸を放った。今までのショットライザーならばダメージは愚か衝撃すら与えることすら難しかった。しかし今のバルカンは雷が得たネットの詳細なデータ、更にアサルトウルフによって大幅に強化されている。

バルカンの放った弾丸の一発目は肩に当たり大きく反らした。2発目の弾丸はオーソライズバスターを握っていた右手に当たり手を離した。3発目と4発目はネットの脛に当たり膝をつかせた。そして大きく胸を張ることとなったネットの胸に残り3発が当たりネットは仰向けに倒れ込んだ。

「隙を与えるな！ゼロワン、畳み掛けろ！」

バルカンの怒号と同時にゼロワンはオーソライズバスターを下から振り上げネットを切り飛ばす。

ネットはボールのように吹き飛ぶが二回ほどバウンドしてから両腕を地面に突き立て無理やり勢いを殺し二人を睨み付ける。しかしその目は二人を見てはいない。食い入るように、忘れないように目に焼き付ける。目指した場所を。

「ア■■アアアア■アアア■■■■■■アア!!!」

喉からではなく腹から、魂から出てくる叫び声。その声は憎しみと悲しみで溢れか

えっていた。その為か所々発声できない声が混じっている。
　ネットは突き刺した腕を引き抜き獣のように走り出す。ゼロワンほどのスピードではないものの新幹線のようなスピードをいきなり生み出し牙を振るう。その牙はバルカンを狙ったが横にいたゼロワンのオーソライズバスターによって阻まれバルカンから手痛い反撃をもらう。しかし今度は先程のように仰け反ること無くオーソライズバスターにギジギジと負荷をかけていく。しかしそのままゼロワンではない。ゼロワンはネットのかける負荷を利用してオーソライズバスターを折り畳みバスターモードに切り替えネットの腹に０距離から構え引き金を引く。
　ショットライザーとは比べ物にすらならない重たすぎる一撃は用意にネットを地面から引き剥がし空に落とす。
「じゃｍａをすｒｕな……仮面ライダー!!」
　暴走し理性を忘却し欲望のままに動く今のネットには分かりはしない。もし、この戦いゼロワン一人またはバルカン一人であってもネットが惨敗する未来は変わりはしない。何せ今の彼には考える頭が無いのだから。
　もし彼に理性があったのなら結果は変わっていた。ゼロワンとバルカンに大きな反撃を与える事が出来た。ゼロワンｏｒバルカン一人なら勝利すらもあり得た。しかし今さら過去をましてやＩＦ（もしかして）なぞ語った所で結果は変わらない。

「これで終わらせる！そして…」

「「取り返す!!」」

ゼロワンとバルカンはアサルトグリップのボタンを力強く押しチャージを開始する。

【Ａｓｓａｕｌｔ・ｃｈａｒｇｅ】

【Ａｓｓａｕｌｔ・ｃｈａｒｇｅ】

バルカンは腰からショットライザーを抜き取り両手でしっかりと保持し狙いを定める。ゼロワンは更にグリップを握り締め押し込んだ。ゼロワンは空に跳び立ち必殺の一撃を繰り出す。

しかしネットも直ぐ様対抗するように腰のフォースライザーに手をかけ放とうとしたその時だった。

「させるか！」

バルカンの叫び声と共にバルカンはショットライザーの引き金を引き狼の頭を持つ大出力のエネルギー弾を撃ち放った。

【Ｍａｇｎｅｔｉｃ・ｓｔｏｒｍ・ｂｌｓｓｔ】

バルカンの放った弾丸は口を開けネットに食らい付いた。

「ガアアアアアアアア!!」

ネットは叫び声を上げながら空へ空へと持ち上げられていく。そしてその先には光

を纏った希望の具現化であるゼロワンが構えていた。

【Ｓｈｉｎｉｎｇ・ｓｔｏｒｍ・ｉｍｐａｃｔ】

ゼロワンの放った一撃は無慈悲にもネットを壊していく。そしてゼロワンはネットを貫いた。

力尽きたように至るところから火花を散らしながら落ちる。そして朦朧とする意識のなかネットはすがるように手を伸ばした。

バチッ!!

何かが壊れる音。そして腹部から崩れ落ちるナニか。それを最後にネットは壊れるように落ちていった。

……

……

……

……

……

宇宙を漂う棺の中でケラウノスは産み出される。その棺には人類では解析することのできなかった過去の遺物が多く使われている。
全能神(ケラウノス)の武器は鍛えられ、天から落ちた巨人は滅んだ異物と混ぜられる。そしてかつて人類のために振るわれた二つの武器も。
そして棺の中で角笛は吹かれる。すすり泣く少女と原典と共に。

太陽に獅子は吠える

仮面ライダーによるリディアン襲撃から約二週間、ようやく復旧の目処が立った。そしてネットさんの喪失も。私達は困惑しもう一人の私達は激怒していた。

やっぱりアイツは裏切り者だったんだ！見付け出してやる！その人によって大きく反応は違っていましたが皆、一つの思考でした。〝許さない〟でも冷静になり考えれば考えるほど可笑しかった。だって今まで冷静だったネットさんが人が変わったように一心不乱に走り出したのだから。奇妙でした。

でもそれでも、特にヒューマギアにたいして恨みが強かったクリスちゃんと翼さんは納得がいっていないようでかなり二人の空気が嫌なものになっていた。

「これからどうすんだよ？」

こちらの世界のクリスちゃんが聞いてくる。おまけに一緒に行動していたみんなも。

「……どうしよう」

「どうしようって、お前なぁ…」

「だが立花の言うとおりだ。雪音」

「進展無しね」

「デス」
「うん」
みんながみんな、これからどうするのかの方針に頭を悩ませてる。そんな時だった。
『リディアン内にいる全員に告げる！・またもここに仮面ライダーが近づいている！今すぐに避難及び戦闘用意！』
私達はその放送に愕然とした。だって二週間前に襲撃があったのにまた来るのだから。
でもその理由は少し考えればすぐにわかった、だって仲間は殺されている、更に此方は疲弊しきっているし何よりネットさんがいない。今を攻めない手はない。
「みんな！・行こう！・」
私の声にみんなは同じ答えを返してた。

〜〜〜

リディアン防壁前に装者達は集まっていた。全員、既にギアは纏い準備は万端だった。

そして遂に仮面ライダーはその姿を表した。青い狼とオレンジのチーターの仮面ライダーその後ろにはカメレオンのような姿をした緑色のヒューマギア達。

装者を含めたリディアンの関係者は全員驚いていた。何せ探知に引っ掛からないヒューマギアが現れたのだから。それは今まで使用してきた対ヒューマギア用の探知装置が無意味だと分からされたからだ。

「クソッ！これじゃあさすがのあたしたちでも捌ききれないぞ！」

装者側から上がる焦りの声。しかし焦ったところで何かが変わるはずもない。相手は人目にも機械の目にも移らないマギア。更には自分達を圧倒的に越えている仮面ライダーが二人。結果は目に見えていた。仮面ライダーだけならば防衛ならば出来たかもしれない。しかしそこに雑魚ではない敵が数えきれないほど大量に。たとえ切り札であるアマルガムを使ったとしても焼け石に水だろう。最悪だった。しかしそれで折れる彼女たちではなかった。

「たとえ！勝てない敵だとしても！それでも私達は引けないっ！私達はこの世界の未来を背負っているんだ！」

「行こう!!」

響の心からの声。それを皮切りに戦い(抵抗)は始まった。本来協力すらしないこちら側の響達ですらこのときはお互いに協力していた。しかし誰一人も攻撃を当てることが出来なかった。

「ど、どうして!・何で当たらないデスか!?」

「切りちゃん!」

「うわぁぁぁぁぁーーーー!!!」

ザババのコンビネーションすらも見切られ。

「ハァァァ…蒼ノなに!?」

装者達の中でも出が早い翼の攻撃もカメレオンマギアの舌によって妨害され四肢の自由を奪われる。

「翼!!」

それに動揺したマリアと奏も己のアームドギアをバルキリーによって狙撃され破壊され更にはギアの装甲すらも破壊され身ぐるみを剥がされカメレオンマギアによって組附せられた。

「みんな…！ッ！邪魔をするなぁぁぁぁぁ!!!」
響の拳はバルカンに片手で受け止められ足を出すがそれも同じ足で防がれいなされ続けた。
他のものも同じように一方的に捌かれた。
「どうして…私達の攻撃が当たらないの…！」
組附せられているマリアの口からこぼれた声にバルキリーが反応した。
「当たり前だ。私達ヒューマギアは皆アークに接続している。ヒューマギアのデータは常にリアルタイムでアークに送られそれを全ての接続しているヒューマギアにアップロードされる。つまりだ…私達ヒューマギアは戦えば戦うほど強くなる（ラーニングする）」
それは聞いていた全ての人間を絶望させるには十分だった。ヒューマギア達は努力せずとも全員が同じほど強くなる。それに限界はない。今まで装者達は様々なヒューマギアと戦った。それは彼らに餌を与えていたのだ。更には雷は全力のネットとも戦っている。つまり今のヒューマギアはネットの情報＋装者＋全人類の戦闘データが集まった究極の存在だった。勝てるわけがない。響の頭にすらその言葉がよぎった。そして響の頭部にバルカンのショットライザーが当てられた。
「さてではそろそろお前たちには消えて」
「待ちなさいッ!!」

リディアン方面から聞き覚えのある声が響く。
『何をしている!?』
皆の無線に弦十郎の声が聞こえる。そしてその声の持ち主の方を向いた。
そこには肩で息をしながら何かを握りしめているこの世界のＤｒ．ウェルの姿があった。
「ウェル!?どうしてお前が！」
この世界のクリスが驚愕の声をあげる。彼は決して前線に出るタイプの人間ではない。その証拠に彼の顔は真っ青になっていた。
「クリスっ！僕にもやらなくてはいけないことがあるのです！その為だったら僕はこの命すら投げ捨てる覚悟がある！」
ウェルの瞳には確かに死すらも厭わない覚悟が宿っていた。
「響さん！これを!!」
この世界の響は相手にしていたカメレオンマギア相手にしながらもウェルが投げた物を受け取った。
それはクリアーオレンジのプログライズキーだった。表面には『ソルライオン』と書かれていた。
「これは…？」

「それは!!僕達人類の最後の希望です!そのキーは全てを照らす鍵になります!」
　そのプログライズキーはネットが彼らに託した三つのキーの内の一つだった。そのキーからはほんのりと暖かく持っているだけで希望が湧いてくるようだった。響は無意識の内にキーのボタンを押し込んだ。
【プロミネンス】
　その起動音と共に辺り一体にとてつもない熱風を放った。響の周りにいたカメレオンマギア達はその熱風のみで体が燃え始めその形を保てずにグズグズと崩れていく。響の周辺の温度は異常に高くなり自然発火すら始めていく。しかし当の本人は汗一つ流していない。そしてその熱風は遂に仮面ライダーにすら届いた。装者達を押さえていたカメレオンマギアは吹き飛ばされ破壊された。仮面ライダーはその熱風に当たると身体中から火花を散らしながら吹き飛んでいく。
　この世界の響は弦十郎から渡されていたレイドライザーの存在を思い出し取り出した。響は取り出したレイドライザーを腰に当て装着した。
【レイド・ライザー】
　そしてキーをレイドライザーに差し込んだ。
　レイドライザーからサイレンに似た独特の待機音が響き辺りに緊張を走らせる。そして響はレイドライザー上部に設置されている赤い大きなボタンを叩き込んだ。

【Ｒａｉｄ・Ｒｉｓｅ】
【ソルライオン】
【それは太陽のように照らし希望を与える】
【It shines like the sun and gives hope】

オレンジと赤のＤＮＡのような螺旋を描いた二つの線が現れ響のギアを大きく変えた。頭部のヘッドギアはライオンを意識し響の髪は奏のように毛量が増え太陽のように輝く。両腕のアームドギアにはライオンの牙が生え揃いギラギラと反射して輝いていた。胸にはライオンの顔をもした新しい装甲が。足はブーツの爪先に三本、かかとに一本牙が追加された。ギア全体の色も変わりまさしく太陽の化身のようになっていた。

「これなら…殺れる！」

響はある程度自身のギアの変化を確認するとこのギアなら仮面ライダーにも通用すると確信し、地面を踏み抜いた。そのスピードは今までとは比べ物にもならずバルカンの懐に潜り込んだ。響は腰を捻り拳を作りそれを後ろに後ろにと引き力を込める。バルカンはここまで来てようやく懐に入られたことに気がついた。しかしそのときには既に遅し。響は貯めた拳を全身を使って突きだした。その拳からはオレンジ色の炎が溢れだしバルカンの腹部を貫くと思わせるほど衝撃を発しバルカンを吹き飛ばした。その際に灰色の何かがバルカンから零れたことなぞ誰も気づきはしなかった。

吹き飛ばしたバルカンを横目に次はバルキリーを見つめる響。その瞳は獣のように

割れていた。
　響は右腕を地面に突き立て引きずりながら走る。走る。走る。突き立てられた地面はソルの熱量によって溶かされマグマとなっていた。激しい炎と火花、そしてマグマを発生させながらバルキリーに近付きバルキリーにアッパーカットをかました。バルキリーは悲鳴を上げながら上空に打ち上げられた。
　そして今響の目の前には震えながらも立ち上がるバルカン。上空に打ち上げられたバルキリー。響はその両腕を合わせた。すると響の両手に腕のアームドギアから発せられるオレンジと赤の炎がプロミネンスのように集まりオレンジと赤に輝く小さな太陽が形成させる。その熱量は今までのものとは比べ物にならずに地面の僅かなコンクリートから鋼鉄、土すらも燃える暇もなく解かしていく。
【Ｍｅｌｔｉｎｇ　ｓｕｎ】
　そしてそれは膨大な熱波となって放たれた。バルカンはすんでのところで地面にショットライザーを撃つことで地面が崩れる反動で避けた。バルキリーも同じくショットライザーを連射することでなんとか避けれたが辺りの温度は火山の火口付近と何ら変わらない温度となっていた。
「なんだあのプログライズキーは!?」
「不破!今は逃げるぞ!」

バルキリーとバルカンはボロボロに成ながらもその場から脱した。響はそれを追おうとはせずにただ自身の拳を見ていた。その顔は笑っていた。まるで欲しかった玩具が貰えた子供のように。それは嗤っていた。